

タイトル	アウシュヴィッツの囚人医師 ... ミクローシュ・ニスリ
著者	木村, 和範; KIMURA, Kazunori
引用	季刊北海学園大学経済論集, 70(3): (1)-(123)
発行日	2022-12-31

アウシュヴィッツの囚人医師*

もくじ

日本の若い世代の皆さんへ モニカ・ライヒ
ミクローシュ・ニスリの生涯
フランチシェク・ピーベル

宣誓
回想録 一〇三九
おわりに
訳者あとがき
地図
略年表

(1)

ミクローシュ・ニスリ
木村和範(訳)**

* Miklos Nyiszli, *I was Doctor Mengele's Assistant: The Memoirs of an Auschwitz Physician*, translated from Polish by Witold Zimrowski-Koscia, Oswiecim (Poland): Frap-Books, 2010, editing and footnotes: Franciszek Piper, consultation: Marja Szeszlay (Hungary). 原著（ハンガリー語版）のタイトルは、*Orvos voltam Auschwitzban, 1946*（私はアウシュヴィッツの医者だった）である。翻訳の底本は、ポーランド語版（*Byłem asystentem doktora Mengele, Oswiecim 2000*）（私はドクター・メンゲレの助手だった）に基づく英語版である。訳出版に当たり、底本の編集者フランチシェク・ピーベル氏（元アウシュヴィッツ記念博物館歴史部長）およびモニカ・ライヒ氏（故ミクローシュ・ニスリの孫、イストラエル在住）から許諾を得た。原注はアラビア数字で示し、長い訳注は漢数字の番号を付して章末に置き、短い訳注は「」に入れて、本文に挿入した。地図と略年表は訳者による。

**本学名誉教授

日本の若い世代の皆さんへ

モニカ・ライヒ

私……は、数百万もの父、母、子どもを焼き尽くしたビルケナウの屋内および屋外の死体焼却場を目撃した者として、人類史上最も暗い出来事の記録を、いささかの誇張も粉飾もせずに真実に従って書いたことを証言する。

ドクター・ミクローシュ・ニスリは、感慨を込めてその回想録をこのような文章で書き始めています。

私の祖父ドクター・ニスリは医師でしたが、ある事情から、英語、ドイツ語、イタリア語、ポーランド語、ルーマニア語、スペイン語で翻訳出版され、世界中に読者がいる作品の作家になりました。この回想録に価値があるのは、それが文学的だからではありません。祖父は、そのようなことを狙ってはいませんでした。アウシュヴィッツ収容所での悲劇的な体験を文学的にデフォルメしようとしたわけではなく、その目で見た数々の事実を飾らずに描こうとしました。それは、ファシズムにたいする力強い告発であり、第三帝国の強制収容所でナチスが犯した恐るべき犯罪を暴いています。その迫真性のゆえに、祖父の回想録はニュルンベルク戦争犯罪裁判で検察側の重要証拠に採用されました。

何世紀の間、そして今日に至るまで、人類の歴史は宗教的、政治的理由による迫害に満ち満ちています。アフリカでもアジアでもヨーロッパでも。そして現在はウクライナでも。二発の原子爆弾は、何十万人もの無防備な日本の市民を絶滅させました。

明日を担う若い世代の皆さんには、ぜひとも祖父の著書の中から憎しみ、恐れ、許しを読み取り、時代を超えた不朽のシグナルを見い出して、人種、宗教、肌の色、政治信条にかかわらず、共に平和に生きるために闘う大志を学んで欲しいと願います。

二〇二二年一月一日 イスラエルにて

ミクローシュ・ニスリの生涯

ミクローシュ・ニスリは、一九〇一年七月一七日、ルーマニアのソムリヨ（ハンガリー名。ルーマニア名はシムレウ・シルバニエイ）で生まれた。その地で四年間、現地の小学校に通い、その後八年間、中学校に通学した。一九二〇年にクルジュ・ナポカ（ルーマニア名、クルジュとも。ハンガリー名はコロジュヴァール）の大学で医学を学び一年次の課程を修めてから、ドイツのキール大学で医学を学んだ後、ブレスラウ大学（ポーランド名はブロツワフ）で医学を続け、同大学で一九三〇年に医学博士の学位を取得した。同年ルーマニアに戻り、一九二七年に結婚した妻マルガレータ、および一九二九年に生まれた娘ツツァーナとともにオラデア（ルーマニア名。ハンガリー名はナジヴァラド）に居を定めた。そこで数年間、開業医を勤めた後、一九三七年にニスリは家族とともに、一九四〇年にルーマニアとの条約でハンガリー領となった⁽¹⁾ ヴイス・デ・スス（ルーマニア名。ハンガリー名はフェルセヴィソ）という小さな町に引っ越した。

一九四四年三月一九日、ドイツ軍がハンガリーに侵攻した後、ハンガリー国籍のユダヤ人約八〇万人の移送を準備するようにとの圧力が、新たに組閣した親独のストヤイ政権⁽²⁾ にかげられた。移送日程が計画され、一日一万二〇〇〇人のユダヤ人が五月半ばから毎日、ハンガリーから追放されることになった（一日平均四本の列車、一本につき三〇〇〇人ずつ⁽³⁾）。移送列車のほとんどがアウシュヴィッツ行きであった。移送ルートのは半分は、コシチエ、ムスナ、タルノフ、クラクフを経由した。ハンガリーからの監視兵はスロバキア国境でドイツの憲兵と交代した。

ニスリ一家もこの移送計画に入っていた。一家は、最初サピン

ツァに、次にジュラ「アダベストの南東五六六緯、現ルーマニア」に抑留され、一九四四年五月後半にアウシュヴィッツ行きの移送列車に乗せられた。ビルケナウのランプ「降車場」で妻、娘と一緒に選別されて収容所に収容された。そこでニスリは囚人番号A八四五〇番を付与された。法医学の専門知識のおかげでドクター・メンゲレの助手となったニスリは、実験のために双子と低身長症の人の死体を解剖した。ドクター・ニスリのもう一つの任務は、親衛隊員の治療とガス室や死体焼却場で働く囚人の治療であった。

ビルケナウの第一⁽⁴⁾（二）死体焼却場⁽⁵⁾ に居室があったドクター・ニスリには、収容所が最も深く隠しておきたい秘密、すなわちガス室での何千人もの大量殺人を見るときに希有の機会があった。彼は、テレジン「チエコ名。ドイツ名はテレジエンシュタット」の家族収容所から移送された数千人のユダヤ人の大量虐殺、そしてジプシー収容所の殺戮⁽⁶⁾ を目撃した。さらにまた、ゾンダーコマンド「特殊作業部隊」の蜂起とその鎮圧も目撃した。このとき彼は殺されそうになった。彼は一九四五年一月のアウシュヴィッツ撤退「いわゆる「死の行進」」を生き残り、一九四五年五月五日にエーベンゼー「オーストリア」の収容所で解放された。ルーマニアに戻ったニスリは医師として働き始めたが、その数ヶ月後に妻と娘がああベルゲン⁽⁷⁾ ベルゼン強制収容所から解放されて戻ってきた。彼は、一九四七年のニュルンベルク裁判（イー・ゲー・ファルベン社関係）に証人として出廷した。「グラビア32、116頁」

ミクローシュ・ニスリは晩年患い、一九五六年五月五日、心臓発作で死亡した。娘ツツァーナは一九八三年一月に、また妻マルガレータは一九八五年九月五日、八五歳で亡くなった。

ミクローシュ・ニスリは戦後、すぐに回想記を執筆して、一九

四六年にハンガリー語で出版し、その後多くの国で翻訳されている。

フランチシエク・ピーベル

(一) ドイツの軍勢力を背景にしたハンガリー王国は、第一次ウィーン裁定(一九三八年一月二日)によりチェコスロバキアにたいして南部スロバキア、南部カルパチア、ルテニアを割譲させ、さらに第二次ウィーン裁定(一九四〇年八月三〇日)により、ルーマニア王国には北部トランシルバニアを割譲させた。一九三〇年にオラデアで開業したニスリは、一九四四年に拘束されるまでの一四年間、国際的緊張の中、ルーマニアとハンガリーの間で国境線が変わる境界地域を移動した。第二次世界大戦後のニスリの国籍はルーマニアであるが、拘束されたとき、ニスリ一家はハンガリー国籍のユダヤ人とされた。(地図2参照。123頁)

(二) 「デーメ・ストヤイ(一八八三年～一九四六年)、ハンガリー軍大將兼政治家、一九四四年、ハンガリー首相。ホルティの反革命軍の諜報員、後にハンガリー軍属としてベルリンに滞在。一九三五年から一九四四年三月までドイツ駐在ハンガリー大使。一九四二年にストヤイは、みずからハンガリーの反ユダヤ主義の第一人者であると公言した。ナチスによるハンガリー占領後(一九四四年三月一九日)、ホルティとドイツ外務省は共同で、ストヤイをブダペスト政府の首相に任命した。ストヤイは親ナチス・反ユダヤ主義の政権を樹立した。ナチスは、ストヤイを、とくにハンガリーにおける『最終解決』を執行する上で信頼できる協力者と見なした。任命後数日も経たないうちに、ストヤイは、政府内の関係者にゲットーの構築と移送を含む厳しい反ユダヤ政策を採るよう求めた。三月二九日、ハンガリー政府の情報筋は、ストヤイ政権が反ユダヤ法を公布すると発表した。ストヤイは多くの法令に署名したが、その中には、すべてのユダヤ人に黄色いワッペンの着用を義務づけるものもあった(一九四四年三月三二日)。

ルーマニアが枢軸国から脱退した一九四四年八月二三日以降も、保守分子によってその地位を追われた一九四四年八月二四日までは、ストヤイはハンガリー首相の座にあった。一九四五年一月にソ連軍がブダペストに接近するとドイツに逃れ、一九四五年、アメリカの諜報機関による逮捕後、ハンガリーに引き渡され、重罪犯として国民法廷によって裁かれた。彼は死刑判決を受け、一九四六年に処刑された。」
Jewish Virtual Library, <https://www.jewishvirtuallibrary.org/szl-x0013-jay-d-x00f6-me-x00b0>, accessed on August 13, 2021.

(三) 移送計画推進のために一九四四年三月に、特別分遣隊を率いるアドルフ・アイヒマンがブダペストに派遣され、アウシュヴィッツ複合収容所の総司令官ルドルフ・ヘスと連携した。

(四) オシフイエンチムの基幹収容所の死体焼却場を第一死体焼却場とする番号系では、ビルケナウの死体焼却場は第二から第五までとなる。ビルケナウだけの死体焼却場についての番号系では、死体焼却場は第一から第四までとなる。

宣 誓

左に署名する医師にしてアウシュヴィッツ強制収容所の元囚人(囚人番号A八四五〇)である私、ミクローシュ・ニスリ⁽¹⁾は、数百万もの父、母、子どもを焼き尽くしたビルケナウの屋内および屋外の死体焼却場を目撃した者として、人類史上最も暗い出来事の記録を、いささかの誇張も粉飾もせずに真実に従って書いたことを証言する⁽²⁾。

アウシュヴィッツの死体焼却場の医師として、私は、死体にかんする無数の医学的・法医学的検案書を作成し、それには腕に入れ墨された私の囚人番号を付して署名しなければならなかった。この報告書には上司の親衛隊員メンゲレ⁽³⁾も署名し、世界で最も名の通った医学研究施設「ベルリン・ダーラム人種生物学・人類学研究所」⁽⁴⁾に郵送された。それらの文書が、今でもこの偉大なる研究所の書庫に存在している確度は非常に高い。この記録は文学的成功を目的としてはいない。私は医師であり、小説家ではないのだから。

一九四六年三月、ナジヴァラドにて

ドクター・ミクローシュ・ニスリ

(1) 囚人ミクローシュ・ニスリは親衛隊医官ヨセフ・メンゲレの命により人体実験のために双子と低身長症の人を解剖した。ニスリは親衛隊員およびガス室や死体焼却場で作業する囚人の医師でもあった。これらの囚人(ゾンダーコマンド「特殊作業部隊」)は、外部で他の囚人と接触することが厳に禁止されており、病棟や収容所のあちこちにある病院では治療を受けることができなかった。大量虐殺のための様々な施設の詳細を秘匿しようとしたからである。

(2) 収容所での虐殺を目撃した囚人や親衛隊員の中には、殺害された犠牲者は数百万人に及ぶと信じている者もいる。この数字は、一部目撃証言に基づくものであるが、収容所での犯罪を検証するために、最初は一九四五年に設置されたソ連の委員会が、次にポーランドの委員会(ほぼ四〇〇万人としたことによる。しかし、一九五〇年代以降、様々な国の研究者が新たに発見された収容所への移送にかなする公文書を基にして全体数を部分に分けて検証した結果、元の推定は過大であることが証明された。現在では、ほとんどの研究者はアウシュヴィッツで殺害されたのは一〇〇万人(一五〇万人であり、そのうちの大半(九〇%)はユダヤ人であったと考えている(Franciszek Piper, *Auschwitz. How many perished? Jews, Poles, Gypsies... Oswiecim 1966*))。

(3) 一九一一年三月一六日、ギュンツブルク生まれ。哲学博士、医学博士。一九三八年に親衛隊に入隊し、様々な医学関係のポストを歴任。アウシュヴィッツに赴任する前は、親衛隊第五装甲師団「ヴァーキング」に属す東部補助歩兵大隊の軍医として任官し、東部戦線に派遣された。負傷の後、強制収容所での軍務を志願した。一九四三年五月三〇日にビルケナウのジプシー収容所で医官として初めて任務に就いた。一九四四年八月にジプシー収容所が閉鎖された後、メンゲレはビルケナウ強制収容所(アウシュヴィッツ第二強制収容所)の主任医官に就任し、一九四四年一月には収容所の親衛隊病院を任せられ、一九四五年一月の撤退までその地位にあった。アウシュヴィッツ強制収容所でメンゲレは在監囚人の選別だけでなく、移送列車の到着直後、ランプでの囚人の選別を指揮した。彼を最も悪名高くしているのは、多胎妊娠の女性、水癌の患者「極度の栄養失調による口内炎の一種」、双子、低身長症の者にたいする人体実験である。戦後、彼は南アメリカに逃亡した。一九七九年にブラジル・サンパウロからさほど遠くないところで、海水浴中に発作を起し溺死した(Aleksander Lasik, "Die

回想録

一

五月の午後。暑い。有刺鉄線を打ち付けた小さな窓が一つあるだけの貨車の中には九〇人が押し込められ、不潔な体が発する汗の臭いとバケツからあふれんばかりの尿が放つ悪臭とで、ますます耐えがなくなってきた。移送列車はそのような蓋車四〇両で編成されていた。スロバキアを経てポーランド総督府⁽⁵⁾を通り、未知の目的地に向かった旅は四日が経過した。絶滅を宣告されたハンガリーのユダヤ人⁽⁶⁾にたいする初めての強制移送である。

テトラ山脈は、遙かかなたになった。ルブリンとクラクフも過ぎた。戦時中、この二都市⁽⁷⁾は、「新秩序」の差配人が占領地から連れてきたヨーロッパ中の反ファシストを一ヶ所に集めて絶滅させるための街となった。

クラクフを離れて一時間後に、私たちの列車は大きな駅に着いた。標識にはゴシック体で「アウシュヴィッツ」と書いてあったが、この地名がどこのことか私たちには分からなかった。これまでにこの地名を聞いたことがなかったからである。

貨車の隙間から外の大騒ぎが見えた。警備の親衛隊が下車し、新しい警備隊と交代した。乗務員も下車した。途切れ途切れの会話から目的地に到着したのではないかと思つた。

列車が再び動き出し、二〇分後にまた停止した。

貨車の隙間から再度、車外を窺うことができた。今いる場所は、単調なほど平坦で東シレジアに典型的な黄色がかった粘土質の土地だ。あちこちの緑色の木叢⁽⁸⁾があたりの単調さを破っている。しかし、私の目の前には地平線まで伸びる長いフェンスがあり、規

則的に並んだコンクリートの支柱には有刺鉄線が張り巡らされていた。碍子⁽⁹⁾と高電圧注意の標識から、鉄線には電気が流れている

Personalbesetzung des Gesundheitsdienstes der SS in Konzentrationslager Auschwitz-Birkenau in den Jahre 1940-1945." In: *Hefte von Auschwitz*, 1977, No. 20, p. 314-315; Helena Kubica, "Dr. Mengele und seine Verbrechen im Konzentrationslager Auschwitz-Birkenau." In: *Hefte von Auschwitz*, 1977, No. 20. [クラビア11、15頁]

(4) この研究所の中に、ヨゼフ・メンゲレの指導教授にして擁護者であった教授オトマール・フォン・フェルシユアを所長とするカイザー・ヴィルヘルム人類学・人間遺伝学・優生学研究所が設置されていた。

(5) 一九三九年九月一日のドイツによるポーランド侵攻後、ドイツとソ連はポーランドを分割して占領した。ドイツはポーランドの西部を帝国に併合し、中部ポーランドを特殊な法的状態にあるポーランド総督府とし、ポーランドはドイツ人の「生活圏」となった。ポーランド人や戦前よりポーランドに住んでいた少数民族は、ドイツ人で置き換えるために占領地から追放され、強制収容所、ゲットー、刑務所などに大量移送され、そこで殺害された。[地図1、122頁]

(6) ハンガリーのユダヤ人の大量移送は、一九四四年五月二日にアウシュヴィッツ強制収容所に到着したのが最初である。プダベスト駐在ドイツ特使エトムント・フェーゼンマイヤーの一九四四年七月九日付電報によれば、それまでは摂政「事実上の元首」ミクローシユ・ホルティの介入により移送できなかったが、四三万七四〇二人のユダヤ人がアウシュヴィッツに送られることになった。ハンガリーのユダヤ人を載せた二本の移送列車が到着したのは五月二日である。規則的な大量移送は五月一六日からである。ミクローシユ・ニスリは、これ以降のどれかの列車で移送された。(Randolph L. Braham, *The Destruction Hungarian Jewry*, New York, 1963, p. 443.)

(7) ニスリは、「アウシュヴィッツ強制収容所があったオシフィエンチムとルブリン強制収容所」[規模はアウシュヴィッツ強制収容所に次ぐと言われる]があったルブリン(別名マイダネク)のことを言っている。

ことが分かった。コンクリートの支柱がいくつもあり、それで敷地が大きな四角形に囲まれ、その中には緑色のタール紙で屋根を葺いたバラックが何百棟も建っていて、その間には長い直線の道路があった。

有刺鉄線の向こうには、縞模様の囚人服を着た人の姿も見えた。彼らは板材を運んだりシャベルを担いで縦列行進をしたりしていた。その少し先では、重い丸太をトラックに積んでいた。柵の回りには決まって三〇センチ四〇センチおきに、特徴的な造りの監視塔があった。監視塔には必ず、襟の色がフィールドグレイの制服を着た親衛隊員が一人、機関銃の銃座に付いていた。

これがアウシュヴィッツ強制収容所⁽⁸⁾である。ドイツ人は好んで KZ^{カッツ}という略語「Konzentrationslager」を使った。

それはぞつとさせるような光景であったが、しばらくの間は好奇心と期待への緊張のおかげで恐怖心は心の中になってしまうことができた。

一緒に貨車で来た同行者を見回したところ、医師が二六人、薬剤師が八人、その妻子と数人の年老いた両親がいた。疲れたように見える彼らは落胆し、持ってきた荷物の上や床に座り込んでいた。彼らは到着のときこそ動揺していたが、何か悪いことが起こりそうな予感がしたのであるうか、気を張っていた。ほとんどの子どもたちは寝ていたが、残り物、と言ってもふつうはパンの残りであったが、それを食べている子どももいた。もうパンがなくなり乾いた小さな舌でカサカサの唇を吸っている子どももいた。分厚い皮のブーツに踏まれて砂がきしんだときに出る篩^{ふるい}にかけるような音と怒鳴り声の命令で、心の中の期待が乱暴にも裏切られた。貨車の鍵が開けられ扉が音を立てて開いた。そして第一声「スーツケースと小荷物は置いたまま。持つのは手荷物だけ。」⁽⁹⁾子どもを抱えた男性が妻子の手を取って、貨車から一・五メートル下のラン

場に降りるのを手伝っていた。私たちは貨車の前に直ちに整列した。目の前には、ピカピカに磨いたブーツを履き、肩章に金色の星「正しくは銀色」が付いた若い親衛隊将校が立っていた。明らかにこの男が親衛隊員に命令していた。そのころは親衛隊の徽章^{きしょう}のことは分からなかったが、アスクレピオスの凶象⁽⁵⁾が腕にあることから、医者であることが分かった。後に、この男が親衛隊大尉であることに気づいた。その名はアウシュヴィッツ強制収容所主任医官⁽⁹⁾ドクター・メンゲレ。移送列車が到着するたびにラ

(8) オシフィエンチム「ポーランド語表記、アウシュヴィッツはドイツ語表記」にあるアウシュヴィッツ強制収容所 (Konzentrationslager) は、被占領国ポーランドの最初の強制収容所として一九四〇年六月一日に開所した。それから二年と経たないうちに拡張され、史上最大規模のナチス強制収容所となった。当初、アウシュヴィッツ強制収容所はオシフィエンチムの基幹収容所であった(一九四三年一月二二日以降の名称はアウシュヴィッツ第一強制収容所)。一九四二年に新しい収容所がブジェジナカ/ビルケナウ「表記はポーランド名/ドイツ名の順、以下同じ」に建設された(この収容所の一九四三年一月二二日以降の名称はアウシュヴィッツ第二強制収容所)。さらに収容所がもう一ヶ所(モノヴィチエ/モノヴィッツ)に建設された(この収容所の一九四三年一月二二日以降の名称は、付属収容所と合わせてアウシュヴィッツ第三強制収容所)。一九四〇年から一九四二年春までは、アウシュヴィッツに移送された大多数とそこで殺害された多くはポーランド人であった。アウシュヴィッツへのユダヤ人の大量移送は一九四二年の春に始まったが、それは、ヨーロッパにいる一〇〇万人のユダヤ人の絶滅を狙った「最終解決」の一環であった。一三〇万人がアウシュヴィッツに移送された。その内訳はユダヤ人一〇〇万人、ポーランド人一四万人、残りの二万三〇〇〇〇人はペラソ連軍の捕虜一五五〇〇〇人であり、残りの二万三〇〇〇〇人はペラルシ人、ロシア人、ウクライナ人、チェコ人、フランス人、ユーゴスラビア人、ドイツ人、オーストリア人などである。

(9) 駐屯地の主任医官は、アウシュヴィッツ強制収容所の医療サービ

ンブに立つ選別責任者だった⁽¹⁰⁾。

選別が始まった。親衛隊員は男と女子どもに分けた。一四歳未満の子どもは母親と一緒にだ。こうして列車の前には二つのグループに分けられた長蛇の列ができた。呆然としたのはもつともだ。あつという間に、家族がバラバラになってしまったのだから。

親衛隊員は私たちの問いに穏やかな口調で「心配ご無用。これからシャワーを浴びて、消毒する。それが、ここの流儀だ。また、家族と一緒にされる。」と言った。

四〇〇〇人の一団⁽¹¹⁾が選別されていたときに、辺りを見回すことができた。貨車の壁の隙間越しにちらりとしか見えなかった景色が夕日に照らされて、劇的なまでに迫ってきた。貨車の中にいたときよりも、もつとたくさん見ることもできた。最初に飛び込んできたものに、目が釘付けになった。とてつもなく大きい赤レンガの二階建て建造物⁽¹²⁾である。さしずめ工場と言ったところか。ところが、これはまったく特殊な工場の煙突であった。驚いたことに、数層上まで火柱を上げていた。煙突の四隅には避雷針があつた。かくも激しい炎で燃えるのは、地獄のかまどか。それが何か、すぐに答えが分かった。死体焼却場だ。もう少し経つてから、さらに分かったことがある。数本の木に隠された建物が三分の一くらい見えた。どの建物の煙突からも炎が吹き出していた⁽¹³⁾。私の方にそよ風に乗った煙が流れてきた。毛髪と死体を焼くときの吐き気をもよおす刺激が鼻をついた。低品質の動物性脂質で作られた教会の口ウソクの臭いに似たアクロレイン⁽¹⁴⁾が、肉体を燃やすときに出ているのだ。

これはどういふことかとしばし考えたが、すでに選別が次の段階に進んでしまった。男、女、子どもが一行になって、選別係の前を通り過ぎた。選抜担当医官(ドクター・メンゲレ)の手の動きによって、ある者は左、他の者は右と二つのグループに分けら

れた。左側に行ったのは一四歳未満の子どもと一緒に女性の他に、主として老人、体力がなさそうな者、疲れて見える者であった。

右側のグループは仕事に適していると思われた人たちであった。私は、妻と一四歳の娘もこの右のグループに入ったことに気づい

スを担う第五部(この元に医務課、齒課、薬剤課の三課がある。)の業務全般にかんする責任者でもあつた。各課には、それぞれ囚人係と親衛隊員が置かれている。医務課は、親衛隊員を診察する親衛隊医官と囚人を取り扱う親衛隊医官で構成されるが、後者は、現実には人体実験や死亡診断書の偽造にも関与した。親衛隊医官の補助要員として親衛隊看護婦がいた。囚人にたいして本当に治療を受けるわずかなチャンスを与えたのは、病舎およびいわゆる収容所病院にいる仲間の囚人医師であつた。

⁽¹⁰⁾一九四二年以降は、アウシュヴィッツに移送されたユダヤ人は、ランプで下車すると、すぐに選別された。この選別の目的は、新規到着者を労働するに足る体力がある者とガス室に直行する者に分けることである。最初のガス室は一九四一年の夏に基幹収容所に建設された。一九四二年に、さらに二つのガス室がビルケナウ強制収容所に建設され、その後、この施設が建て替えられ、一九四三年には近代的な四つのガス室と死体焼却場が作られた。ユダヤ人の他に、ポーランド人、ジプシー、ソ連軍の捕虜がそれぞれ数千ずつ、このガス室で殺された。

⁽¹¹⁾一九四四年五月六日に終わったワイーンの会議では、一本あたり三〇〇〇人として毎日四本の列車をハンガリーから出発させることが決まった。列車は、それぞれ四五両の貨物車で編成されることになった。

⁽¹²⁾アウシュヴィッツの死体焼却場は平屋建てであつた。第一(二)死体焼却場と第二(三)死体焼却場の屋根裏部屋には、一九四四年の中頃から、ゾンダーコマンドが居住した「死体焼却場にかんする二つの番号系については訳注四、4頁参照」。

⁽¹³⁾ビルケナウ強制収容所には四棟の死体焼却場があつた。第一(二)死体焼却場と第二(三)死体焼却場の煙突は、それぞれ一本であり、第三(四)死体焼却場と第四(五)死体焼却場の煙突は二本ずつある。

た。私たちは家族どうして話し合えなくなり、ただ手を振るだけだった。

赤十字のマークを付けたワゴンが何台か来て、重病人、高齢者、病弱者、精神障がい者を集めた。私の同僚で高齢の医師数名が手を貸してほしいと頼んだところ、トラックに乗せられた。まずトラックの列が動いた。左側のグループが五列に並んでそれに続き、数人の親衛隊員の付き添いでゆつくりと行進した。数分後には彼らは木叢こぶちの向こうに消えていった。右側のグループは、その場に留まった。

ドクター・メンゲレは、この右側のグループにたいして医師はすべて前に出ると命令した。彼は前に出た五〇人くらいの医師に近づき、ドイツの大学で医学を修め、死体にかんする専門知識を有し、法医学に通じている者を探していると言った⁷⁰。

「正規の資格を持っていないけれども……。」
と言つて、曰くありげな仕事をした。

私は同僚を見回した。そのような資格を持っている者が、ここにいるのだろうか。おそらく恐ろしさのあまり怖くなったのである。誰一人、前に出る者はいない。だが、私はもう決心していた。えい、ままよ。私はみんなから離れて、ドクター・メンゲレの前に立ち、名を名のった。質問は微に入り細に渡った。どこで医学を修めたか、どこか、何という教授の元で剖検を学んだか、法医学の業務に携わる権限を受けた公的機関はどこか、この分野での実務経験はどれくらいか、などなどである。彼は、直ちに自分の側に立てと命令した。私の答えに満足したに違いない。私の同僚たちは、元の右側のグループに戻れと命令された。彼らは死刑の執行が一時的に猶予され、収容所に通ずる道を歩いていった。そのときは知らなかったことであるが、今は知っている。あの数分後には左側のグループが死体焼却場に通ずるゲートを通過し、

そこから戻ることはなかった。

(五) ギリシア神話の医神アスクレピオスの杖には蛇がまわりついている。

(六) アルデヒドの一種で、揮発性が非常に強い。

(七) 最初の選別では、ニスリはモノヴィッツ強制収容所で「コンクリート作業員」として配属され、そこで二週間弱の強制労働の後、一九四四年七月二十七日に二名の医師とともにアウシュヴィッツ第二強制収容所（ビルケナウ強制収容所）のB II f収容区に異動した（Miklós Nyzszi [Übersetzt von Angelika Bihari], *Im Jenseits der Menschlichkeit: Ein Gerichtmediziner in Auschwitz*, Herausgegeben von Friedrich Herber, Bearbeitung der 2. Auflage: Andreas Kilian und Friedrich Herber, Berlin, 2005, S. 159, グラビア31参照, 115頁）。

右記の回想録ドイツ語版では、ニスリがモノヴィッツのことに言及していないのは「ドラマツルギー的な理由」によると指摘している（*a. a. O.*, S. 8）。ペンギン・モダン・クラシックス・シリーズの一冊として刊行されたニスリの回想録（英語版）の序文でリチャード・J・エバンスは、「おそらく話を単純化するために、回想記からは」のことを省略したのであろう。」と述べている（“Introduction” by Richard J. Evans, in: Miklós Nyzszi, *Auschwitz: A Doctor’s Eyewitness Account*, Translated by Tiebere and Richard Seaver, Introduction by Richard J. Evans with an Afterword by Bruno Bettelheim, London, Penguin Books, 2012, p. viii）。



グラビア1 ランプ(1) : 1944年親衛隊撮影
左手奥には正門(「死の門」)が見える。



グラビア2 ランプ(2) : 1944年親衛隊撮影



グラビア3 ランプ(3) : 1944年親衛隊撮影
上方左右隅のあたりに第1(2)死体焼却場と第2(3)死体焼却場の建屋がある。



グラビア4 ランプ(4) : 1944年親衛隊撮影



グラビア 5 ランプ(5) : 1944年親衛隊撮影



グラビア 6 ランプ(6) : 1944年親衛隊撮影



グラビア7 選別(1) : 1944年親衛隊撮影



グラビア8 選別(2) : 1944年親衛隊撮影



グラビア9 選別を終えて(1)：1944年親衛隊撮影



グラビア10 選別を終えて(2)：1944年親衛隊撮影

二

私は、行く末を思って、ランプにぼつねんと立っていた。考えていたのは、若い頃の最も素晴らしい数年を過ごしたドイツのことだ。星が瞬き始めた。北斗七星が空高く頭上に見えてきた。まるで故郷のナジヴァラドにいるようだ。涼やかな夕方のそよ風が、第三帝国の死体焼却場からの死体を焼く臭いとアクロレインの悪臭を運んでさえこなければ、気分は爽快になったことである。

コンクリートの支柱に取り付けられた、何百ものアーク灯がまぶしい。輝かしいほどの光の向こうは、物音一つしない。重苦しい暗黒に包まれた収容所のバラックのシルエツトがかすかに見える。まるで濃い霧に包まれているようだ。

ランプはほとんど無人となり、縞模様の囚人服を着た数人が貨車から放置荷物を取り出し、トラックに積み込むときの音だけが



グラビア 11 ヨゼフ・メンゲレ

静寂を破った。ほんの少し前までは私たちと運命を共にした空の貨車は、薄明かりの中で次第に見えなくなった。

ドクター・メンゲレは、最後の指示を部下の親衛隊員に与えてからオベルに向かい、運転席の隣に座り、私に乗れと命令した。私が座った後部座席の隣には、親衛隊の下士官が一人乗った。オベルが動いた。

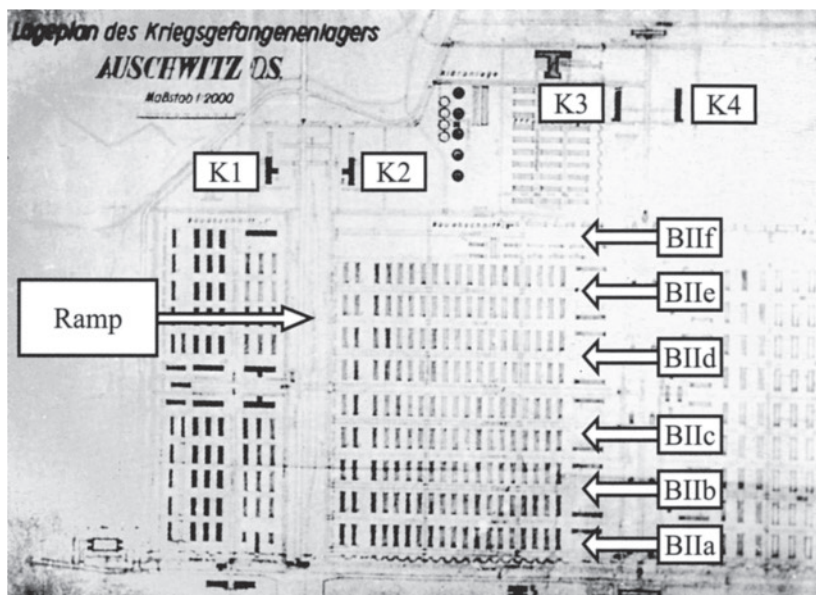
春の雨が降った後で、所々ひどいデコボコで粘土質の収容所の中の道路を走った。収容所の周りを囲む有刺鉄線がきらきらと輝き、縞模様を作っていた。短いドライブが終わり、閉じたゲートの前で車が止まった。親衛隊下士官が急いで、収容所の衛兵詰所になっている指揮官事務室から飛び出してきて、言われるままにゲートを開けてドクター・メンゲレの車を通過させた。そこから道の両側にバラックが並んでいるメイン・ストリート⁽¹⁴⁾をさらに数百メートル進んで、ひととき目立つ建物の前で止まった。

ドクター・メンゲレが下車したので、私も続いた。十分すぎる時間があったので、ドアにある「事務室」という看板をじっくり読んだ。その中に入ると、縞模様の囚人服を着た男がそれぞれの席に着いていた。顔つきは知性的である。無言のまま、すぐに彼らは直立して気をつけの姿勢を取った。

ドクター・メンゲレは、そのうちの一人、五〇歳ぐらいの、頭を丸めた男性のほうを向いた。私は数人が離れて立っていたので、話の内容は聞き取れなかった。B II f 収容区⁽¹⁴⁾のこの先任医師

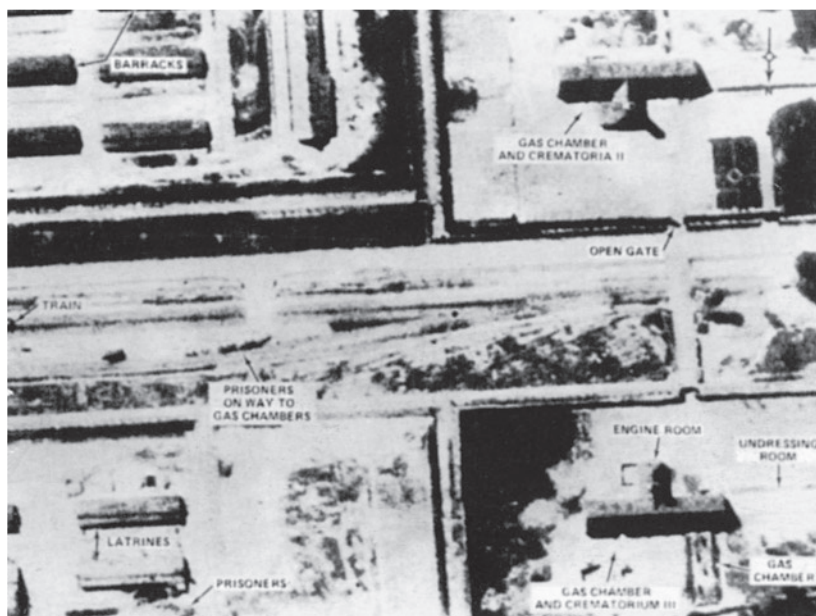
(14) ビルケナウの収容所の敷地は、三つの建屋区に分割されていた。

第一建屋区(B I 建屋区)はランプの左側「南」にあり「グラビア 12」、さらにB I a 収容区とB I b 収容区に分割された「次頁のグラビア 12」では、第一(一)死体焼却場(K I)の東。ランプの右側「北」の第二建屋区(B II 建屋区)は、七つの収容区に分割された(B II a 収容区、B II b 収容区、B II c 収容区、B II d 収容区、B II e 収容区、



グラビア 12 ビルケナウ収容所見取図 (右が北)

上方(西側)に4棟の死体焼却場(第1(2)死体焼却場(K1)~第4(5)死体焼却場(K4))がある。



グラビア 13 第1(2)死体焼却場と第2(3)死体焼却場(下が北):連合軍撮影

右側に写るビルケナウの第1(2)死体焼却場(上)と第2(3)死体焼却場(下)。中央部分がランプ(左側に写っているのは、死体焼却場(ガス室)に向かう人の列)。

が領いた。後日、彼が囚人医師のドクター・ロマン・ゼンクテラーだと分かった。彼は、他の囚人の席の後ろにある机を私に与えた。私は詳細な履歴を求められ、それを大きな登録票と検索用カードに記載した。私を見張っていた親衛隊の下士官にその検索用カードを渡して、部屋から退出した。ドクター・メンゲレが通り過ぎたとき、私は本能的にお辞儀をした。これを見たドクター・ゼンクテラーは悪意ではないが皮肉を込めて、一言、ここはサロンではないぞ、強制収容所だと言った。

私たちは「浴場・消毒室」という看板が掛かった三番目のバラックに行き、そこで個人カードと一緒に身柄を別の親衛隊員に引き渡された。囚人服を着た二人の男が近づき、ポケットの中を調べてから、服を脱げと言った。それから理髪師が来て、頭をすっきり刈った。次にシャワーを浴びるよう命令された。塩化カルシウム溶液を頭から振りかけられ、刺されたような痛みで数分間は息ができなかった。脱いだ服の代わりに灰色の上着と黒いズボンを別の部屋で受け取った。ところが、靴だけは戻された。それは、あの塩化カルシウム溶液の桶に浸かっていた。服を着てみて、その服の元の持ち主であった仲間の囚人のことが知りたくなった。

囚人の一人が私の左袖をたくし上げ、私の検索用カードを見て、ポールペン状の器具で前腕の皮膚をとでも巧みに素早く何回も何回も刺した。皮膚が刺されてできた青い斑点がにじんで広がった。その囚人は、炎症はすぐに治り、数字が鮮明に読めるようになると言って私を慰めた。これで、ドクター・ミクローシユ・ニスリはこの世に存在しなくなった。A八四五〇番というただの番号になったのだ⁽¹⁵⁾。私は、一五年前に、プレスラウ「プロツワフ」にあるフレデリック・ヴィルヘルム大学の学部長が厳肅に学位を授与し握手した後、将来の成功を祈ると言ったことを思い出した。

三

私は、不思議な感情に捕らわれた。しかし、これまでの人生で流れに身を任せたり自暴自棄になったりしたことはない。今や新しい状況に適用しなければならない。……そう、私は絶望などしなかった。感傷的になることはできなかった。弱くなるわけにもいかなかった。その上、自分の間は状況がそう悪くはならない

B II f 収容区、B II g 収容区〔身の回り品を保管する倉庫と囚人宿舎がある区域、通称「カナダ」、第二(三)死体焼却場(K 2)と第三(四)死体焼却場(K 3)の間〕。さらにその右「北」には、途中までしか完成しなかった第三建屋区(B III 建屋区)〔通称「メキシコ」〕があった。これらの収容区の中には固有の仕組みをもつ組織が入っていることもあり、その場合には収容区の呼称が収容所の公式名称としても使用された。たとえば、B II f は収容区の名前であるが、それとともにB II f 収容所(これは病院収容所)と言うようにも使われた。〔ビルケナウの三つの区域(一区、二区、三区)を三つの建屋区(B I 建屋区、B II 建屋区、B III 建屋区)としたのは、アウシュヴィッツ総司令官ルドルフ・ヘスである(一九四三年五月一八日)。この日からアウシュヴィッツ基幹収容所の既設収容区はA I 収容区、新設の第七号棟がある収容区はA II 収容区と言われるようになった(Czech. *Kalendarium*, S. 497f).¹⁾〕

(15) アウシュヴィッツ強制収容所の囚人には、番号が付けられた。およそ四〇万番までの囚人番号がいくつかに分類されて発行された。最も多かったのは、通常連番で三〇万番までの番号が男女の囚人に振られた。ジプシイの男女にはZが、再教育を要する囚人にはEHが、そしてロシアの捕虜にはRが、それぞれ付けられた。一九四四年まではユダヤ人の囚人は通常連番で登録されたが、一九四四年五月以降、ユダヤ人には男女ともにAが付けられた。Aが付く連番は二万番までが発行されたが、その後はユダヤ人男性にはBが付く連番が付けられた。AとBの文字の後に入れ墨で番号が彫られた。〔EHはErichshäftlingeの略。〕

ことも分かった。ドクター・メンゲレは医師としての私の技術(ぎじゆ)を必要としていた。ドイツ軍が召集したドイツ人法医学者から業務の一部あるいは全部を引き継ぐために現地に派遣されるためか。それが最もありそうである。こう確信したのは、私には囚人服の代わりに立派な背広が、おそらくドクター・メンゲレの指示によつて支給されたからである。私の将来の仕事にはひとかどの格好がふさわしいとでも考えたのであろうか。もちろん、これは臆測(おそわ)に過ぎない。本当の未来は知る由もなかった。

親衛隊の別の警備兵が私の検索用カードを手にして、バラックの反対側に建つ一二号棟に私を連れていった。その建物の奥行きは一〇〇ほどであった。その中には、長い廊下があり、その両側には粗末な丸太と板で作られた三段の寝棚があり、病気になる囚人であふれていた。私がいるのは、収容所病院(B II f 収容区)一二号棟である。

親衛隊員は、急いで寄つて来た年配で丸顔の囚人に私の検索用カードを手渡した。その囚人はカードを受け取るまで、気をつける姿勢を取っていた。親衛隊員が退出した後、私はその囚人と握手して互いに自己紹介した。彼は一二号棟のブロック長(1)であることが分かった。彼は大きい部屋からカーテンの仕切がある小部屋に招き入れ、座るようにと言った。囚人のならいで、彼は自分のこれまでを語り始めた。

彼は第三帝国(1)の国民であった。「民間人」で五〇歳のときの生業(なまわい)は、金庫破りであった。いつも一人で働いていた。彼の最後の「仕事」は大きなヤマであった。白昼、デュッセルドルフにある金融機関の金庫室に侵入した。彼は疎遠になっていた妻が別れてくれるまでの三年間、戦利品で生活することができた。そして、モアビット刑務所「ベルリン」にあり、現在はその跡地が公園」に一〇年間いた。判決が下りて釈放されたが、刑務所の門を出た所

で、ゲシュタポが待っていた。すぐにアウシュヴィッツ強制収容所に押送された。四年前のことだ。

縞模様の囚人服のちようど心臓の辺りには、緑色の三角形と囚人番号が書かれた白い布が縫い付けられていた。強制収容所では緑色の三角形は刑事犯を意味する。彼は、囚人の色分け制度を説明してくれた。赤色の三角形は政治犯、薄紫はエホバの証人で、住所不定者と売春婦は黒、そしてピンクは刑法第一七五条に基づいて起訴された同性愛者(16)である。

すでに真夜中(まよなか)も過ぎていて疲れているはずだったが、好奇心で目が冴(さ)えていた。私はこのブロック長の一語一語にひたすら耳を傾けた。この強制収容所の複合的で組織的な構成に堪(た)える彼の総合的洞察は、非常に貴重であった。彼は全収容区の収容所司令官(1)の名前を知っていて、「顔役」、すなわち特別の職務に就き特権をもった囚人とは懇意(こんい)だった。アウシュヴィッツ強制収容所が労働収容所ではなく、第三帝国最大の絶滅工場であることが分かった。バラックと収容所病院で毎週行われる選別について聞いたからである。選別の後、犠牲者はトラックに積み込まれ、数百(1)人向こうの死体焼却場に行くらしい。

(16) 第三帝国の法律によれば、同性愛は犯罪である。同性愛者はすでに戦前でも強制収容所に送られていた。

(17) 収容所司令官(基幹収容所「アウシュヴィッツ第一強制収容所」では保護拘禁収容所司令官と言う)は、特別な収容所を設置する収容区(または付属収容所)の囚人を統督する指揮官である。ビルケナウ強制収容所のいくつかの収容区には、収容所司令官が配置された(たとえば、女性収容所、男性収容所、ジプシー収容所)。このポストに就いたのは親衛隊の将校(比較的小規模の付属収容所では親衛隊下士官)であった。収容所司令官/保護拘禁収容所司令官は収容所総司令官が統督した。

説明を聞いて、収容所生活の全貌が明らかになった。八〇〇人ないし一〇〇〇人の囚人が、家畜小屋よりも狭いバラックに押し込められていた。囚人は互いの頭、背中、足の上に重なり合っており、悲惨な状態で短時間しか睡眠できなかった。

夜の静寂は、日の出前の朝三時に終わった。役付の囚人がみすばらしい仲間の囚人を棍棒で叩き起こした。囚人全員がバラックから追い出され、軍隊式に整列させられた。こうして、強制収容所の日課の中で最も非人間的な課業の一つである点呼が始まった。……囚人は五列縦隊に並んでいた。ある役付囚人が、最も背の高い囚人を最前列に、最も背の低い囚人を一番後ろの列に並ばせた。それから別の役付囚人が来て、囚人を棍棒で殴り、背の低い囚人を前に、背の高い囚人を後ろに回した。最後に、洗いたてでアイロンの効いた制服を着た、栄養満点のブロック長がバラックから出てきた。彼は、ナポレオンをまねたポーズで囚人の列の前に立ち、しくじりを咎めようとして、じつくり観察した。もちろん、いつもの通り何かが見つかった。すぐさま行動を起こした彼は、握りしめた拳でメガネを掛けて最前列にいた数人の男を激しく殴り倒し、一番後ろの列まで押し出した。何故そうなったのか。それは誰にも分からない。そのような質問をした者は誰もいない。強制収容所では、他人を迫害する理由を理解しようとする者は一人もいなかったし、迫害する者からの説明もなかった。

このようなことが何時間も続いた。囚人の人数が数えられたのに、今度は逆の順序で数え直され、次に前列の者が後列に移動し、逆に後列の者が前列に移動するということを一五回も繰り返される。このようなことが、しばしばあった。列が乱れていると、バラックの囚人全員が腕を上げたまま三〇分間しゃがんでいなければならなかった。疲労から体がぐらついた。アウシユヴィツの朝は、夏でも冷え冷えとした。薄い木綿の囚人服は雨や寒さから

守ってはくれなかった。その上、点呼はいつも夜明けに始まり、親衛隊員が到着する七時になっても終わらなかつた。

ふつうのブロック長は親衛隊にたいして卑屈なまでにおべっかを使っていた。ほとんどのバラックではそのポストは、緑色の三角形のワツペンを付けた凶悪犯であった。バラックにいる囚人の員数を、いつも気をつけの姿勢で報告していた。親衛隊のブロック司令も最前列を見渡し、整列する囚人の数を数え、その数を記帳した。実際に毎日五人か六人、日によっては一〇人以上が死んで入っていた。点呼の間中、死体は一番後ろに置かれた。囚人が生きていようと死んでいようと、そのバラックの囚人数は登録簿と一致していなければならないのだ。とくに多くの囚人が死んだ場合には、死体を集めるための荷車が見つからないことがある。そのようなときでも、最終的に運び出され登録簿から抹消されるまで、死体は毎日、点呼広場にいなければならないがなかつた。

ブロック長からすべてを聞いても、私は決断を悔いなかつた。勇気をもってドクター・メンゲレの要請に応じようとしたので、さもなければ避けられなかつた運命から逃れることができたからだ。私はドクター・メンゲレが用意した医師としての仕事をした。だから、バラックや検疫収容所に飲み込まれるようなことはなかつた。人間としてのうわべを保つ背広に感謝して、その晩はシーツを敷いた一二号棟の医師専用室で寝た。

ここでは起床は朝七時である。私を含む医師と病舎の全スタッフバラックの外に集合した。親衛隊員が現員を確認するが、三分とはかからない。夜間に死んだ者を含めて、仕切りのある小部屋にいる病気の囚人も数えられる。死体は、まだ生きている囚人のかたわらに置いておかなければならなかつた。

朝食は、知り合いになつた同僚と一緒に医師専用室で摂つた。

一二号棟の医長⁽¹⁸⁾は、シュトラスブルク大学の教授であったドクター・ロベルト・レヴィイで、その助手はザグレブ大学「現クロアチアの首都」の教授、ドクター・グロスである。二人とも、研究成果が世界中に知れ渡っていた内科医であった。

この二人の医師は、危険を顧みず疲労ものとかは、自身の悲劇には目もやらず、医療器具がない、医薬品もない、包帯を消毒したり滅菌したりするものもないという中にいた。それでも、飢え、渴き、虫刺され、殺人的な重労働などが四、五週間も続き、肉体が悲鳴をあげてしまったアウシュヴィッツの犠牲者たちを治療し、痛みを和らげようとした。すでに病気になった人には何と言えはいいのだろうか。病舎にたどり着いたときにもう体が言うことをきかなくなってしまった人には、何と言えはいいのだろうか。人間であり続けることが難しい場所、私の同僚は並外れた人物であり、また優れた医師でもあった。彼らはただ善き医師たらんとしたのである。

この二人が目を見張るほどの医師であったことは、六人の医師団が一生懸命彼らに従っていたことから分かる。この中に、フランスとギリシアから来た親切で思いやりのある医師がいた。これまでの三年間、彼らは収容所で、おがくずを加えた粟粉を焼いたパンを食べてきた。彼らの両親、妻、子どもたちは、到着直後に殺された。せつなく右側の列に並ぶように言われた親族でさえ、三、四ヶ月とは生きていられなかった。ついには選別されて、バラックから死体焼却場に行った。

これらの医師たちは、自分の運命が残酷で絶望的であることを知っていた。それにもかかわらず、死にそうな人たちを一生懸命に助けようとした。だが入院しても、患者は死んでしまった。収容所では本当の重症患者でなければ、入院できないからである。…… 体重が三〇^〇ポンド未満の、骨と皮だけの生ける骸骨、広範囲に

巨る蜂窩織炎^{フレグモネ}「皮膚の傷から侵入した細菌によって起こる皮膚炎」に冒された体、空腹で腫れた唇、慢性的な下痢で肌が黄色に変わった者、これが収容所病院の患者である。収容所付の医師が助けなければならなかったのは、このような人たちであった。

(八) ブロック内の囚人管理に絶対的権限をもつ囚人、個室が割り当てられる。

(18) 医長は、病舎の医療関係者(医師と看護師)および事務方(幹部)と書記を統督する病舎付の医師である。

四

私にはまだ仕事がなかったので、フランス人の医師数名がBⅡ収容区を案内してくれた。最初に目に飛び込んだのは一二号棟に付属する木造の小屋だった。その中には厚い板を天板にした粗末な机が一つ乱雑に置かれ、椅子が一脚とその後ろには、解剖用の器具を入れるための仕切り付きの木製の箱があり、隅にはブリキのバケツがあった。それが、この小屋の中にあつたもののすべてであつた。案内してくれたフランス人医師の説明によれば、収容所病院の解剖室はこれだけで、長らく使用されてはいなかった。今のところ、この収容所には解剖できる専門家はいない。ここに私があることは、この解剖室の再稼働にとっても関係がありそうだと確信した。後ではっきりしたが、ドクター・メンゲレは解剖部隊を編成するつもりだったのである。

幻想は打ち砕かれた。こんな粗末な収容所的小屋ではなくて、近代的で設備の整った解剖室での剖検を想像していた。これまで私は片田舎から各地に呼ばれて、掘り起こされた遺体や殺害されたり自殺したりした人の遺体を解剖したが、かくも原始的な環境のもとで、かくも不十分な器具で仕事をしたことはなかった。

もちろん、性格上、私は即座に状況を理解した。唯一理解できなかったことは、お話にならないほどに汚い小屋で仕事をするのに、新調の背広が支給されたのはどうしてか、ということであつた。実はこの矛盾にはもっと深い意味があつたが、そのときは知る由もなかった。

私たち一行は、別の囲いの柵越しに、隣接する収容区の中をじつと見た。そこかしこを走り回り、遊んでいた裸で浅黒い子どもたちで一杯であつた。色とりどりの服を着た、美しいクリオー

リヨ(註)のような顔つきの女性がその中にいた。同じ囲いの中には、老いも若きも上半身裸になつた男性がいて、地べたに座り込んだり、立ち話をしたり、子どもが遊ぶのを見たりしていた。

これが有名な「ジプシー収容所」¹⁹⁾であつた。第三帝国の人種差別主義者は、ジプシーを劣等カテゴリーに入れて、彼らがドイツ民族の純粋性を脅かしていると宣伝した。その結果、ジプシーはドイツ管理下の居留地からかき集められ、ここに移送されてきた。彼らはカトリックだったので、家族一緒に暮らす特権があつた。老人、若者、子どもは、囲いの中にいて好きなようにしていた。全部で四五〇〇人くらいがいた。彼らは働く必要がなかったが、近くのユダヤ人収容所やそのバラックを監視する任務が与えられ、想像を絶する残忍さでその権限を行使した。

実験棟はジプシー収容所からの「好奇」の目にさらされていた。実験室の長は、プラハ大学の教授にして世界的に著名な小児科医のドクター・バートルト・エプシュタインであつた。強制収容所の囚人となつて四年が経つていた。ドクター・エプシュタインの助手は、パリ大学医学部准教授のドクター・シャルル・シジスマン・ペンデルであつた。

その研究は三つの分野に分かれていた。第一は、カナダでの五つ子(註)の誕生以来、大衆の心を驚おどかみにした当時流行の双子の研究である。第二は、身体の成長阻害にかんする生理学

(19) 国家保安本部 (KSHA: Reichsicherheitshauptamt der SS) が発出した命令により、一九四三年一月二九日、ドイツ、ポヘミア・モラヴィア保護領のほか、第三帝国が直接併合した地域で、およそ二万三〇〇〇人のジプシーが拘束され、アウシュヴィッツ強制収容所に移送された。彼らは特別な家族用収容所 (BⅡe 収容区) に抑留された。この収容所は一九四三年二月に建設され、一九四四年八月に閉鎖された。全部でおよそ二万人のジプシーがここで死んだ。

的・病理学的研究である。第三は、顔面や口内が壊疽^{えそ}する水癌^{スイガン}「極度の栄養失調による口内炎」の原因と治療法の研究である。ふつうなら、このひどい病気は稀に、しかも散発的にしか発生しない。しかし、ジブシー収容所では、子どもたちの間で水癌^{スイガン}が流行していると言われていた。どうやら、研究の結果が出ていたようだ。ジブシーの子どもたちの大部分は梅毒に冒されていた。チフス、ジフテリア、猩紅熱、はしか、栄養失調、これらもすべては生活条件のせいである。これらの病気はチェコ人、ポーランド人、ユダヤ人の収容所にいる子どもたちにも広く見られるが、壊疽を引き起こすということはない。それなのに、水癌^{スイガン}の主たる原因が梅毒と推認されたのである。……この推論は、水癌^{スイガン}が主として栄養失調、猩紅熱、チフスによって発症するという、当時の医学界の常識とは矛盾している。

ドクター・メンゲレは実験棟を毎日訪問した。実験に強い関心をもつこの男は、二人の著名な医師と一緒に、図表や実験結果の観察図を描く才能に恵まれた画家のダイナ・バビット^(二)を連れてきた。彼女は三年前にプラハからこの収容所に来た。彼女もまたドクター・メンゲレの作業員としてアウシュヴィッツで特別待遇を受けていた。

(九) 西インド諸島、中南米、インド洋西部などで生まれたフランス人やスペイン人。

(一〇) 一九三四年五月二八日にオンタリオ州でディオクヌ家^(一)に生まれた五つ子姉妹。

(一一) Dina Babbit、一九三三年～二〇〇九年。ドクター・メンゲレがその画才に注目して絵画で記録に当たさせたチェコスロバキアの囚人画家。当時の写真技術ではジブシーの肌の色を十分に再現できないことから、その肖像画を水彩で描かせた。戦後その水彩画が六枚(後

に「ならに一枚」発見され、「アウシュヴィッツ」ビルケナウ記念博物館(Memorial and Museum Auschwitz-Birkenau: Former German Nazi Concentration and Extermination Camp)が購入・展示した。バビットはその水彩画の返還を請求した。たとえば以下を参照。①「Dina Babbit, " by Good Times Staff, on February 17, 2005 (<https://www.goodtimes.se/dina-babbit/>)」②NPR (National Public Radio) に「Auschwitz Prisoner Fights to Recover Her Paintings, November 30, 2006" (<https://www.npr.org/2006/11/30/6561181/auschwitz-prisoner-fights-to-recover-her-paintings>, accessed on November 11, 2022)」。なお、③絵画の返還請求にたいする「アウシュヴィッツ」ビルケナウ記念博物館」の声明(「News: EU Summit: Better Protection for Memorials (30-06-2009)」)も参照(<https://www.auschwitz.org/en/museum/news/eu-summit-better-protection-for-memorials.587.html>, accessed on the same day.)。

五

アウシュヴィッツ強制収容所の主任医官ドクター・メンゲレは、不屈の精神の持ち主である。彼はジプシー収容所の実験棟で何時間も過ごし、一日の半分はランブにいた。最近では、毎日ハンガリーからの移送列車が四、五本、到着するからだ。

新規に到着した人々が、親衛隊にびったりとくつつかれて五列に並んで収容所に近づいてきた。私は、それを遠くから眺めていた。上品な衣服、コート、流行のカバンから、彼らが大都市から来たのではないかと思った。

ドクター・メンゲレは、私と直に話す時間を作ろうとしていた。囚人が引っぱってきた大きな荷車が解剖室の前に来た。死体を運ぶように言いつかった作業員が、荷車の後ろから死体を二体降ろした。その死体には青インクでZSの2文字が書かれていた。解剖用という意味である。

一二号棟の知性的なフランス人の囚人が私の助手を務めた。二人で二体の死体をテーブルに載せた。一体の首の周りには、黒い頑丈な紐があった。この囚人は首つり自殺をしたか、あるいは誰かに首を絞められたかのどちらかである。もう一体の死因は感電死である。赤紫色の小さな円形のやけどから、すぐに分かった。この死体についても本当の死因には、二つの可能性があるかと推測される。絶望した囚人が我が身をみずから電柵に投じたのか、はたまた電柵に投げつけられたのであろうか。どちらのシナリオも収容所ではしばしばある。

しかし、ここでは堅苦しい質問には答えなくてもよい。自殺か自然死か殺人かは、どうでもよい。死体が手押し車に載せられて死体置き場に置かれる頃には、死者の名前が登録簿から抹消され

ている。毎日四〇体から五〇体の死体がここに運ばれて、夕方になるとトラックでいづれかの死体焼却場に運搬された。

ドクター・メンゲレは、私を試すために二体届けてきた。解剖の前に私に細心の注意を払うようにと言い、続けて要求はすべて叶えなければならぬと警告した。

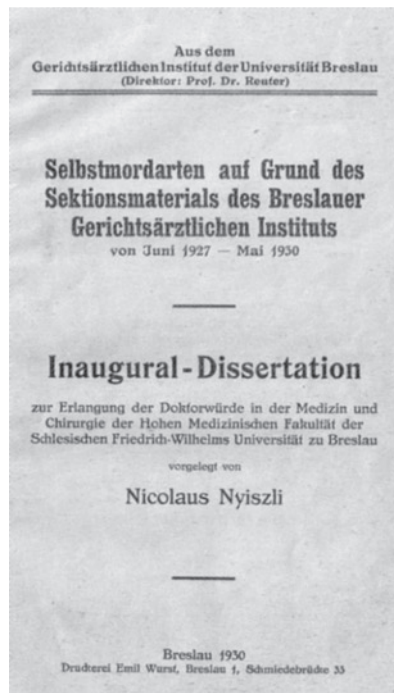
車のエンジン音がした。「気をつけ」の号令が一二号棟の中まで響き渡った。ドクター・メンゲレが二人の親衛隊高官とともに到着した。彼らはブロック長と棟付の医師から報告を受けた後、解剖が行われる予定の解剖室に直行した。B II f 収容区の前で、医師がその後続いた。それは、ひときわ関心と呼んだ大事件の発生後に大病院が行う死体の剖検のようであった。彼らの顔に緊張が走るのを見た。この危険な審査官の前で、メンゲレの助手候補がどれだけ上手にやれるかを見ようと興味津々であるのが分かった。

三年の間私は、プレスラウ法医学研究所でドクター・ゲオルク・シュトラスマンの助手としてあらゆる種類の自殺など、数多くの事件を扱ったが、そのことを知るのには、私以外ここには誰も持っていない。収容所の医師A八四五〇番は、その当時私が得た知識を持っている。

私は剖検を続けた。頭蓋骨、胸部、腹部を開き、すべての内臓を取り出し、組織がどのように変化したかを指摘した。それと同時に多くの質問を受けたが、いづれにも即答した。緊張した医師の顔が緩み、半信半疑の目は称賛のまなざしへと変わった。試験に合格した印である。次の死体も解剖した。ドクター・メンゲレは、発見事実を記録しろと命令した。翌日、彼はその記録文書を回覧に付した。親衛隊の医師たちが退室した。仲間の囚人と話し始めた。彼らは丁重に対応した。これで仲間入りができたと感じた。



グラビア 14 ブレスラウ大学の学生と
前列左から4人目の×印がニスリ。



グラビア 15 ニスリの学位論文表紙

タイトルは「ブレスラウ法医学研究所の解剖資料
(1927年6月～1930年5月)に基づく自殺の諸類型」。

翌日、解剖用に三体が与えられた。見学者は前と同じであるが、雰囲気はもはや張り詰めてはなかった。多くの質問が出され、良い雰囲気でも議論できた。

親衛隊の医官が退室した後、数人の若いフランス人とギリシア人の医師が近づいてきた。腰椎穿刺^{ルンバール}「針を刺して腰椎から髄液を取り出す施術」の説明を聞いてから、実際に死体を使って訓練させてほしいとのことである。私は喜んで同意した。有刺鉄線に囲まれた強制収容所の、こんな所でも、知識をもっと得たいと思っている人がいるのを感じ入るものがあった。彼らは辛抱強く、五回、六回と腰椎穿刺^{ルンバール}を上手に行い、とても喜んで午後の作業を終えた。

六

それは三日目のことで、まだ仕事が割り当てられていなかった。それでも医師用の食料が配給された。私は医師専用室のベッドで休んだり、建物に接したサッカー場のベンチに座ったりしていた。そう、アウシュヴィッツ強制収容所には運動用のグラウンドもあったのだ。しかし、そこを使用できるのは特権をもった囚人だけであり、ふつうはドイツ人の囚人であった。日曜日にはサッカーの試合があったが、他の日は誰もいなかった。一本の有刺鉄線だけがグラウンドと第一(二)死体焼却場を分けていた⁽²⁰⁾。火を噴いている煙突の建物の中では何が起きているか、私ほどは知りなかった。私が座っているところから見えるのは、そう多くはない。しかし、境界線に近づくのはあまりにも愚かである。そうしようものなら、たくさんある監視塔の一つから機関銃の弾がすぐにでも飛んできてしまう。

赤レンガの建物の前で整列している背広姿の男たちのことを、じっくり時間をかけて観察した。二〇〇人ほどがいた。列の前には数人の親衛隊員が立っていた。点呼を取っているようだ。死体

(20) サッカー場は収容所病院(B II f 収容所)の一角にあり、ランプと第二(三)死体焼却場のすぐ側にあった。収容所の公文書では「死体焼却場にたいして」二つの番号系が使われていた。一方の番号系によれば、第一死体焼却場はアウシュヴィッツの基幹収容所であったが、第二死体焼却場と第三死体焼却場はビルケナウのランプの突き当たりであり、第四死体焼却場と第五死体焼却場は、B II 建屋区とB III 建屋区との間の道路の突き当たりであった。ニスリが使用しているのはそれとは別の番号系で、ビルケナウ収容所の死体焼却場だけに番号を振り、第一から第四までとする。「本書では二つの番号系を併記している。」

焼却場の日勤作業員と夜勤の交代であろう。経験豊かな四人の話から分かったのだが、彼らは死体焼却場で働く作業班でゾンダーコマンドと言われている。これは、特殊な任務に当たる部隊という意味である。彼らは皆、恰幅カッパがよく、最高の背広を着ていた。……が、その仕事は最悪である。彼らがこの部隊を抜けることは、けっして許されていなかった。三、四ヶ月が経過すると、多くを知りすぎたとして、彼らは消された。どのゾンダーコマンドについてもそうだった⁽²¹⁾。オシフイエンチム(アウシュヴィッツ)に強制収容所が建設されて以来、この恐ろしい壁の内側で何年にも亘って起こった事柄を世界に伝えようとして生き残った者は、誰一人としていなかった。

ドクター・メンゲレと会う時間ちようどに間に合うように、私は一二号棟に戻った。車でやって来た彼を、ブロック長が出迎えていた。二人は話しに加わるようにと私を手招きした。ドクター・メンゲレは車に乗れと言った。警護は乗っていなかった。友人にいとまの挨拶をする間もなかった。車が走り出したが、すぐに収容所事務室の前で止まった。ドクター・メンゲレは急いでこっちに来たドクター・ゼンクテラーに私の検索用カードを持って来いと命令した。間髪を入れずに、ドクター・メンゲレは検索用カードを受け取った。

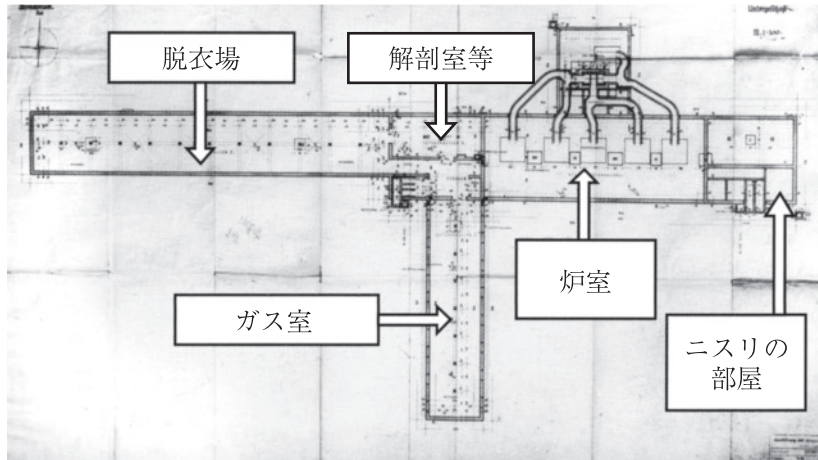
私たちは両側に有刺鉄線がある道路を一〇分ほど走って、収容区ごとに嚴重に警備されたゲートをいくつも通り抜けた。この強制収容所がどれほど広いかわく分かった。囚人の大多数にはこの収容所の全体を見る機会がまったくなかった。ほとんどは収容された収容区の中で死んだからである。予期しなかったが、見学はドクター・メンゲレによって中断させられた。私を振り向かずに、「今から連れて行くところとしているのは療養所ヘイルではないが、まずは耐えられる。」とさきっぱり言った。

収容所を出てから、ランプに沿って三〇分ほど進んだ。車は減速し、ドクター・メンゲレはクラクションを鳴らした。有刺鉄線を張り巡らした巨大な鉄製のゲートが開いた。そこには警備兵が数人いた。私たちは緑の芝生が敷き詰められた広い庭を通った。砂利道と緑色の葉が生い茂ったポプラがあつて、もしもそこに火を噴く煙突が佇立する赤レンガの建物がなければ、さぞ居心地が良かったことであろう。ところがそこは、死体焼却場の建屋だった。その前で私たちは下車した。親衛隊員が近づきドクター・メンゲレに何事かを申告した。私たちは揃って庭を通り、大きな出入り口から死体焼却場の建物に入った。

「部屋の準備はできているか。」とドクター・メンゲレは案内役の親衛隊員に尋ねた。「できています。」との答えだったので、まっすぐに進み、最後に私が部屋に入った。

真新しい白塗りの部屋だ。庭を見通せる大きな窓からはたくさんの光が差し込んでいた。だが、窓には鉄格子がとり付けられていた。部屋の向こうには、白いベッド、白い洋服ダンス、長テーブルと椅子など、贅を尽くした家具が置かれていた。コンクリートの床の上には赤いテーブルクロスを掛けたテーブルがあり、素晴らしいカーペットも敷いてあつた。これらすべてがそうであつた。

(21) そのようなことはなかった。ゾンダーコマンドの殺害をあらかじめ定めたスケジュールはなかった。一九四二年は、ゾンダーコマンドの作業員が全員殺害された唯一の年である。その後は、石炭酸シアン酸を注射されたり、騙されてガス室に入れられたりするなど、様々な手段で十把一からげに殺害されたゾンダーコマンドもいるが、作業の継続性を担保するために生かされた囚人もいた。また、ゾンダーコマンドで二年以上も生きた者もあり、戦後になってガス室と死体焼却場がどのように稼働したかを証言した者もいる(スラム・ドラゴン、アルター・ファイインシルバーなど)。「グラビア30参照、108頁」



グラビア 16 第1(2)死体焼却場とニスリの部屋(1)

たのは、私がここに来ることを予想していたからではないかと思われた。ベッドと洋服ダンスが収容所内の工房で製作されたことは最もありそうなことではあったが、ゾンダーコマンドが部屋の壁を白く塗り、移送列車で運ばれた調度品をここに納めたに違いない。

次に長い廊下を進んで、別の部屋に入った。そこは、二つの窓がある明るい近代的な解剖室であった。部屋の床は赤いコンクリート製で、その中央部には灰色の大理石で死体置台を支えるためのコンクリートの基礎があり、排水路が多数敷設されていた。テーブルの一方の端には水盤があり、その上にはニッケル製の蛇口が付いていた。壁の反対側には、油性塗料で薄緑色に塗られた陶製洗面台が三台あった。大きな鉄格子の窓には、蚊や蠅の侵入を防ぐための目の細かい網が張られていた。

解剖室の次に、診察室に入った。化粧板をあしらった上品な家具、快適な安楽椅子、そして中央には灰色のテーブルクロスを掛けた長テーブルがあった。テーブルの上には顕微鏡が三台置かれていた。診察室の一角には、最新の医学雑誌を配架した大きな横長の書架があった。様々な医薬品がたくさん並んだガラス製キャビネットがあり、白衣、エプロン、タオル、ゴム手袋を取めたタンスもあった。すべてが、大都市の研究所にある近代的な病理学研究所に配備されているのと同じだった。

ひととおり見学し終わると、恐怖にさいなまれてしまった。あのゲートをくぐった瞬間に、私の運命が決まったと思った。背広を支給された理由がようやく分かった。それは、死を宣告されたゾンダーコマンドになったという警告であった。

ドクター・メンゲレは退出の準備をしながら、業務にかんして私を統督するのは、自分だけだと親衛隊員に申し渡した。このため、死体焼却場勤務の親衛隊員で私に命令できる者はいなかった。



グラビア18 エーリヒ・ムースフェルト

私の食事は親衛隊専用の厨房で作られた。私は保管庫から衣服や下着を取り出すことが認められていたし、親衛隊専用の理髪室での調髪が許可された。朝晩の点呼も免除された。実験室での業務と剖検以外の私の義務はと言えば、約一二〇人の親衛隊員と八六〇人のゾンダーコマンドへの医療サービスに当たることであった²²⁾。私には、必要な医薬品、器具、包帯などの手当用品がすべて支給された。私は死体焼却場の建屋にいるすべての病人を治療しなければならなかったため、毎日のように往診した。午前七時から午後九時まで、私は、監視なしに四ヶ所の死体焼却場を自由に巡廻できた。死体焼却場勤務の親衛隊とゾンダーコマンドの指揮官であったエーリッヒ・ムースフェルト軍曹²³⁾に、私は毎日、寝たきり患者と歩行可能患者の総数を申告しなければならなかった。

権利と義務を長々と聞かされたが我慢した。私がゾンダーコマンドでなければ、そして第一(二)死体焼却場で言われなければ、あのような権利と義務を与えられた私は、強制収容所の最重要人

物であったはずだ。

ドクター・メンゲレは、権利と義務を通告しただけで、それ以外は一言もなく部屋を出た。一番下^{した}端の親衛隊員を含めてどの親衛隊員も、強制収容所の囚人に別れの挨拶をすることはなかった。私は解剖室のドアを閉めて、鍵をかけた。それもこれも、すべて私の責任で行うことになった。

私の部屋に戻り椅子に座って頭の中を整理しようとしたが、できなかった。気持ちの上では私は自宅にいる。日がさんさんと注ぐベランダ、家族とともに幸福な日々を過ごした居間、診察室、患者の処置のためにそこで費やした難しい時間、そして治療がうまくいったときの喜びを思い出した。私の友人やその家族は、この巨大な名も知らぬ監獄のどこにいるのだろうか。一五歳になる私の娘は、まだ妻と一緒にであろうか。二人は別々にならないようにできたのだろうか。私が愛で包み込み、人生の黄昏の憂いから守ろうとしてきた年老いた両親はどうなったのだろうか。病気がちの父に代わって親代わりになってやろうとした美しく繊細な妹はどうなっただろう。私は彼らと一緒にいて、とても幸せだった。私は彼らを愛していた。その面倒を見ることが、私の喜びであった。一度たりとも、彼らの運命について幻想を抱いたことはな

(22) ゾンダーコマンドに属す四人の数は絶滅の進度に応じて増減した。たとえば、一九四四年四月二〇日現在、全部で四棟の死体焼却場があったビルケナウでは二〇七人が使役されていたが、一九四四年七月二八日には、八七三人が屋内死体焼却場、ガス室、野外死体焼却場で作業した(ただし、この中には野外の死体焼却場に材木を運搬した三〇人の四人は含まれていない)。

(23) エーリッヒ・ムースフェルト(一九一三年二月二八日、ノイブニツク・シュブレール生まれ)。一九四七年二月二二日、死刑判決を受け、その後執行(一九四八年一月二四日)。

かった。私の父、母、妹は四〇両編成のアウシュヴィッツ行き移送列車のどれかに乗っていた。ランプにいた私の上司ドクター・メンゲレが、私の両親を左の列に並べせたのだろう。妹もきつとそうだった。目に涙を浮かべて、どうか母と一緒にさせてほしいと哀願し許され、不憫に思ってくれたことにたいして、妹は丁寧に礼を述べたことだろう。

私がここにいるというニュースは、親衛隊幹部とゾンダーコマンドの中で野火のようにあつという間に広がった。とても多くの乗客があつた。最初の乗客者は、親衛隊の下士官であつた。恰幅かっぴくは良いが陰鬱いんうつな表情の二人の軍曹が部屋に入ってきた。私のこのときの振る舞いが今後の私への取扱に影響をあたえるのではないかと気づいた。私はドクター・メンゲレが言ったことを考えていた。私はドクター・メンゲレにたいしてのみ責任を負っている。それ以外の訪問は、個人的な身の上話をしに来たのだと思うことにした。そのために、遵守すべき強制収容所の規則には従わなかった。起立して気をつけの姿勢をとったり、何かを申告したりはしなかった。座ったまま挨拶をしてから、椅子を勧めた。

二人は部屋の中央に立って、注意深く私をねめ回した。この瞬間が大切だと思った。第一印象が重要である。この状況把握に私は満足した。次の試験にも合格した。親衛隊員の顔には緊張感が消え、彼らは何食わぬ顔で椅子に腰掛けた。会話の内容は、ここまでの旅について尋ねるなど、ごく狭い範囲に限られた。だが、強制収容所に移送された理由は聞かれなかった。囚人は、政治向きせいじむきのこと、戦争のこと、収容所のことを話題にすることはご法度ごぽうどだった。このような制約があつたが、それでも気詰まりにはならなかつた。平時のドイツで数年間暮らしていたことがあるので、話題には事欠かなかつた。

乗客は私との会話に引き込まれた。おそらく私のドイツ語が彼

らよりも格上であつたことに感銘を受けたのであろう。二人は分らないとは言わなかつたが、私はしばしば彼らの理解を超える言い回しをした。私は、町のこと、ドイツ人の家庭生活、国民道徳、宗教観など、彼らの国のことをよく知っていた。これで口頭試問にも合格したと確信した。彼らは満足して帰ったからである。

次の乗客は、背広を着た丸坊主のゾンダーコマンドのカポカポが二人とカポ長が一人だつた⁽²⁴⁾。私の部屋を整えてくれたのはこの人たちであると分かつた。彼らは私の到着を聞いて、食事に誘い他の囚人たちと面会できるようにしてくれた。彼らが訪問してくれたので、私たちは知り合いになることができた。

食事の時間になつたので、部屋を出て彼らと一緒に死体焼却場の建屋にある一室に入つた。そこは、死体焼却場の幹部の居室だつた。長い廊下の両側には、寝心地が良さそうなシングル・ベッドが置かれていた。ベッドは未塗装材でできていたが、掛け布団は絹製で、枕には刺繍があしらわれていた。これらが移送列車からのものであることははっきりしている。ゾンダーコマンドの囚人は、欲しいものは何でも、保管庫から自由に取ってきてよかつたのである。

照明は明るすぎるくらいだ。収容所のバラックとは違って、ここでは節電はされていない。私たちはベッドが並ぶ長い列に沿って進んだ。ゾンダーコマンドの半分だけがそこにいた。残りの半分は夜勤である。夜勤が働いている間は、日勤は休みだ。わずかながら睡眠をとっている者もいた。読書している者もいた。そこにはものすごい数の書籍があつた。移送者のほとんどは、何か心の支えになるものを身近におこうと考えたのである。読書はゾン

(24) カポ長は、数百人の作業員の責任者(囚人)である。その下に、カポ、カポ長補、職長がいた。

ダーコマンドのもう一つの特権であった。収容所では読書をして逮捕された囚人は、ボコボコにされるか、二〇日間、野外にある箱に押し込められた。私たちが待っていたのは、ダマスク織りのテーブルクロスが掛けられた食卓だった。由緒ある家名を示す組み合わせ文字や家紋が付いた陶製の上品な皿、銀製のナイフ、スプーン、フォーク、陶製の凝った水差しが並んでいた。これらはすべて移送列車から持ってきたものばかりである。食卓の上には、移送された人たちが行き先不明の未知の旅に携行しようとして決めたごちそうが載っていた。あらゆる種類の缶詰、豚バラのベーコン、サラミ、フルーツジュース、ビスケット、チョコレートだ。ラベルでその中身が分かったが、ハンガリー産であることも分かった。日持ちのしない食料品は、まだ殺されている人たちが、すなわちゾンダーコマンドに供された。食卓に着いたのは、カポ長、「火夫」(死体焼却炉の操作係)のカポ、「歯科医」(死体からの抜歯係)のカポ、そして抜歯した金歯から金を溶融する係の囚人であった。彼らは持っているものすべてを私に提供した。すべてが豊富だった。ハンガリーからの移送列車が多すぎるとはい到着して、大量の食料を運んできたからである。はじめは食欲がなかった。一緒に旅してきた人たちが、最後の数時間になっても、涙を浮かべて貴重な蓄えを離すまいとしていたのが目に浮かんで来た。彼らは、ここぞという時に子どもや年老いた親に食べさせないで、飢えの旅を選んだのであろう。食べさせる時は来なかった。翌日には皆死んでしまったのだから。……手つかずの食料が死体焼却場の脱衣場に残された。

ラム酒入りの紅茶を少し口にしてから、一気に飲んだ。二、三杯飲むと高ぶった神経が落ち着いた。苦悩から解放され、心の重荷が少しとれて軽くなった。体が暖まり心地よい。アルコールの効果だ。私たちは、ハンガリーからの移送列車が運んできた上

等のタバコを吸った。当時、収容所ではタバコ一本が、なんと一食分のパンと同じ値段だった。そのタバコが一〇〇カートンも食卓に載っていた。

議論に花が咲いた。ポーランド人、フランス人、ギリシア人、ロシア人、ドイツ人、イタリヤ人がみんな、食卓に着いていた。ほとんどはドイツ語が分かったので、ドイツ語で話した。

死体焼却場の歴史が分かった。何万人もの囚人が石とコンクリートで作ったのだ。冬の厳しい天候の下でも、期日に間に合わせなければならなかった。すべての石が薄いユダヤ人の囚人の血で染まった。この哀れな人たちは、飢えと寒さの中でぼろ服を着て、豚が食べ残した残飯のようなものを食べて日に夜を継いで働き、恐怖の死の工場を建設した。その後、彼らの死体は自分が作った焼き網の上で灰になった。二年前のことだ。その後は、何百万もの人が移送列車からランブに降りて、死体焼却場のゲートをくぐった。

ゾンダーコマンドの歴史も分かった。今は一二期目である。私は、これまでのゾンダーコマンドにいた英雄たちのことを聞いた。そして、すでに収容所で耳にしたことが本当であると確信した。ゾンダーコマンドの生命はわずかに数ヶ月である。

ユダヤ教の信者は、ここに到着してすぐに独特の教義に従って、死の準備に取りかからなければならなかった。死は取り消すことができなかったからである。これまでのどの期のゾンダーコマンドについてもそうであった。

深夜近くになった。アルコールのせいでゾンダーコマンドはけだるそうだ。会話が途絶えそうになると、また始まり、そしてまた止んだ。当番の親衛隊員が就寝時間を注意しに来た。私はそこを出て、自室に戻った。

最初の夜をぐっすり眠ることができた。ラム酒のおかげでもあ

り、神経が疲れていたからでもあろう。

(一一二) 作業班長。作業班編成、作業監督、員数報告、脱走防止などに当たる囚人で、夕方の点呼後、作業員をブロック長に引き渡した。語源は capo (イタリア語で頭、ボスの謂)。



グラビア 19 建設中の第 1 (2) 死体焼却場：1943 年親衛隊撮影

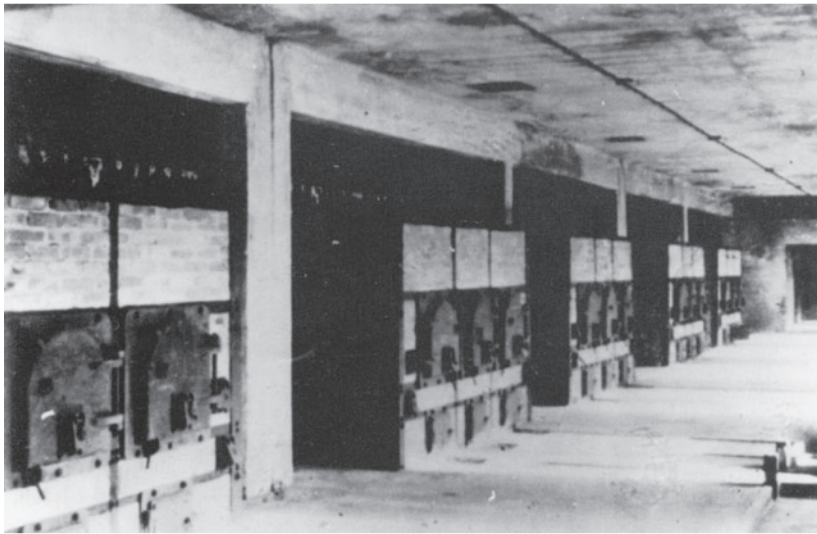
七

ランプで汽車の汽笛が鳴った。早朝のことだ。窓辺に立ち線路のほうを見た。長い貨物列車が停車していた。親衛隊が貨車のドアを開けるのに数分かかり、イスラエルの民が移送列車からこぼれ落ちた。三〇分も経たないうちに集合させられ、選別が終わった。貨車がゆっくりと動き出した。

怒声と駆け足の音が私の部屋にも聞こえた。炉室からの物音だ。作業員は、運ばれてくるものを待っていた。すると発電機がうなりだし巨大な送風機が回転し出した。炉の温度が最高にまで達した。死体焼却炉一基につき一基の送風機がある。一五基の巨大な送風機が一斉に回り出した。死体を焼却する場所は広い。床は白く塗られたコンクリートで、大きな鉄格子の付いた窓からはたっぷり日光が差し込んでいた。どの炉も一基ずつ、その周りが赤レンガで作られていた。ピカピカに磨かれた巨大な扉は、室内全体に貼り付けた列をなす黒いつぎあてのように見えた。

移送者がゲートにたどり着くまでに五、六分かかった。ゲートが開き、いつものように五列に並んで庭に入ってきた。この次に何が起こったかを知る者は、この世にはいない。この敷居を跨いだ者で戻った者は誰もいないからである。左側の列が辿る道は死体焼却場に続いた。労働に適すと右側の列に並んだ人にしてドイツ兵は、左側の人が「病弱者、高齢者、幼児のための静養収容所」行くと行ったが、そうではなかったのだ。

疲れた人たちの足取りは重い。眠たげな子どもは母親のスカートにしがみついていた。乳児は父親が抱いていた。乳母車を押し持っている親もいた。親衛隊の警備兵がゲートの内側に立っていた。親衛隊を含めて無許可の者は、一切ここを通過することはまかり



グラビア 20 焼却炉と炉前：1943年親衛隊撮影

ならないと通告されている。新規到着者は蛇口が庭にあるのに気づいた。彼らは算を乱しコップや鍋を手にして蛇口に殺到し、ひどい渴きを癒やそうとした。この狂騒は少しも驚くべきことではない。彼らは、この五日間というものの文字通り一滴の水もなく、わずかに飲めたにしても、悪臭を放っていたからだ。引き継いだばかりの警備兵はこのような光景に慣れていて、水を汲み終えるのを辛抱して待っていた。一同が渴^{かわ}を癒^いやして、ようやく列に戻った。砂利道を一〇〇ほど進んで、鉄製の手すりを付けたコンクリートの階段の所まで来た。その階段は地下室のコンクリート製の部屋に通じている。階段を降りる前に、ドイツ語、フランス語、ギリシア語、ハンガリー語で、ここが入浴と消毒のための施設である旨を書いた大きな看板が見えた。この看板は、何も疑っていなかった人だけでなく、最悪を予想していた人をも安心させた。彼らは嬉々として階段を降りた。

移送された人々は、奥行き二〇〇ほどの広々とした白壁で照明たっぷりの部屋に通された。中央には柱が数本あった。柱の周りや両側の壁ぎわにはベンチがあり、その上には番号の付いた洋服掛けがあった。服と靴を紐で縛り洋服掛けにかけておくこと。シャワーから戻ったときの無用の混乱を避けるために、洋服掛けの番号を記憶しておくこと。新規到着者にそれらを知らせる注意書きが、いろいろな国の言葉であちこちに貼られていた。このようなドイツ人らしいやり方を褒めて、「これこそ本当のドイツ的な秩序だ。」と言った人もいる。彼らは正しかった！ 実際には、これらすべては、秩序を維持するためだった。これで、第三帝国で靴を待っている市民が、左右の違う靴を手にはすることはない。同じことは、衣服にも言える。爆撃を受けたドイツ人が良い状態の衣服を支給されることが重要である。さて地下室には、男、女、子どもが合わせて三〇〇〇人いる。直ちに命令が下った。「服を

脱げ。」制限時間も指定された。「一〇分以内だ。」老人、子ども、夫、妻は、皆ボートと立ち尽くしていた。女性や少女は恥ずかしく、力なく互いに見つめ合っていた。ドイツ語が分からなかったのか。また、命令が繰り返された。今度はせかさうで威圧的だ。

何か悪いことが起こりそうな予感がした。最初は本能的に抵抗したが、すぐに従った。ユダヤ人は何かを強制されたときには、その状況に調子を合わせるように育てられているからである。ゆつくりと衣服を脱ぎ始めた。高齢者、身体障がい者、精神障がい者はゾンダーコマンドの手を借りた。一〇分以内にみんなが裸になった。衣服はコート掛けにあり、靴はさながら気をつけの姿勢をとっているように見えた。誰もがコート掛けの番号を記憶していた。

数人の親衛隊員が密集した群衆をかき分けて、部屋の端にあるとても幅の広いオーク材の二重扉まで行って、観音開きの扉を開けた。裸の人々がその部屋になだれ込んだ。この部屋は脱衣場の半分くらいの大きさで、そこにはベンチも洋服掛けもなかった。その代わり、と言っては何だが、中央には大きな四角形の柱のようなものがある。それは建物を支える支柱ではなくて、大きな鉄製のダクトで、側面には暖炉に使う皿のような格子が付いていた(111)。

今や全員が部屋の中にいる。「親衛隊とゾンダーコマンドは出る。」という大声の命令で、彼らは室内に仲間がいなくても確認して、室外に出た。扉が閉まり、シャワー室の電灯が消えた。その頃、庭ではエンジン音が聞こえた。赤十字マークを付けた見栄えのする救急車が到着し、親衛隊将校一人と予備医療部隊の将校一人が降りてきた。予備医療部隊の隊員は四個の緑色の缶をもっていた。二人は芝生を横切り、シャワー室「ガス室」の上の

コンクリート製の屋根に上がって、低い煙突に向かった。最初の煙突に近づき、ガス・マスクを装着してから、煙突の重いコンクリートの蓋を取り、缶に付いた特許取得済みの道具で一缶開けた。それから、缶の中の緑色をした豆粒大の粒をダクトに注いだ。その結晶はこぼれ出ることなく、金属製のダクトから地下のシャワー室に降りていった。この粒がチクロンBであるが、空気に触れるとすぐに気化し始め、ガスが格子から出て、数秒以内に人で満杯の部屋に充滿した。五分以内に、移送された人はすべて死んだ。

新たな移送列車が到着するたびに、赤十字マークを付けた救急車が来た。粒の缶詰は収容所の外のどこから運ばれてきた。死体焼却場の建屋には、粒を入れた缶が保管されたことはない。この警戒策は巧みだ。しかし、チクロンBの運搬車に国際赤十字のマークを付けて警戒するのと較べれば、巧妙さといひ皮肉さといひ、その程度は半減してしまう。

致死性のガスをもってきた二人の死刑執行人は、さらに五分待つて、仕事がちんと終わったことを確認した。それから二人はタバコに火をつけて救急車に戻った。彼らは三〇〇人をたった今、殺したばかりだ。

二〇分後に排気装置にスイッチが入り、ガスを抜いた。ゾンダーコマンドの一隊が死者の持ち物を運び出し始めた。彼らは、靴と衣服を切り離した。それらは消毒に回さなければならぬ。これらが本場に消毒の時間だ。略奪品は、ここからドイツの物流基地に輸送された。

最新鋭の送風機が効率よくガスを排出したが、死体と死体の隙間にはまだガスが残っていた。数時間後であっても、わずかに吸入すると窒息してしまうことがある。このために、ゴムホース付きのガス・マスクを着用して、ゾンダーコマンドの別の一隊

がシャワー室に入ってきた。再び電気が点いた。そこに入った凶人は恐ろしい光景を目にすることになる。

死体は床の上に散らばり、絡まり合っていた。信じられないほど高く、ぞっとするような死人の山。その上にさらに死体。ガスは緑色の結晶から放出されて床一面に広がり、どんどん高く昇ってゆく。不幸な人たちは、本能的にガスを吸い込まないようにと、他人を踏みつけて上に昇ろうとした。てっぺんにいた人が最後に死んだ。そこで起こった生きるための闘争とは、そのようなものであった。寿命が一、二分伸びたくらいだ。彼らがまっとうに考えることができたなら、両親を、妻を、子どもを踏みつけることの虚しさが分かったかもしれない。だが、思考は停止し、自己保存本能のなすがままになった。一番下には乳児、その上は子ども、そのまた上には女性と老人、そしててっぺんには屈強な男性がいた。

死体はさながら断末魔の様相で、鼻と口から出血し、上によじ登ろうとして争ってできたひっかき傷があった。誰が誰だか分からないほど、顔は青白く腫れ上がっていた。

それにもかかわらず、ゾンダーコマンドの作業員の中には、死体の山から血縁者を見つけようと一生懸命だった者がしばしばいた。私はここで身内と出会うことをとても恐れていたが……。

ここでは私の仕事は何もないが、死体の山に分け入った。私には、死者に、そして全世界に義務がある。信じられない運命のいたずらで、万が一ここから生きて出されるなら、見たままを証言できるかもしれない。しかし、冷静になってみると、そのようなことはできるはずがない。

ゴム靴を履いたゾンダーコマンドは山をなす死体の周りに集まって、ホースで勢いよく水をかけた。チクロンBによるガス殺の最終効果は、腸の中を空っぽにすることであった。どの死体も

汚れていた。

「死体の入浴」が終わると、ゾンダーコマンドは大きな悲しみうちひしがれ、自暴自棄の様相で死体の山からもつれた死体をほぐし始めた。これには骨が折れた。濡れた死体の握りしめた拳を紐で縛り、死体のピラミッドから一体ずつはぎ取り、隣の部屋のエレベータまで引きずって行かなければならなかった。このエレベータは、一度に二〇体から二五体の死体を積み込める産業用であった。エレベータの準備ができると、ベルが鳴った。死体は炉室まで上げられると、自動的にエレベータの大きな扉が開いた。ゾンダーコマンドの別の一隊が死体の到着を待っていた。彼らはこのときも死体の拳を縛った紐でコンクリートの床に引きずり出し、すでに濡れている通路を通って燃えさかる一五基の焼却炉のどれかに運んでいった。

老人、若者、子どもの死体がコンクリートの床で長い列をなしていた。鼻や口からにじみ出た血が、開いた蛇口から絶えず流れ出る水と混ざりあっていた。

次は、殺人から利益を得ることだ。すでに第三帝国は、彼らの衣服と靴を盗み取っていた。毛髪もまた貴重な物資であり、爆弾の時限装置に使うことができた。空気が湿っていても乾燥している、毛髪の発火時間には影響がない。正確な爆発のタイミングを確実に決めることができる。死体から髪の毛が刈られたのは、このためである。

「第三帝国の財産は金ではなく、労働力である。」というのは多用されたナチスのスローガンの一つであった。これは、まったく事実とは異なる。炉の前には「歯科医」が八人立っていた。手には二種類の医療器具、ではなくて工具をもっていた。ノミとペンチの二つだ。彼らは死体を上向きにして、何かすさまじいことを始めた。抜歯すると言うよりは、むしろ口をこじ開け乱暴にブ

リッジと金歯を引きちぎった。この作業員はトップクラスの歯科医であり、また外科医でもあった。ドクター・メンゲレは、収容所で歯科治療を計画していると謀^{たばか}つて専門家を集めた。彼らは専門にふさわしい仕事があたえられると思って志願した。ところが、私と同じように地獄の死体焼却場に入ってしまった。

金歯は、歯肉や歯を溶かして金を取り出すために、塩酸を入れたバケツに投げ込まれた。金やプラチナでできたネックレス、指輪などは、貯金箱のような切り込みを入れた蓋が常時、施錠されていた特別の箱に収めた。金は重く、当然のことながら移送列車の規模にもよるが、大雑把に推定すると、どの死体焼却場でも一日あたり八割から一〇割の金が集められた。どこから来たかによつて、移送列車に物資が豊富にあることもあれば、貧弱なときもあった。アウシュヴィッツのランプに到着したハンガリーからの移送者は、すでに略奪された後だった。しかし、オランダ、ドイツの保護領(ボヘミア・モラビア保護領)、ポーランドから移送列車に乗ってきた人たちは、数年間ゲッターにいたにもかかわらず、どういふわけか宝石類や金銀を隠しもつていた。第三帝国を潤す、もう一つのやり方がこれだった。

金歯が抜かれてしまうと、犠牲者は炉前の作業員に引き渡された。三人一チームの作業員が死体を数体、車の付いた金属製の特殊なストレッチャーに載せた。死体焼却炉の重い鉄扉が自動的に開いた。係の囚人は、開口部にストレッチャーを押し込み、白熱した炉の中でひっくり返して、すぐに引き出した。その後、真っ赤に焼けたストレッチャーは、ゴムホースを持った二人の囚人が高圧の水流で冷やさなければならなかった。

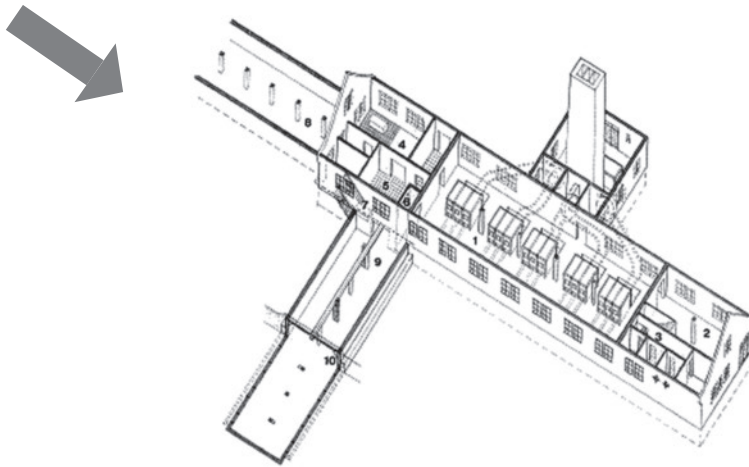
死体の焼却には二〇分かかった。死体焼却場には一五基の焼却炉があり、それが一斉に稼働していた。一棟の死体焼却場は一日あたり五〇〇〇体の死体を処理した。四棟の死体焼却場はすべて、

性能は同じだった⁽²⁵⁾。毎日二万人がガス室に入り、最後は焼却炉で焼かれた。来る日も来る日も、何千という魂が焼却棟の煙突から解放された。残されたものはと言えば、死体焼却場の庭の小さな遺灰の山だけだった。遺骨はトラックに積み込まれ、二^きど行ったところを流れるヴィスワ川に流された。

あまりにも多くの苦しみと恐怖を経験したにもかかわらず、死んでもなお平穩ではなかった。

(二三) 次頁の図を参照。

(25) ドイツ当局の推定では、ビルケナウにあった四棟の死体焼却場の一日あたりの性能は、四四一六体であった(第一二二死体焼却場と第二二二死体焼却場では、一四四〇体ずつが焼却され、第三二四死体焼却場と第四二五死体焼却場では七六八体ずつであった)。ゾンダーコマンドにいた元囚人の証言にもとづいて、収容所における犯罪の研究委員会(委員長はヤン・セーン「アウシュヴィッツ収容所総司令官ルドルフ・ヘス裁判の担当判事」)は、ビルケナウにあった四棟の死体焼却場の一日あたりの性能を八〇〇〇体(第一二二死体焼却場と第二二二死体焼却場では、二五〇〇体ずつ、第三二四死体焼却場と第四二五死体焼却場では一五〇〇体ずつ)と推定した。

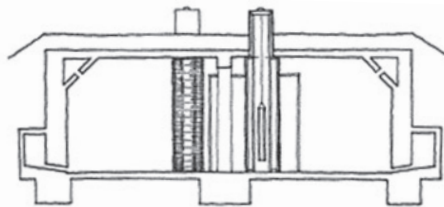


第1(2)死体焼却場(ビルケナウ強制収容所)

1: 炉室, 2: 燃料庫, 3: 囚人居室, 4と5: 解剖室(グラビア19とは異なるところがある), 6: 死体運搬用エレベータ, 7: エレベータ前の階段下ロビー, 8: 脱衣場, 9: ガス室, 10: 排気孔。

[注記] グラビア16(27頁), 17(28頁), 20(33頁)参照。グラビア23(46頁)は, 上図の矢印(左上)の方向から見た図。

[出所] Debórah Dwork and Robert Jan van Pelt, *Auschwitz*, revised and updated, New York and London 2008, p. 270.



ガス室のダクト

ダクトは3つの部分からなる。内側から①可動部分(チクロンBを入れて床面近くに降ろす), ②柱状(可動部分の移動空間), ③外面(金属製のメッシュ)

[出所] Dwork and van Pelt, *Auschwitz*, p. 326.



ガス室(第1(2)死体焼却場)

中央に柱があり, その左右に2本ずつ, 全部で4本のダクトがあり, そこからガスが出る。天井にはシャワー・ヘッド(偽装)があり, 殺害後は壁面の上部と下部の排気孔からガスを排出する。

[出所] Dwork and van Pelt, *Auschwitz*, p. 327.

八

実験室と解剖室は、科学的野望を満たそうとした私の上司、ドクター・メンゲレの希望で設置された。数日ですべてが完成し、ドクター・メンゲレは、研究を始めるために剖検の専門家を待つだけであった。

この強制収容所には無制限の機会があたえられ、膨大な数の自殺死体の解剖学的・病理学的診断はもとより、低身長症・巨人症のような成長異常や双子についての研究も、し放題であった。解剖のための死体がかくも多数ある所は、世界広しと言えども他にはなかった。

世界で最も著名で最大級の病院や法医学や剖検の研究所でも、一年にせいぜい一〇〇体ないし一五〇体しか解剖していない。ところが、アウシュヴィッツ強制収容所では、「研究」に供され得る死体は数百万に及ぶ。

収容所の門をくぐった人は誰にでも、解剖台で終わる可能性があった。運命のいたずらで左側に向かった人は、一時間後にはガス室で死体になった。実際のところ、このような人たちは幸せであった。右のほうに行けと言われた人たちは、苦痛を長引かせてやるぞという宣告を受けただけである。この人たちも解剖台に載せられる候補者だったが、それまでにはまだ三、四ヶ月あり、その間、強制収容所では生存を賭けた恐怖の闘いを見る羽目になった。奴隷労働が、身体中の無数の傷が、そして野外での凍てつく寒さが、飢えてやせ細った彼らを押しつぶしてしまうであろう。正気を失い狂ったように叫び、目はうつろになるだろう。よく訓練された軍用犬がわずかに体に残った肉に食らいつく。骨と皮になつてしまえば、シラミも刺さなくなる。解放されるのは、死ぬ

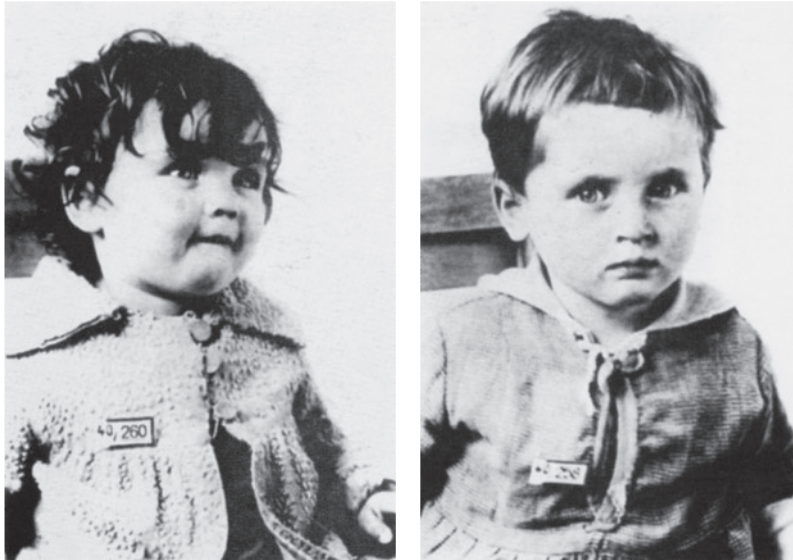
ときだけだ。父親、母親、兄弟、子どもから離ればなれになり、右側に行った人と左側に行った人とはどちらが良かっただろうか。

新たな移送列車がランプに到着して並び始めるとすぐに、親衛隊員が一人近づいて双子と低身長症の人を探し始めた。子どもに何か良いこともあるかもしれないと母親たちは期待して、ためらわず我が子を引き渡した。年配の双子は、興味深い科学的研究の対象になるのではないかと思いを巡らし、自分のためになると考えて名乗り出た。低身長症の人たちも同じであった。

こうして双子と低身長症の人は、残りの人たちと別れて右側を歩いていった。親衛隊の監視兵はこの特別なグループを特別なバラックに連行した。そこでは、ごちそうが支給され、快適なベッドと必要な衛生設備が整っていて、看守の厚遇を受けた。

そのバラックがB II f収容区の一四号棟である。そこから、囚人は、ジプシー収容所の中にあるくだんの実験棟に連れて行かれた。そこで、彼らは生きた人間にたいしてなされる、ありとあらゆる医学実験の材料にさせられたのである。血液検査、腰椎穿刺、双子の間での輸血、その他数え切れないくらいの実験はどれも痛みを伴い、疲労がひどい。デйна（プラハ出身の画家）「四、訳注一二参照。」は、双子の頭、耳、鼻、唇、腕、脚部の比較図を描いた。これらの図録はすべて、枝葉末節に至るまで事細かに個人の様子を記録した文書だけでなく、実験による発見事実を記載した記録と一緒に、特別のファイルにまとめられた。低身長症についても同様である。

医学的実験という名のもとで行われたこれらの実験は、生体内で、つまり生きている有機体にたいして行われたが、科学的観点からすれば双子という現象を完全に説明するものではありえなかった。実験と言つてもうわべだけのもの、ほとんど何も



グラビア 21 ヨハネスとエルトマンのシュミット兄弟

このジプシーの兄弟はドクター・メンゲレによる人体実験の後、アウシュヴィッツで死亡した。

29. JUN. 1944 *8. 7*
 Hyg.-bakt. Unters.-Stelle der Waffen-SS, Südost Auschwitz Gb., am 29. Juni 1944.
 Anliegend wird übersandt: *46274/VIII/100* (12-jähriges Kind)
 Material: Kopf einer Leisha entnommen am _____
 zu untersuchen auf: Histologische Schnitte
 Name, Vorname: _____
 Dienstgrad, Einheit: siehe Anlage (69/49)
 Klinische Diagnose: _____
 Anschrift der einsendenden Dienststelle: M.-Krankenbau
 Zigeunerlager Auschwitz II, B II e
 Bemerkungen: Der 1. Lagerarzt
 K.L. Auschwitz II
 M. Mengele
 SS-Hauptsturmführer.
 (Stempel, Unterschrift)

グラビア 22 標本送付書 (1944年6月29日付)

12歳の少女の切断した頭部にかんする組織学的研究のために、ドクター・メンゲレがライスコの衛生研究所に宛てた。この少女はアウシュヴィッツ第2収容所のBIIe収容区(ジプシー収容所)に収容されていた。右下には、アウシュヴィッツ第2収容所主任医官、親衛隊大尉メンゲレの署名がある。

明らかにはならなかった。このために、研究は最も重要な次の段階に進まなければならなかった。剖検を行い、正常な臓器と奇形または病気に罹った臓器を解剖によって比較することになったのである。全身の剖検と特定の臓器の検査は二人同時に行わなければならないから、B II d 収容区の実験棟の双子は同時に死亡した。ドクター・メンゲレが殺したのだ。

医学上ユニークな機会がここにはあった。双子が同時に死亡し、比較剖検が行われたのである。このようなことは、いったい世界のどこであり得たであろうか。双子が同時に死んで、二体が同時に解剖されるという可能性は、奇跡に近いのではないか。通常は、双子は別々の環境にいる。互いに一〇歳、場合によっては数百歳離れて生活している。双子の比較剖検はふつうはなしえない。しかし、アウシュヴィッツには何百人もの双子がいて、殺しさえすれば研究の機会は何百回となくある。

ドクター・メンゲレがランプで双子や低身長症の人を探したのは、このためであった。彼らを右側に行かせ、「条件のよい」バラックに入れたのも、このためであった。しばらくの間、彼らはおごそくに与つたので、病気になったり早死をしたりすることはなかった。彼らは完全な健康状態で、しかも同時に死ぬ定めにあった。

ゾンダーコマンドのカポ長がやって来て、死体焼却場のゲートで親衛隊員が私を待っていると伝えた。この親衛隊員は、解剖用の死体を私に運んできた囚人の一団を引率してきた。囚人であるうと親衛隊員であろうと、死体焼却場の関係者以外は敷地に入ることが禁じられていたので、私はゲートの外で彼らと会った。親衛隊員は私に一冊のファイルを渡した。それは一組の双子に 관한文書であった。女性の囚人が私の前にシートで覆った担架を置いた。シートをめくってみると、二歳の双子の死体があった。

私は、担架を解剖室に運び、死体を解剖台の上に置くように言った。

ファイルを開いて文書を調べると、二人のレントゲン写真、図録、専門的な医学データが記載された報告書が挟まれてあった。欠けているのは、検案書だけであった。私の出番というわけだ。

二人の小さな子どもは同時に死んだ。大きな解剖台に小さな死体。この子らの死が解剖を可能にし、死ぬことによってこの民族の再生産の謎を解く研究に貢献できる。

この種のすべての研究の「偉大なる目標」は、生まれながらにして「支配民族」になることを運命づけられている「超人」の出生率を上げることであった。有り体に言えば、将来、すべてのドイツ人の母親は双子を産めという意味である。

この企みは、まったく狂気の沙汰である。第三帝国の病んだ心を持った人種差別主義の理論家の発明である。彼らの企みを下支えする研究を引き受けたのが、アウシュヴィッツ強制収容所における医官の中の医官であり、非常に有能な「監獄医」にして、またの名を悪魔の医師、ドクター・メンゲレであった。

彼は最も危険なタイプの犯罪者であり、信じられないほど強力な権限を意のままに行使した。ドイツの人種理論は、何百万もの人々が実際には人間ではなく、これまで人類に害をなしてきた劣等な種であると決めつけたので、彼は何百万人でも殺すことができた。

この犯罪者、ドクター・メンゲレは、私の隣に座って顕微鏡、試験管、フラスコをのぞき込んだり、血が付いたエプロンを着たまま解剖台に立ち、臓器を血まみれの手で調べたり、こねくり回したりして何時間も費やした。すべてはゲルマン民族の繁殖を促進し、ついには第三帝国の領土、すなわち「生活圏」に住めるだけのドイツ人を増やすためである。そうなるのは、チェコ人、

ハンガリー人、ポーランド人、オランダ人などが一掃されたときである。

双子の解剖が終わり、すべての観察結果を記録した。ドクター・メンゲレは私の仕事ぶりに満足したが、手書き文字を読むのには苦労したようだった。アメリカで教わったように、ブロック体で書いたのである。私はそれとなく、もっと読みやすい報告書が望みでしたら、自宅にいたときと同じように、タイプライターを使用させていただきませんかと言った。

「使い慣れているものがあるか。」と彼は尋ねた。
「オリンピア社のエリートです。」

「問題ない。明日には手に入るだろう。誰かを探しにやろう。ベルリン・ダーラムの人類学・生物学・人種研究所に送付するのだから、最高級の報告文書が必要だ。」

ここでの研究が最も名の通った医学研究所の一つにいる著名な科学者の目に触れると分かったのは、このときであった。

翌日、親衛隊員がオリンピア社のタイプライターをもってきた。死体も数体、受領した。ジプシー収容所から来た四組の双子である。皆、一〇歳未満の子どもたちだった。

私は、最初の組の双子を解剖し剖検の段階ごとに記録した。頭蓋冠(二四)を外し、小脳と一緒に大脳を摘出して、その両方を詳細に調べた。次に、胸郭(二五)を開き、胸骨(二六)を摘出した。顎(二七)の下を切開して、舌と食道(二八)を摘出した。この二つの器官は出血がとて多いので、正確な診断の前に洗浄しなければならぬ。斑点や変色がどんなに微小であっても、重大な意味があるかもしれないからである。その後、心膜(二九)を切開し、滲出した体液を集めた。心臓を摘出し、流水で血液を洗い流した。心臓を回転させて見ると、左心室の表面に、針で刺したほどの、ようやくそれと分かるような小さな薄赤い色をしたシミがあるのに気づ

いた。確かに間違いいではない。これは誰にでも分かるようなものではないが、針を刺した痕跡であった。皮下注射の跡だ。どうして、この子は心臓に直接、注射されたのだろうか。心臓へ注射を打つのは、ふつうは急性心臓麻痺のときのはずだが。この答えを見つけないければならない。通常の検死では、左心室にある血液量を測定する。しかし、この死体の場合には、血液が凝固して堅い血餅になっていたもので、それができない。この血餅をピンセットでつまみ出して、臭いを嗅いでみた。鼻をつくクロロホルム特有の臭い「強く甘い芳香」がした。この子はクロロホルムを注射されたのだ。

怖くなって膝がガクガクし始めた。私は、第三帝国の医学の最も暗い秘密の一端を見た。無辜の民はガスで殺されるだけでなく、直接心臓に致命的なクロロホルムの注射によっても殺される。額から冷や汗が流れた。ありがたいことに、剖検をしていたのは私だけだった。誰か他の人がいたならば、この感情を隠しとおすことは、難しかったであろう。剖検を終えて、異常事項を記録した。ただし、左心室にあった刺し傷と血餅は記録に留めなかった。慎重でなければならぬ。私は、双子にかんするドクター・メンゲレのファイルを手にした。そこにも事細かな医学データ、様々な発見事実、レントゲン写真、図録が収められていた。しかし、死因の記載はなかった。書式の死因記入欄は空白だった。私の検案書にも死因は記載していない。発見事実を一切合切記載することは、軽率の極みであろう。私は臆病者ではない。精神は強靱である。これまでの人生で数多くの剖検を行い、数え切れないくらい、その死因を見つけてきた。復讐のために、嫉妬のために、金儲けのために殺された人たちの死体を検案した。自殺の方法をはっきりさせたり、病死した者については死因となった疾病を特定したりした。うまく隠された死因を暴き出すのが、私の常だった。剖

検中に予期しない発見に息を呑んだことが、幾度もある。だが、今回は恐ろしかった。背筋が凍った。クロロホルム注射の秘密を知っていることにドクター・メンゲレが気づいたら、政治部「強制収容所ゲシュタポ」から少なくとも一〇人の医官⁽²⁶⁾が解剖室に来て、私の死因をはっきりさせることは必定である。

剖検が終了し、私の指示で死体は焼却場に引き渡された。死体は直ちに焼却された。

ドクター・メンゲレが直々に調べるために、私は、ある意味で科学的な観点から興味のある臓器だけを保存した。その臓器はベルリンのダーレムにある研究所でも興味を引くであろう。それはしかるべく包装され、郵便局から送付された。研究所に少しでも早く配達されるために、小包には「軍用速達」の切手を貼った。

収容所にいたときには、ベルリンのダーレムにある研究所に数多くの小包を郵送した。その返信には、詳細な科学的なコメントや次にすべき指示が書かれてあった。この往復のやりとりのために、私は別のファイルを作成しなければならなかった。そのファイルには、格別に魅力的なものを送付したドクター・メンゲレに宛てた研究所からの感謝状も入れておいた。

残りの三組の双子の解剖に取りかかり、内臓を比較した。どの死体についても、死因は心臓に直接クロロホルムを注射したことによるという結論になった。

四組の双子のうち、三組は両目の色が違っていた。一方は茶色片方は青色である。この現象は双子でなくても起こるが、何と八人の子どものうち、六人までがそうだった。異常形態が興味深く集中して発現している。医学用語で言えば、虹彩異色症であり、平たく言えば両目の色が違っているのだ。眼球を摘出して、一つずつ別々にホルムアルデヒド溶液の瓶に入れた。眼球が混同され

ないように、それぞれの瓶にはラベルをしっかりと貼った。

四組の双子を検案してみると、異常が他にもあることが分かった。頸部の周りの皮膚を剥離すると胸骨の上部にヘーゼルナッツほどの大きさの腫瘍が見つかった。ピンセットでつぶしてみるとドロツとした膿が出てきた。これは非常に珍しいが、医学ではよく知られた現象である。いわゆるデュボア腫瘍であり、先天性梅毒の症候である。双子八人すべてに、それがあつた。私は、周囲の健康な組織をつけたまま腫瘍を切除し、ホルムアルデヒドの瓶に入れた。二組の双子は海綿状肺結核に罹患していた。これらの観察結果をすべて報告書に記載したが、死因欄だけは空欄にした。

午後になって、ドクター・メンゲレが来た。私は、発見事実を報告し、五組の双子を解剖した検案書を手渡した。椅子に座り注意深くそれを読み、虹彩異色症に大変な興味を示したが、それ以上に彼はデュボア腫瘍には興味をもった。彼は、私の報告書を添えて、これらの標本をすべて小包で郵送すること、そして子ども一人ずつの死因を書いておくようにと指示した。たとえ別の死因を書こうが、どう書こうが、彼にはたいしたことではない。ドクター・メンゲレは、自分を正当化するように、君には分かっているかもしれないが、子どもたちは梅毒と結核に感染していたのだと言い、だから……と言おうとして、口を閉じた。⁽²⁶⁾人の子どもたちの殺人を正当化するには、それで十分だった。殺人という事実に私は口を挟まなかった。アウシュヴィッツの医師たちは結核にたいして人工気胸という治療を施さず、また梅毒にはネオサルバルサンを投与しなかった。致死量のクロロホルムを心

(26) これは、政治部所属の役付職員のことであろう。政治部の司令官は、同時に収容所の国家警察(この場合は、カトヴィッツの国家警察司令部)の長でもあった。

臓に注射しただけであった。

短い期間に死体焼却場について、どれだけ多くのことを学んだのか。死ぬ番が来る前に一言の反論もせずに、どれだけ多くのことを学ばなければならなかったか。このことを考えると、文字通り髪の毛が逆立ってしまう。死体焼却場のゲートをくぐった瞬間に、仕方のないことだと分かったが、多くの秘密を知ったからには、いささかの疑いもなく、私は早くも死んだも同然なのである。ドクター・メンゲレとベルリンのダーレムにある研究所がここから生きて解き放つことは、願うべくもない。

(二四) 脳をドーム状に囲む骨。前頭骨、頭頂骨、側頭骨、後頭骨などからなる。

(二五) 胸壁筋群（外肋間筋・内肋間筋・肋下筋・長肋骨挙筋・短肋骨挙筋・胸横筋）と横隔膜からなる。

(二六) 胸郭前面の正中線にある扁平骨。

(二七) 頸部食道、胸部食道、腹部食道に分かれる。

(二八) 心嚢とも。二重壁の嚢であり、心臓と大血管の根を含む。

九

夕方になって、ドクター・メンゲレは帰った。一人残されて、気が重い。解剖室を片付け器具を元の場所に戻して、手を洗いで術室から出た。タバコに火を点け椅子に座って、少しくつろいだ。すると突然、背筋がぞーっとするような恐怖の悲鳴が聞こえた。その直後に不意に銃声がして、一人がドスンと激しい音を立てて倒れた。一分もしないうちに、また恐ろしい叫び声が聞こえ、ピストルで撃たれた人が床に倒れる音がした。断末魔の叫び、銃声、そして転倒する音が七〇回ずつ聞こえた。重い足取りが遠くに去り、元通りに静寂が戻った。

この悲劇があった場所は、解剖室の右側の部屋で、廊下に向かってドアがあった。床がコンクリートで、鉄格子の窓から庭が見える暗い空き部屋だった。解剖前の死体がそこに置かれ、解剖してから焼却までの間、またこの部屋に戻される。この部屋の前には、汚れた衣服、すり減った木靴、メガネ、干からびたパンが山のようにあった。これらはすべて、女性収容所にいた囚人の私物である。

その部屋に足を踏み入れた。あれを聞いた後だから、おそろおそろ薄暗い部屋を見回した。その光景たるや、身の毛もよだつ恐ろしさをはるかに超えていた。目の前には、裸で朱に染まった若い女性の死体が七〇体、横たわっていた。血にまみれて重なり合っていた。近くに寄って見た。全部が全部、死んではいないことに気づいて、恐怖は高まった。腕や脚部が痙攣している人がいた。血だらけの頭をもたげる人、目をカッと見開いている人もいた。

私は動いている頭を持ち上げた。次の人にも、そしてその次の

人にもそうした。こうして私は、ある真実を発見した。それは、アウシュヴィッツではガス殺や殺人注射の他にも、第三の方法の殺人があるということである。後頭部への一発である。頭部の射創「銃創」から、口径が六ミリメートルのいわゆる小口径銃で撃たれたことが分かった。頭部には貫通射創を示す射出口は見当たらなかった。柔らかい鉛製の銃弾が使われたのではないかと思われた。銃弾は頭蓋骨によって潰されて、頭の中で止まったのであろう。残念ながら、私は一瞥しただけで本当の死因を特定できる専門家である。皮膚の火傷から、二、三センチ離れて後頭部に向けて撃つことが分かる。それでも、まだ死んでいない女性がいる理由が理解できた。銃弾が一ミリメートル二ミリメートル急所を逸れれば即死しないのだ。

このことは心に留めてはいるが、頭がおかしくなるのが怖いから、これ以上思い出したくもない。私は庭に出て、七〇人の不幸な女性はどこから来たかと、ゾンダーコマンドの作業員に尋ねた。「B II c 収容区で選別された。」と彼は答え、「毎晩七時になると、七〇人の犠牲者がトラックで運ばれてくる。みんな、後頭部に一発さ。」と言った。

重い頭でボーツとして砂利道と緑の芝生を歩きながら、夕方の雑用をしているゾンダーコマンドを見た。その日は夜勤がなかったのである。第一(一)死体焼却場は稼働していなかった。第二(二)、第三(三)、第四(四)、第五(五)の死体焼却場を見ると、煙突からはいつも通りに火柱が立っていた。

夕食には早すぎた。ゾンダーコマンドはサッカーをやらうとして、二つのチームが編成された。親衛隊 vs ゾンダーコマンドである。看守がピッチで配置に付いた。その反対側にはゾンダーコマンドがいた。キックオフ。大歓声が庭に響き渡った。親衛隊とゾンダーコマンドの観客もそれぞれのチームを熱心に応援し、さながら片田舎のありふれたサッカーの試合のように、選手をけしか

けている。密かに驚き、これも記憶に留めることにしたが、試合の終了まで待たず自室に戻ることにした。夕食後、一〇〇ミリのルミナル錠「長時間作用型鎮静催眠剤」を二錠服用した。私はもう少しで神経衰弱になりそうで、願いは一つ、眠ること、それも深く眠ることであるが、ルミナルの助けでまどろむだけでもよかった。これが私のたった一つの逃避策であった。

目が覚めたが、睡眠不足で足下がふらついた。隣のシャワー室に行つて、三〇分間、勢いよく流れ出る水のように冷たい水を浴びた。すり切れた神経によく効いた感じがする。ルミナールを飲み過ぎたが、元気が蘇よみがえった。ドイツ流の几帳面さがここにもあった。ゾンダーコマンドには、タイル張りの一〇人用のシャワー室が用意されていた。彼らは一日に二回、シャワーを浴びなければならぬ。この義務は誰もが喜んで励行した。

これで、しゃれた往診カバンを持つ準備ができた。それは、ゾンダーコマンドの作業員の一人が、「死体焼却場の」脱衣場から持ってきた。ガス殺を宣告されたある医師がそこに置いていったのだ。カバンには、血圧計、聴診器、注射器シリンジなどの機器のほか、応急処置用のアンブルも入っていた。全部で四棟ある死体焼却場を往診するときに、これらはどれもとても役に立った。私が居住している建屋から始めることにして、親衛隊宿舎の患者を往診した。そこにはいつも患者がいた。三日か四日の病欠をとって、体力を消耗させる仕事から逃れて休みたいからである。ところが、もつと深刻なことも、いくつかはあった。

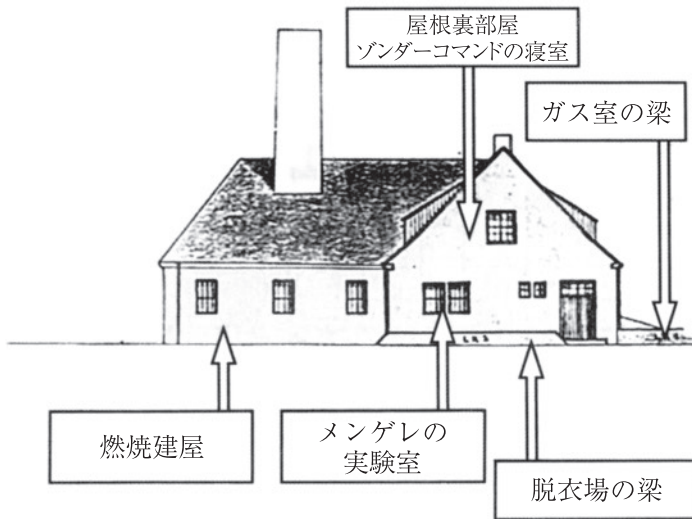
患者の治療には問題はない。医薬品の提供にかなする限り、私たちはベルリンにある最高級の薬局と競えるほどだった。ガス室行きの移送列車に残した大小の荷物を開梱し探索した囚人たちは、注意深くすべての医薬品を回収して、私に届けるようにと命じられていた。それを整理するのが私の仕事だった。移送列車はヨーロッパ中から来るし、医薬品には様々な言語のラベルが貼られていたので、この仕事は簡単ではなかった。ギリシア語、ポーランド語、チェコ語、オランダ語のラベルを解説するのは、骨が折れ

た。特徴的なことは、移送列車にあった医薬品の大半が鎮静剤「大脳皮質中枢の異常な興奮を抑制」か、精神安定剤「緊張状態の緩和、不安の消失」であったことである。これは、死へと少しづつ駆り立てられたヨーロッパの人々の精神状態を表している。

親衛隊の患者を往診してから、ゾンダーコマンドの居住区に行つた。そこでは何人かの火傷を治療した。火傷は、死体焼却場の炉で作業している囚人の間で頻発している。ゾンダーコマンドの作業員には、器質性疾患「組織異常による病氣」は稀である。衣服も寝具も清潔で、ごちそうを食べている。最高だと言ってもいいくらいだ。その上、皆、若くて体力があつて健康である。だから、この作業員に選別されたのだ。ところが、心理的な問題を抱えやすかった。兄弟、妻、子、両親、そして数え切れないほどの親類縁者が殺され、来る日も来る日も、何千体という死体がコンクリートの床に引きずり出され、焼かれ、徐々に灰になってゆくという戦慄すべき事実を知ってしまった。このために重症のうつ病や抑うつ症状を発症した。誰もが、とても苦い過去を持ち、将来を恐れていた。ゾンダーコマンドは寿命が限られていたからである。四年間の収容所暮らしで体験した悲劇は、どのゾンダーコマンドであっても、四ヶ月と続かないことを教えていた。四ヶ月後には、いつもより多い親衛隊員が予期せずに見えゾンダーコマンドを庭に集め、そして銃弾の雨。これでお仕舞い。三〇分後には、新たに選別された別のゾンダーコマンドが到着する²⁷⁾。彼らは、前任者、つまりは三〇分後には手のひらに載るほどの灰になってしまふ死体から、衣服をはぎ取った。新しいゾンダーコマンドの最初の作業は、自分たちの前に作業をしていた者の死体を焼くことであつた。

(27) 注21を見よ。

往診でゾンダーコマンドの宿舎に行くことと決まって、脇に連れ出して迅速かつ効果的に死ねる毒薬がほしいと密かに頼み込む人がいた。私はいつも拒否したが、今ではそれを後悔している。彼らに希望するように、そして希望したときには、素早く死ぬことのほうが良かったのではないだろうか。彼らは迫害する者に殺されるよりは、自殺するほうを望んでいたのだから。



グラビア 23 第1(2)死体焼却場の西側側面
第1(2)死体焼却場の西側からの図面。

—

次の往診先は第二(三)死体焼却場である。それは、草地とユダヤ人収容区に通ずる線路によって、第一(二)死体焼却場から隔てられていた。第一(二)死体焼却場と第二(三)死体焼却場は同じデザイン「鏡像」であった。これらの死体焼却場には、脱衣場、ガス室、焼却炉、そして、親衛隊とゾンダーコマンドの寝室があった。第一(二)死体焼却場で解剖室と診察室があった場所に、第二(三)死体焼却場には小さな金の精錬所があった。このことだけが違っていた。そこは、金歯、装身具、金貨、宝石、プラチナ、腕時計、タバコ・ケースなど、移送列車から回収したり、死体から取り外したりした貴金属製品の終着駅であった。三人の金細工師がそこで働いていた。彼らは略奪品を消毒して分類し、はめ込んだる宝石を取り出して、金はルツボに入れた。金歯などの高価な物からの、毎日の「生産量」は金の延べ板にして三〇結(三五五)になった。

精錬した金は黒鉛の鋳型に注いで、直径がおよそ五センチメートルのトタンに成形された。トタンの重さは一四〇グラムである。私が実験室で実際に計ってみたので、間違いない。

しかし、焼却炉の前に横たわる死体から抜き取った金歯の全部が、塩酸を満たしたバケツに入れられるとは限らなかった。その量はともかくとして、いくつかは歯科医のポケットに入った。それは、親衛隊の監視兵がどの程度近くにいるかによる。ガス室で殺された犠牲者の荷物や衣服から、金貨、宝石、その他高価な物を探す役目のゾンダーコマンドにしてもそうで、くすねることは生命を脅かすほどとても危険なことだった。何せ、親衛隊が至る所において、第三帝国が没収した貴重品、とりわけ金と宝石には目

を皿のようにしていたからである。

はじめの頃、私はゾンダーコマンドによる金の着服が人倫に叶うものかどうかを疑っていた。しかし、置かれた状況にもっとよく向き合ってみると、数日後にはその行為は正しいことが分かった。

ゾンダーコマンドの囚人もまた、親衛隊の目を逃れて金製品を精錬所に持ち込んだ。セキュリティは厳重だったが、密かに持ち込む方法がいくつかあった。囚人は金を一四〇グロのトークンにしたが、その金を売ったり、必需品と交換したりすることには、それ以上に難しい問題があった。はつきり言うが、金をしまい込んでおこうとする者は誰もいなかった。四ヶ月以内に死ぬことが分かっていたからである。このような状況では、四ヶ月はとてつもなく長い。この四ヶ月間は、できるだけ楽な生活をして凌ぎたいと願ったのである。それには金が役に立った。

第一期のゾンダーコマンドのときからすでに、一四〇グロの金製トークンは闇通貨だった。精錬所にはあれよりも小さな鋳型がなかったもので、もっと小さいトークンはなかった。柵の外の市場価格とはまったく関係がない。金の売人は死体焼却場のゲートをくぐるときに、生命を落とす可能性がある。しかし、金と物々交換する人は二回生命を落とす可能性がある。最初は、親衛隊の非常線を破って収容所から密かに金を持ち出すときであり、その次は、物品を密かに収容所に持ち込むときである。ほとんどすべてが配給だったので、物品を外外部で調達するのは、すこぶる困難であった。非常線の内と外の両方で身体検査の危険にさらされていたからである。死体焼却場のゲートに近づき、ゾンダーコマンドは当番の親衛隊員と少しだけ言葉を交わした。囚人のポケットの中には金がある。こうして金の旅が始まる。親衛隊員は踵を返して、ゲートから離れていった。そのとき、死体焼却場の周辺には、二

〇人〜二五人のポーランド人の鉄道保線作業班とその職長がいた。ゾンダーコマンドの囚人が合図をすると、保線作業員の一人が金のトークンを受け取り、その交換に「何かが入っている」袋を渡した。そのトークンは必ず紙で包装されていた。こうして保線作業員は金を受け取り、次の日の注文も受ける。

それから、ゾンダーコマンドの囚人はゲートの隣にある衛兵詰所に行つて、袋からタバコを一〇本とウォッカ一本を取り出した。すかさず親衛隊員はタバコとウォッカをポケットにねじ込んだ。親衛隊員にはタバコが一日二本、それと特別なときに限つてウォッカが支給されるだけなので、さぞ喜んだことだろう。タバコとウォッカは、死体焼却場では感覚を鈍麻させる手段として貴重だった。親衛隊員もゾンダーコマンドの作業員も、大酒飲みでヘビー・スモーカーだったのである。

このようにして収容所に届けられた物品は、主としてバター、ハム、タマネギ、卵などであった。移送列車はこのような食料を運ばないからである。囚人の金は全部まとめられ、その収益は全員に分配された。死体焼却場の司令官も下士官も親衛隊員は、タバコ、アルコール、食料などの形で相当の分け前に与つた。何も知りたくなかったので、もちろん、みんなが知らぬ顔の半兵衛を決め込んだ。そのほうが彼らにとっては都合であり、儲けにもなった。死体焼却場の親衛隊員は一人ずつ説得されて引きずり込まれた。他の親衛隊員に見つかることだけが、恐ろしかった。しかし、ゾンダーコマンドには誰一人として裏切る者がいないことを彼らは知っていた。だから、賄賂も取引も一対一で行われた。どの親衛隊員も自分一人だけの分け前を受け取った。

その他に、死体焼却場に毎日、密かにもち込まれたのは、第三帝国公認の日刊紙『国民の監視人』紙。国家社会主義ドイツ労働者党(NSDAP)の機関紙だった。これは鉄道保線作業

員の職長が配達した。その月額購読料は一四〇^ギの金のトークン一個であった。強制収容所の囚人に三〇日間新聞を配達してくれたことへの報酬としては十分である。第一(二)死体焼却場に配置されてから、私は毎日これを受け取った。人目を避けてこれを読み、最新のニュースを書記に話した。すぐに彼は仲間と話し、数時間のうちに最新の事実がみんなに伝わった。

ゾンダーコマンドは明るく清潔で広々とした所で生活していた。彼らは暖かいキルトを掛けた柔らかい枕で寝て、ごちそうを食べ、素晴らしい服を着ていた。タバコもあればアルコールもある。シラミに刺され飢えた囚人がひとかけらのパンやジャガイモ半かけのために、狭い収容所で激しくいがみ合っているとは違って、死体焼却場での人間関係がけつして非情なものにならないのは、おそらくこのせいであろう。ゾンダーコマンドの振る舞いはじつに立派だった。できるときにはいつでも手を差し伸べるのが決まりである。女性の囚人五〇〇人が、軍用犬を連れた二人の親衛隊員に監視されながら、数日間、ゲートの外で道路工事をしていたことがある。石を道路まで運ばなければならなかった。ゾンダーコマンドの何人かの作業員が自分たちの監視兵に非公式ながら許可を得て、女性の囚人を担当していた二人の親衛隊員と接触し、タバコを一箱ずつ手渡した。これで一件落着。石を運んでいた女性性が三、四人、ゲートに近づき、そこで働いている振りをした。すぐに彼女たちは、かねて用意のセーター、靴、下着をもらった。タバコ、ペーコン、パンもだ。彼女たちは交代でゲートに近づいた。ゾンダーコマンドもさりげなくプレゼントを渡せる距離までゲートに近づいた。これは、純粹に言って、名誉の問題である。ゾンダーコマンドの中には、これらの囚人を一人として知っている者はいなかった。それなのに、衣料品、靴下、ジャンパー、タバコ、石けんなど、何百もの物品を与えた。女性たちは喜んで

戻って行った。次の日も同様であった。死体焼却場の保管庫には有り余るほどの物資が保管されていたからである。

ゾンダーコマンドは何千人もの人々を助けた。私もその一翼を担った。ポケットには、ビタミン剤、外用用サルファ剤の散剤「化膿や淋病などの特効薬」、包帯、ヨードチンキの小瓶を携行していた。生気を与える、かけがえのない医薬品を補充するために三回も四回も自室に戻り、最も必要としている人に与えた。

第二(三)死体焼却場の次に、往診で第三(四)死体焼却場と第四(五)死体焼却場へ行った。第三(四)死体焼却場で作業していたゾンダーコマンドには、ポーランド人とギリシア人の他に、ハンガリーから移送された一〇〇人がいた。第四(五)死体焼却場のゾンダーコマンドは主としてポーランド人とフランス人であった⁽²⁸⁾。

どこでも、作業は迅速に進展していた。ランプは、ガス室に直行する新しい犠牲者を次々と押し流す暴れ川のようなだった。巧みに考案された操業メカニズムと地獄の悪魔も顔負けの作業組織をもつ巨大な死の工場では、一つ一つの駒が一体となり調和している。私はそれを見て度肝を抜かされた。死の工場は永遠不滅のように思われた。何か奇跡的な理由で解放され、見たことを自由に語ることができればと夢みたいなことを思う。しかし、私の言うことは誰も信じてくれないだろうとも思う。身の回りで起きた出来事を語る言葉もない。それでもなお、心に留めるよう努めたい。けつして忘れないために。

(28) ニスリは、ここではポーランド、ギリシア、ハンガリー、フランスから来たユダヤ人のことを言っている。ゾンダーコマンドは基本的にはユダヤ人で編成された。ニスリがゾンダーコマンドと一緒にいた頃は、ユダヤ人の他にドイツ人一人、ポーランド人五人、ロシア軍の捕虜一九人がゾンダーコマンドにいた。

地図が付いた『ラルース小百科事典』を入手した。新聞で読んだ場所を調べることができる。ある日、西部戦線、南部戦線、東部戦線の情勢を調べようと地図を繰っていたら、突然、部屋に近づいてくる足音がした。すぐに地図を閉じて隠し、不安げにドアを見た。訪問者は死体焼却場の司令官だった。彼は、午後二時に調査委員が多数来るので、解剖室を準備しろと言った。

まず霊柩車が止まった。ピカピカに光るリムジンは、親衛隊大尉の死体を乗せていた。到着すると直ちに、その死体は軍服のまま解剖台に載せられた。

委員は定刻に到着した。調査委員会は、立派な服装の親衛隊高級将校からなり、親衛隊大佐の医官、検察官、予審判事、将校担当のゲシュタポが二人、それと軍法会議書記官がいた。数分後にドクター・メンゲレが入室し、皆さん、お掛けくださいと言った。会議が始まった。捜査官は、死体の発見状況を説明した。射創「銃創」は暗殺かあるいはそれ以外の殺人であることを示していた。死者のピストルはベルトのホルスターに入っただまなので、自殺ではない。加害者は、被害者の元同僚であるか、あるいは恨みを抱く者の可能性もある。しかし、暗殺が最もありそうに思われた。パルチザン活動と暗殺が常態となったグリヴィツェ「ポーランド西部の都市、クラクフの西約九五緯」とその周辺には、多数のポーランド人が住んでいたからである。

解剖は、被害者が前方と後方のどちらから射殺されたかを確定するためであったが、銃の口径と射撃距離をはっきりさせるためでもあった。当時グリヴィツェには検視官がおらず、解剖は死体焼却場で行われることになった。適当な最寄りの施設はグリヴィ

ツェからわずか四〇緯のアウシュヴィッツにあったからである。強制収容所の囚人であるユダヤ人の私が、故人となった親衛隊の将校に触って「汚す」ことが許されるのは夢にも思わなかった。しかも、一人で解剖するとは。まだ自由の身であった頃に、ユダヤ人医師にはカトリック信者とアーリア人の治療を禁止するという法律がすでに制定されていたのに、である。

したがって、ドクター・メンゲレが私に解剖するように命じたときには、とても驚いた。まず、死体を裸にしなければならぬが、これがそう簡単ではない。ブーツを脱がせるのは、二人が必要なほど骨の折れる仕事だ。そこで、私は助手一人をつける許可を願いだした。調査委員会のメンバーは私たちの仕事ぶりを観察し、そして私にも手伝いにも一切おこまいなしに熱っぽく議論を交わした。

私は震える手で第一刀を入れた。素早く巧みな手さばきで頭皮を切り、皮膚の半分を顔のほうに、もう半分を首の後ろのほうに引っ張った。次の段階はもつと手際を要する。頭蓋冠を鋸で切断して取り除くのである。ともかくこれを手早く、教科書通りにやってのけた。今度は、二つの射創を診断する番である。銃弾が体を貫通していれば、当然ながら射創は二つできる。射入口と射出口である。多くの場合、射入口と射出口を専門家が識別することは簡単である。射入口の傷は小さく、射出口は大きいからである。ところが、このときは、左の乳首の下にある胸の射創と左の肩甲骨の上にある射創が同じ大きさだった。

これは明快というものからはほど遠く、そのため興味深い事例になった。どうすれば、射入口と射出口の大きさが同じであることを説明できるだろうか。経験と矛盾する事実を説明しなければならぬ。突然、ドクター・メンゲレが仮説を立てて、二つの射創は一発の銃弾が体を貫通したからではなくて、二発の銃弾が体

内に入ったが、出てこなかったのではないかと言った。おそらく、被害者は最初の一発で胸を撃たれ倒れ込んだところを、二発目で背中を撃たれたかもしれない。この推理にはもつともなところもあるので、調べてみる必要があった。まず、胸の中の射創管「貫通射創が形成する創洞」を辿ることにした。銃弾は心臓を貫通し、上向き三五度の角度で脊柱の左側をかすめて、左肩甲骨の上部に達したことが確認できた。銃弾は、肩甲骨の一部を破壊して体から出たのである。今や状況は明確である。私たちが診断しているのは、ただ一発の銃弾でできた射創である。あらゆる証拠が物語るように、射創管は胸から背中にかけて上向き三五度の角度になつていたので、前から撃たれたことになる。射入口の射創と射出口の射創が同じ大きさに見えたのは、銃弾が脊柱をかすめて肩甲骨を破壊し、体外に出る前に勢いを失ったからである。下向き三五度で銃撃する者は誰もいないであろう。そうするには、腕を高く上げなければならぬが、それはおかしいと言ふべきであろう。パルチザンはそのようなやり方で射殺することはない。彼らにはそうする必要がない。狙いを定めて撃てばよい。至近距離から大尉を射殺した銃は上向きにした連発拳銃であつて、背中からではなくて前から発射された。加害者は見知らぬ人か、あるいは大尉の知り合いであろうか。この質問に答えを見つけるのは、ドイツ警察の仕事である。

調査委員会のメンバーは私の仕事ぶりに喜んだように見えた。その上で彼らは、今後は剖検が必要な事案はすべてここに送付するとも言つた。それが最も便利で最良の解決策であると決まつた。こうして剖検が首尾よく終わり、強制収容所の囚人医師である私は、このときからグリヴィツェ地区の検視官になつた。おそらくこのポストに就いた者は、世界中を探しても一人もいなかったのはあるまいか。

一三

ある日の早い午後に電話があり、ブジェシヅカに来るようにと命令された⁽²⁹⁾。医薬品やメガネを回収することになつたが、それらは第一(二)死体焼却場で分別され、第三帝国に輸送される。松の木に囲まれ、白樺の林の向こうに隠れているように見えた野外死体焼却場は、第四(五)死体焼却場から五〇〇メートル六〇〇メートル離れた、収容所の有刺鉄線の外側、すなわち局所非常線と広域非常線の間にあつた⁽²⁹⁾。

そこは、私が自由に動き回ることができた収容区の外にあつたので、書面による許可を願ひ出た。荷物を運ぶのに二人の手伝ひが必要で、囚人三人分の通行証を受領した。三人は、どんよりと黒い渦を巻きながらまっすぐ立ち昇る煙のほうに向かつた。アウシュヴィッツで不幸を背負つてゐる人は誰でも、この吹き上がる煙を目にした。移送列車から降りてすぐに、選別のための行列に並ぶ人もそれにはすぐに気づいた。夜となく昼となく、収容所のどこからでも見えた。日中は、白樺の林を覆う厚い雲のように見え、夜は、焼却溝から立ち上がる炎が地獄の輝きで辺りを照らした。

死体焼却場を通り過ぎ、ゲートで親衛隊の歩哨に通行証を提示すると、遮るもの^{Verhindernde}が何もない道路に難なく出ることができた。新

(29) 局所非常線には、有刺鉄線の囲みに沿つて監視塔が建ち監視兵が配備された。広域非常線は、収容所から数百メートル数キロ離れた所にあつて、収容所を取り囲んでいた。そこには監視塔があり、通常は作業員が収容所を出てから戻るまでの間、監視兵が配備された。囚人が逃亡すれば、外側の非常線は、三日間、昼夜を問わず固められた。



グラビア 24 死体焼却場とガス室を隠すフェンス：1945年，スタニスワフ・コロウカ撮影。

鮮で緑色の草地はのどかなものだったが、およそ一〇〇軒先に、機関銃の側に立ったり座ったりして鎖のように繋がっている人たちがいるのに気づいた。軍用犬のジャーマン・シエパードも数頭いた。

草地を横切って針葉樹のほうに行くと、また有刺鉄線のフェンスと木でできたゲートがあった。その上には死体焼却場にあるのと同じような看板があり、「部外者ならびに無許可の親衛隊員は通り抜け厳禁」とあった。しかし、私たちはゾンダーコマンドから来たので、通行証を見せなくても通してくれた。すでにそこでは日勤のゾンダーコマンド六〇人が作業をしていた。彼らは朝七時から夜七時まで作業し、第四(五)死体焼却場から来る夜勤のゾンダーコマンド六〇人と交代する。

ゲートをくぐって庭みたいなところに入ると、その中央には藁葺きで漆喰が剥離した建物があったが、小さな窓には目隠しがされていた。年を経て黒ずんだ屋根と厚く塗った漆喰から判断するに、それは、少なくとも築後一五〇年は経っていそうな農家のあ

ばら屋³⁰だった。ドイツ人が収容所を建設するまでは、オシフイエンチム村(アウシュヴィッツ)に隣接するブジェジнка村(ビルケナウ)には集落があった。その後、すべての住民を立ち退かせて住宅を取り壊し、この納屋だけを残した。この建物は元々は何に使用していたのであろうか。そこには人が住んでいたのだろうか。今は仕切り壁が取り外されて一つの大きな部屋だけの家になり、特殊な用途で使用されている。それとも以前からこのようになっていたのか。おそらく最初は倉庫のようなものだったのではないか。私には分からないが、ともかく今は衣服を残して野外死体焼却場で死のうとする人たちの脱衣場として使用されている。

四棟の死体焼却場すべてが処理能力一杯に稼働しているときに、ランプに新たに移送列車が到着すると、最悪の事態が待つこの白樺林まで彼らは歩かせられる。他の囚人とは違って、彼らは水で渴を癒やすことができない。一時的に騙すための注意書きもない。

(30) これは、ブジェジнка村にあった農家の納屋を改築して、一九四二年の中頃に初めて使用された臨時のガス室である。四棟の死体焼却場が稼働するようになったために、ここでガス殺は行われなくなったが、ユダヤ人の移送列車がハンガリーから殺到するに及んで、一九四四年五月にガス室として再び使用されるようになった。この建物は当初、「白い小屋」とか「第二バンカー(Bunker 2)」とか言われていたが、一九四四年には「第五バンカー」と言われるようになった。「この小屋は四室に別れ、それぞれに入り口と出口が四ヶ所ずつあり、出口付近からは死体運搬用の狭軌鐵路が野外死体焼却場まで敷設されており、各室にはチクロンBを投入する窓があったとする証言がある(Marcel Ruby, *La Libre della Déportation, La vie et la mort dans les 18 camps de concentration et de extermination*, Paris, 1995. 菅野賢治訳「ナチ強制・絶滅収容所18施設内の生と死」筑摩書房、一九九八年、三二七頁)。」



グラビア 25 第4 (5) 死体焼却場の近くの野外で死体を焼却するゾン
ダーコマンド
1944年にアレクシスという名のギリシアのユダヤ人が密かに撮影した。



グラビア 26 オトー・モル

浴場と間違えるような建物もない。あるのは、藁葺き屋根の、ずいぶん以前に漆喰を塗ったきりで、窓には目隠しをした農家のあばら屋だけ。その後ろでは、もうもうと煙が立ち、辺り一面には人間の肉が焼ける臭いと人毛がくすぶる臭いがしている。庭には恐れおののく五〇〇人くらいの人がいる。大型のジャーマン・シェパードのリードを手に、密に並んだ親衛隊員によって取り囲まれていた。三〇〇人〜四〇〇人の犠牲者が揃ってあばら屋に入った。ひっきりなしに警棒で叩かれ駆り立てられて、衣服を脱ぎ、入り口とは反対側の出口から出た。外に出ても、彼らは周りで起こっている恐ろしい出来事のことを考える時間はない。すぐにゾンダーコマンドの作業員が二人一組になって一人ずつを両脇から挟み、二列に並んだ親衛隊の間を通り、松の木叢を抜ける曲がりくねった小道を降りていったからである。小道のお仕舞いまで行き着いて野外死体焼却場を見たときに、事情が明らかになる。

野外死体焼却場は一つの溝が長さ五〇メートル、幅六メートル、深さ三メートルで、

その中で何百もの死体が焼かれていた。それぞれの溝には、後頭部を撃つための口径六ミリの特殊なピストルを携行した親衛隊員が取り巻いていた。不幸な犠牲者たちが木の陰から現れるや、男も女もゾンダーコマンドの作業員二人に親衛隊員の銃口の直前まで一五メートル以内引きずられた。まさに死のうとしていた人たちの身の毛もよだつ叫び声で、銃声でさえもかき消されてしまうほどである。ふつうは小口径のピストルから発射された銃弾は犠牲者を殺傷するには不十分であるから、犠牲者は生きながらにして地獄に送られることになる⁽³¹⁾。

屋内と野外両方の死体焼却場の司令官は、モル軍曹であった⁽³²⁾。医師として目撃者として、私は、ぜひとも、この男が第三帝国の犯罪者の中で最も残忍で、最も下劣だったと証言したい。このモルに較べれば、ドクター・メンゲレでさえも見せかけではあるが、人間的な感情みたいなものがあつたのではないかと思う。きわめて稀な事例であるが、ドクター・メンゲレがランブで選別していたとき、若くて顔立ちの整った女性が命令に反して、左の列にいる母親と一緒にしろうとしたことがある。このときドクター・メンゲレは品のない言葉で二人とも右の列に入れと命令した。第一(一)死体焼却場の死刑執行人の首領ムースフェルト軍曹でさえも、犠牲者が即死しない場合だけにしか二発目は撃たな

(31) 銃によるこのような虐殺はむしろ稀である。溝の中で焼かれた死体のほとんどは、ガス室で殺された。「野外の死体焼却場の近くには、脱衣室とガス室があつた。」

(32) オトー・モル(一九一五年三月四日、ホッペンシエーネンベルク生まれ)は、一九四一年五月から一九四五年一月までアウシュヴィッツで様々なポストに就いた。死体焼却場の責任者であった頃の階級は上級軍曹であった。彼はダハウ強制収容所の幹部にたいする裁判で、一九四五年二月三日、死刑判決を受け、その後執行された。

かった。ところが、モル軍曹にはそんなことは一切なかった。

神出鬼没のモルは、たゆまず野外死体焼却場の周りを歩き回り、建物と燃えさかる火の間を何百回となくうろついていた。ほとんどの人は抵抗せずに、処刑場に引き立てられていった。何が起ころうとしているのかが分からないほど、恐怖で心が麻痺したのだ。このようなことは、とくに子どもと老人によく見られた。しかし、自己保存の本能が若者を駆り立てて、闘わせることもある。その兆しが心のどこかにあると見抜いたときには、決まってモルは常時カバを開けているホルスターからすぐにピストルを抜いて、四〇びり五〇びり先から射撃した。モルは射撃の名人だったので、闘おうとした囚人は即死である。ゾンダーコマンドの仕事ぶりが気に入らない囚人の手を撃つて穴を開けるといふ趣味が、モルにはあった。呼びつけたり警告したりせずに、いつも正確に掌を撃った。

私は野外死体焼却場に残されたメガネと医薬品を回収した。心に傷を負い、震えながら第一(二)死体焼却場の「我が家」に向かった。ドクター・メンゲレが言ったように、そこは療養所^{サントワム}ではないが、まずは耐えられる。彼は正しかった。あれを見て、ドクター・メンゲレの真意が分かった。

まっすぐに自室に戻った。その日のうちに医薬品とメガネを分類できるように状態ではなかった。ルミナル錠を数錠服用してベッドに直行した。このときの服用量は三〇〇ミリグラムであるが、この量では、野外死体焼却場で見た亡霊から移された病気を克服できるかどうかは定かではない。

(一九) ブージェンカ／ビルケナウはアウシュヴィッツ／オシフイエン

テムに隣接する村の名称であるが、以下の叙述から同地にあった野外死体焼却場の別名でもあったことが分かる。

一四

目が覚めた。新しい一日、新しい経験。収容所の中では毎日、その一瞬一瞬が恐ろしい。これまでに想像できなかったほど恐ろしい。

この日、ゾンダーコマンドで一番の情報通だった作業員から誰もバラックから出てはならないと言われた。親衛隊員が巡廻し、軍用犬のジャーマン・シェパードはリードを外されている。今日はチェコ人収容所が清算される日だ。

チェコ人収容所には、テレジン^(二〇)のゲットーから移送された一万五〇〇人がいた。ジプシー収容所と同様に、ここでも家族が一緒に住むことを許されていた。彼らもまた、到着直後の「選別」を受けなかった。条件はとても酷いものだったが、それでも老若を問わず、小さな子どもまでもが一緒にいることができた。チェコのユダヤ人は私物を着ており、作業を強いられることはなかった。今日までの生き方がこれだった。そして、彼らの番がきた。詰まるところ、アウシュヴィッツの収容区は死の収容所だったのである。遅かれ早かれ、すべての囚人が抹殺されることになっている。

ハンガリーからは次々と移送列車が到着している。二本の移送列車が同時に到着することもしばしばである。そのようなときには、人が文字通り川のように貨車から流れ出た。ドクター・メンゲレがランプでやっているのは、もはや選別ではない。彼の手はただ一つの方向、つまり左だけを指している。移送されてきた人はすべて直ちにガス室か燃え上がる溝のどちらかに送られる。毎日、移送列車は他の収容所にも向かったが、それでもアウシュヴィッツにある検疫収容所(B II a 収容区)、B II c 収容区、B

II d 収容区、そして女性専用強制収容所^L ³⁵はいつも満杯だった。老人、衰弱した者、異常なまでにやせ細った子どもは、まだ働く体力のある新規到着者に場所を与えなければならなかった。

すべての囚人をバラツクに幽閉する命令は、早朝に出された。親衛隊の数個中隊がチェコ人収容所を包囲して、点呼のために収容者を追い出した。死を待つ人々がトラツクに乗せられるときに、大きな叫び声が出た。自分たちがどうなるかははっきりと知っていたからである。彼らは十分に事柄を知るだけの長い間、収容所にいた。最後の日にはチェコ人収容所には一万二〇〇〇人がいた³⁴。八人の医師を含めて一五〇〇人の男女が労働に適すと選別された。残りは、第二(三)死体焼却場と第三(四)死体焼却場に送られた。

翌日、チェコ人収容所には誰もいなくなった。第二(三)死体焼却場と第三(四)死体焼却場の喧噪を極めた作業も終わった。私が見たのは、遺灰を積んで死体焼却場を出発し、ヴィスワ川^{三二}に向かったトラツクだけである。

収容所の人口は一夜にして一万人が減少し、収容所の書庫には一冊だけファイルが増えた。公文書には次のような簡単な記載があった。「アウシュヴィッツ強制収容所のいわゆるチェコ人居住区で集団発生したチフスにより、前記付属収容区は整理された。」そして、「親衛隊大尉、収容所医官 ドクター・メンゲレ」と署名されていた。

ドクター・メンゲレは、ドクター・ベルトルト・エプシュタイン³⁵「プラハ大学医学部教授、小児科医」の取りなしで、チェコ人収容所にいた八人の医師の生命を救った。そのときまでに、これらの医師たちは実際に流行したチフスと闘い、患者を治療することに全エネルギーを投じていたので、肉体的にも精神的にも疲労困憊の状態であった。彼らもチフスに感染して、とうとうB

II f 収容区の病院に入院してしまった。チェコ人収容所が清算されたあの日に、たまたま私は、あの建屋区で用務があった。チェコ人収容所で囚人担当の主任医師を務めていたプラハ出身の世界的に著名なドクター・パウエル・ヘラーと話すことができ、チェコスロバキアのユダヤ系知識人の苦しみと絶滅の話を聞いた³⁶。八人の勇敢な医師もすぐに死亡した。彼らは本当の医者で、深甚なる尊敬の念をもつて記憶するにふさわしい。

(二〇) プラハの北西約60^{キロメートル}。北ボヘミアのオムジェ川沿いの、エルベ川との合流点の近くにある。三二、注54参照。

(二一) ビルケナウ強制収容所を囲むように西側から北側へと流れ、クラフ、ワルシャワなどに至るポーランド第一の長流。

(33) FKL (Frauenkonzentrationslager) の意味は女性専用強制収容所。アウシュヴィッツ収容所総司令官「ルドルフ・ヘス」がそれを縮めて女性収容所 (Frauenlager) とした一九四三年三月三〇日以降は、ビルケナウではFKLの名称は使われなくなった。「改称の理由は、「この収容所が強制収容所であることを隠蔽するため」と言われている (Danuta Czech, *Kalendarium der Ereignisse in Konzentrationslager Auschwitz-Birkenau 1939-1945*, Reinbeck bei Hamburg 1989, S. 453)」。本文は、公式の改称にもかかわらず、旧名称が通用していたことを示唆する。」

(34) 実際には一万人である。およそ三〇〇〇人が作業に適すとされ、残りの七〇〇〇人は一九四四年七月一日と二日にガス室で殺された。

(35) ドクター・ベルトルト・エプシュタイン教授は、ドクター・メンゲレの実験室付きのチェコのユダヤ人。

(36) テレジン・ゲットから来たユダヤ人のための家族収容所について、Miroslav Kamy, "Das Theresenstädtler Familienlager (B II b) in Birkenau (September 1943- Juli 1944)," *Hefi von Auschwitz*, 1997, No. 20 を見よ。

一五

以前にチェコ人収容所として使われていた収容所の近くにあるBⅡc収容区には、ハンガリーのユダヤ人女性が入容された。毎日、ここから他の収容所に向かって移送列車が出発するのだが、BⅡc収容区の入容者は六万人に達することもある。チェコ人収容所が絶滅された後の日のこと、医師たちの診断で、定員超過の収容区で猩紅熱に罹っている者が見つかった。ドクター・メンゲレの命令によって、発症したバラックとそれに隣接するバラック二棟にたいして厳重な検疫が実施された。検疫は早朝から晩まで続き、三棟すべての入容者がトラックで死体焼却場に運ばれた。流行病の発生を効果的に抑制するためにドクター・メンゲレが執った措置である。

流行病と格闘するドクター・メンゲレの措置によって、チェコ人収容所とBⅡc収容区のバラック三棟が閉鎖された。囚人医師たちはこの病気がどうやって伝播するかをすぐに把握し、この感染症がさらに発生しても親衛隊の衛生当局には知らせないでおくことにした。これが幸いした。病気に罹った囚人はバラックの一番奥の暗い小部屋に隔離され、わずかに保管されていた薬で治療された。親衛隊の医官による巡廻検診がある収容所病院に送られることはなくなった。だが、悠長にはしていられない。感染した囚人を見つかれば、その患者がいたバラックだけでなく、その両隣のバラックも閉鎖されてしまうからである。親衛隊の言う「流行病の発生にたいする、広範な予防措置」である。この措置の結果は、二台、三台のトラックに積まれた遺灰である。

公衆衛生や流行病を取り扱っていたとき、私はこれと似たような言い回しを使用していた。臨床では、たとえばジフテリアやチ

フスに罹った患者を隔離し、他方で発症者の近隣に住んでいる人々には予防接種を施して蔓延する病気を闘った。だが、ここは場所が違い行動規範も別である。

アウシュヴィッツでこのようなことがあったすぐ後のことだが、私に剖検するようにとの命令がドクター・メンゲレからあり、二人の女性の死体が死体焼却場から持ち込まれた。いつものように私はこれら二人の女性の死体にかんする記録を注意深く読んだ。二体とも所見はチフスであるのに、死因は二人とも同じで心不全となっていた。この文書の記載欄のすべてにクエスチョン・マークが書かれていた。私は、事を起こす前に立ち止まって、あれこれと詮索するタイプではない。問題が重要な決定を要するときには、即決断、即行動である。いつも目覚ましい結果が得られるとは限らないが、死体焼却場に行き着いたのは瞬時の決断による。

ドクター・メンゲレが受け取った診断所見では、チフスの症状が確認できない。これはすぐに分かった。このままにはできないと思った。その上、様々な症状の記述が不完全であり、特定された病名は疑わしい。ドクター・メンゲレはまだ病名を知らない。そうでなければ、私の所に二体の死体を送るようなことはしないだろう。それが、全身にたいする死体検案の唯一の目的であった。解剖を進めると、二体とも、小腸にはチフスの最終段階の症状が認められた。少なくとも週齢第三週の典型的なチフスによる潰瘍形成があった。さらに二体とも脾腫「脾臓の腫れ」が見られる。チフスかもしれない。

ドクター・メンゲレは、いつも通り、五時頃に来た。近づいてきた彼はとても朗らかだった。この男が、あの言うに言われない残忍さと隣り合わせにいるとは信じられないくらいだった。彼は明らかに興味深げに、発見事実を尋ねた。死体は開腹されて、解剖台の上に横たわっていた。解剖した大腸、小腸、脾臓を別々の

容器に入れて、ドクター・メンゲレが望めば、もっと調べられるようにしておいた。私は公式には、広範囲の潰瘍形成を伴う小腸炎という診断を下し、ドクター・メンゲレに、週齢第三週の腸チフスによる潰瘍形成と腸炎による潰瘍の違いについて模擬講義をした。さらに、脾腫は小腸炎に類発する症状であるとも言った。この病名はチフスではなくて、重症の潰瘍形成を伴う小腸炎であり、最も可能性が高いのは食中毒による。

ドクター・メンゲレは、人種生物学(三三)の専門家ではあるが、法医学者ではない。私の診断の正しさを信じさせるには何も難しいことはない。しかし、当初の診断が間違っていたことにたいして、彼は明らかに腹を立てていた。このような重大な誤りを犯した女性の囚人医師たちは収容所の病院で働くのではなく、石を運ばなければならないと言って、この怒りを露わにした。救われたかもしれない患者の生命は誤診の犠牲になった。

彼は検案書を受けとり、何やらその余白に書き込んでから、書類カバンに収めた。彼の後ろに立って、肩越しにのぞき見ると「女医と協議」と書かれていた。おおよっぱに翻訳すると、この医師二名に責任を取らせるという意味である。

完璧な診断を下したことによって仲間の医師たちを恐ろしい罰に晒(さら)してしまった。私は深く後悔した。今頃は医師としての仕事を失い、重労働を強いられる道路建設作業員になっていることだろう。ドクター・メンゲレが書き付けた決断を実行に移すとすれば、それは私のせいだ。

私は、医療行動規範を破り、有刺鉄線の囲いの中ではそれとは別の医療倫理に従ったことを認める。私が作成した「チフスではなくて食中毒死とした」虚偽の検案書は二人か三人を困らせることになったが、他のやり方をして死因をチフスとしていたら、ドクター・メンゲレの言う「流行病の発生にたいする予防措置」は

どれだけ「広範」なものになったであろうか。

その翌日、ドクター・メンゲレはあの二人の女医を殴りつけただけで、それ以上のことはなかったことが分かって、安堵した。

二人は病院で仕事を続けたのである。

この後も、さらに多くの囚人の死体とその病歴カードを受け取ったが、診断欄には何も記入せず、記載欄を追加することもなかった。空欄のままが一番よい。皮肉にも、ドクター・メンゲレは二人の患者の生命を犠牲にした誤診に、いたく憤慨した。このような皮肉な考え方は、数日間私を苦しめた。それは、犯罪者の茶番のような言い分である。

(三三) アリア人の繁殖促進ならびに劣等とされる人種の繁殖抑制が目的。

一六

ある日の午後、B II f 収容区の事務室にいるドクター・メンゲレの所に直ちに出現するようにとの命令があった。この命令は嬉しかった。陰鬱な雰囲気の中で死体焼却場から少なくとも数時間は逃れることができるからである。その上、散歩が害をなすことはないだろう。解剖室と死体焼却場の臭いを嗅いだ後に、新鮮な空気を吸い込むことは体にもよい。収容所に着いた最初の日から親切で友好的だったB II f 収容区の医師たちと話し合うことができるのも嬉しい。

貴重な医薬品をポケットに入れタバコも数箱もって、出かける準備をした。初めて収容所に来たときに何も持たずに入ったバラックには、これまで訪れることができなかった。今手ぶらで訪れるのは、ゾンダーコマンドの作業員らしくない。

歩哨に囚人番号を申告して死体焼却場の鉄製ゲートを出て、B II f 収容区に向かった。私は急がず、短い距離を最大限に利用しようとして、ゆつくりと歩いた。女性収容所を囲む有刺鉄線を通り抜けると、何千人もの女性の囚人たちがバラックの周りに屯^{たむろ}っていた。頭は刈られ、衣服、ではなくてぼろきれを纏^{まと}っていたので、どの人も同じように見えた。私は、妻とふさふさとした長い髪の一五歳になる娘のことを思った。すると突然、娘の着ていた洋服のこと、そして家族揃って過ごした夜の時間にみんなで考えを出しあった娘の服装のことが、脳裏に浮かんできた。

ランプでバラバラになってから三ヶ月が経った。みんなはどうしたのだろうか。まだ一緒にいるのだろうか。アウシュヴィッツの女性収容所のどこかにまだいるのだろうか。ひよっとして第三帝国の別の収容所に移送されたのだろうか。三ヶ月はあまりにも長

い。強制収容所では永遠に等しい。ともかくも、まだこの中のどこかにいるような予感がする。無数にある有刺鉄線のどの壁が、私たちを引き裂いているのだろうか。見渡す限り地平線のかなたまで至る所に、列をなすコンクリート製の支柱、有刺鉄線、そして警告標識が見える。強制収容所全体には、入り組んだ蜘蛛の巣のように有刺鉄線が張り巡らされている。

B II f 収容区に着いた。ゲートには指揮官事務所があった。飲み込みの悪そうな親衛隊の下士官一人と兵一人が勤務に就いていた。収容所の規則に従って、私は指揮官事務所の小窓に近づき上着の腕をまくり上げて、囚人番号A八四五〇を名のった。そのとき、腕時計が見つかった。腕時計の所持と着用は強制収容所では重罪であるが、私はドクター・メンゲレの許可を得て仕事では腕時計をしていた。下士官が指揮官事務所から猛然と出てきた。ダミ声でB II f 収容区での用務と、腕時計を着用している理由を言えと言った。死体焼却場に来て三ヶ月も経っているのに、このような状況にもうまく対処できた。たじろぐことなく正面を見据えて、ドクター・メンゲレの命令で来ましたと返答した。ドクター・メンゲレが直^{じか}に私と話したがっているのだが、収容所への立ち入りが叶わなければ、死体焼却場に戻って電話でその旨申告すると付け加えた。

メンゲレという名前には魔法のような力があった。誰もが彼を恐れている。あの親衛隊員は口調を変え、今度はとても丁寧な名簿に記録しなければならぬと説明してから、この収容区には何時間くらい滞在するつもりかと尋ねた。もはや罪を問われることがなくなつた腕時計を見ると、一〇時だった。午後二時までいることにした。ドクター・メンゲレの用務が何であつても、それだけあれば十分と考えたからである。そして、私は二〇本入りのタバコの箱から数本取り出し、私が戻るまでに吸っておいてくださ

いと言って、親衛隊員に手渡した。彼は喜んでタバコを受け取った。このドイツ人は、この後も会えれば嬉しいという気持ちを抱かせ、別れるときには、私たちは気心の通じ合った仲間になっていた。私の上司の名前とタバコの価値が証明されたわけだが、同僚との二、三時間の面談が待ち遠しい。だが、まずドクター・メンゲレに出頭しなければならない。

バラックに入り、当番の書記が私の用務を尋ねに来るまでの間、ロビーで待機した。彼はドアの一つを指さした。その部屋に入ってみると、そこは設備がよく整えられた診察室だった。壁には、時期別に収容所の収容人数を示す何枚もの図版やグラフが貼られていた。別の壁には、凝った額装を施したハインリヒ・ヒムラーの肖像が掛かっていた。また、その部屋には、ドクター・メンゲレ、外科主任医官ドクター・ハインツ・ティロ（親衛隊大尉）⁽³⁷⁾、収容所内科医局長主任医官ドクター・ヴォルフ（親衛隊中尉）の三人の肖像画もあった。ドクター・メンゲレは、私をドクター・ヴォルフに死体焼却場で働いている剖検の専門家として紹介した。ドクター・ヴォルフは私のほうを向いて、検視に興味があると言いき、忙しなくても早くに死体焼却場を訪問してとくに関心のある解剖に立ち会えたのだが、とも言った。彼は今、大きな仕事に取りかかっている、私と議論がしたくて呼び寄せたのだ。収容所では下痢に罹る囚人が増加し、そのうち九〇％は重症である。臨床学的観点からすれば、発症から死亡までの病気の経過について、この医師には疑わしいことは何もなかった。彼は何千という症例を研究し、詳しい記録と覚書を収集していたからである。それにもかかわらず、彼の研究は不完全であった。広範囲に亘る臨床研究には、検視による裏付けが必要であった。

こういう訳で、ドクター・ヴォルフには「医学研究者」という別の顔があった。彼もまた、科学的発見のために、血なまぐさい

強制収容所や死体焼却場を活用して、下痢で体重が三〇％にも満たない何百という生ける骨格標本のような人々を研究していた。疾病がもたらす内蔵の症状を見てみたいこと、そしてその諸症状が医学界では公式には知られていないこと、たったそれだけの理由で、彼は何百体もの死体の解剖を私に命じた。ドクター・メンゲレはと言えば、数多くの双子を解剖して、生殖の秘密を暴こうとしていたし、ドクター・ヴォルフは、原因が明確であるにもかかわらず、かくも多数が赤痢に罹患しているということの理由を知りたがっていた。

強制収容所で発生する赤痢の作り方は、こうである。まず財産を略奪し、自宅から男も女も子どもも人間という人間をみな拉致し、人で溢れたゲットーの中で六週間かけて衰弱させる。その後、汚水を入れたバケツ一個だけを支給して、何百人もの人々たちを家畜輸送用の貨車に積み込んで、アウシュヴィッツに移送する。それから、数千人もの囚人と一緒に、馬小屋にも使えないような不潔なバラックにぶち込む。その中の人々がみな食べるのは、小麦粉とおが屑を混ぜて焼いたカビ臭いパン、合成マーガリン、皮膚病で死んだ馬の肉で作ったソーセージ三〇％⁽³⁸⁾だけで、一日当たり

(37) ハインツ・ティロ（一九二二年一〇月八日、エバースフェルト生まれ）。医学博士。最終階級は親衛隊中尉。一九四二年七月から一九四四年一〇月までアウシュヴィッツで親衛隊分遣隊付き医官、ならびにBII a 収容区、BII c 収容区、BII f 収容区の収容所医官。ランブおよび収容所での選別を担当。一九四五年五月一三日死亡。

(38) 強制収容所の囚人には、一日当たり公式上一三〇〇キログラム（重労働に従事する成人男子の健康基準は二六〇〇キログラムであり、重労働にあたる労働者は四〇〇〇キログラム）がある。（*Wielka Encyklopedia Powszechna*, 「パウゼックナ大百科事典」）Warsaw 1969, Vol. XII, p.88; Tadeusz Iwaszko,

の総カロリーは七〇〇^{キカロ}である⁽³⁸⁾。脂肪、塩、小麦粉、ではなくてイラクサかルタバカを入れたスープを喉に流し込む⁽³⁹⁾。
 四、五日経てば病気が進み、最高に手篤い看護にもかかわらず、私たちの人間モルモットは必ず死んでしまう。

ドクター・ヴォルフの意見では、一五〇人を検視すれば、その発見事実が彼の科学的研究を立証するはずだった。ドクター・メングレは私に一日に七体は解剖できるだろうと言った。ほぼ三週間やってしまえという意味だ。私の意見はそれとは違い、目的にかなう科学的な仕事をさせたいのであれば、一日にせいぜい三体しか剖検できないとはっきり言った。彼らは領いて私の意見を採用して、戻ってよいと言った。

私は一二号棟の病院で仲間の医師を見つけた。医薬品やタバコを渡したら、とても喜んでいたが、一服している彼らの顔には疲れが見え、口から出るのは落胆の声だった。彼らは、チェコ人収容所が清算されたときの恐ろしい悲劇的な出来事を、まだ乗り越えてはいなかった。むしろそれ以上に、日増しにおかれた状況の虚しさが分かってきたのだ。私とは違って、彼らは生き残る希望を捨ててはいなかったが、そのために一日一日、徐々に徐々に精神が摩耗していった。だが、私には、このように長い時間をかけて心が壊れてゆくということはなかった。死体焼却場のゲートをくぐった瞬間に、私は将来への幻想をすべて失ってしまったからである。ともかくにも、私は彼らを慰め辛抱するようにと励まし、前線の状況を伝えた。毎日、私は新聞を読み、詳しい情報に通じていたからである。

固い握手を交わして、仲間と別れた。強制収容所での挨拶ほど、嘘偽りのない、心のこもった挨拶はない。また会うことができるかどうか分からないままに、いつも別れの挨拶をした。別れは、事実上の永久の別れである。だが、この絶望的な状況にあっても

なお、他人に道徳心を奮い立たせるほど強い人間である自分に密かに満足してそこを立ち去った。

(二三) イラクサは、茎が三〇〜五〇センチで四角く、葉と茎に刺毛がある多年生植物、ルタバカは、カブに似たアブラナの一種。

³⁸The Housing, Clothing and Feeding of Prisoners, in: Auschwitz 1940-1945, in: *Central Issues in the History of the Camp*, Oswiecim 2000, Vol. II, p. 59-60.

一七

別のある日。ドクター・ヴォルフの、赤痢で死んだ元患者にメスを入れて、ちょうど三〇体目の剖検が終わり、発見事実を要約したところだ。

まず、どの剖検でも、胃液を分泌する腺の欠損もしくは消滅による胃粘膜の炎症が見つかった。胃液が出ないと、食べたものは消化されず胃の中で発酵が昂進する。

二番目に観察したことは、小腸粘膜の炎症と腸壁が著しく薄くなっていることであった。

第三の観察は、脂肪の消化に不可欠であり、十二指腸の中にある最も重要な消化液、すなわち胆汁にかんしてである。胆嚢を切開してみると、中には緑がかかった黄色の胆汁でなくて、無色のドロツとした澱おろひのようなものがあつた。このような分泌液は腸内の内容物を着色することがないから、消化機能を果たすことはできない。

第四は、大腸粘膜の炎症である。とくに大腸粘膜はとても乾燥していて、タバコの巻紙くらいの薄さで破れそうだった。このような大腸では食べ物が消化されず、ただ単に排泄物が流れるパイプにすぎない。

私が関与した限りではあるが、発見事実がそれが全部である。細菌学的検査は、二ニ〜三三分離したライスコウに親衛隊が設置した衛生学・細菌学研究所で行われた⁽³⁹⁾。それを管理監督したのは、ペーチ大学細菌学研究所の教授で、囚人仲間のドクター・ゲザ・マンズフェルト⁽⁴⁰⁾であった。

一八

ムースフェルト軍曹が、縞模様の囚人服を着た見知らぬ三人を追い立てて連れてきたので、午睡ひびが妨げられた。この不幸なたちを指さして、ドクター・メンゲレの指示で、ここに連行して来たと言った。

この気の毒な人たちはみすばらしい風体ふうたいをしていた。ほろきれをまとい、口がきけないほどに怯おびえ、新しい状況に戸惑っていた。死体焼却場のゲートをくぐった瞬間に絶望のどん底に落ちたのだ。私たちは親しげに握手して自己紹介を交わした。私と最初に話したのは、ソambatヘイ「ハンガリー西部の都市」の病院で病理解剖医をしていたドクター・デネス・グレグで、四〇代半ばで背が小さくやせ形で、分厚いメガネを掛けていた。印象は前向きで、これなら、このような困難な環境でも仲良くやっついていけると本能的に思った。その次の男性は、五〇歳くらいの猫背でずんぐりしていて、不機嫌そうな顔をしていた。その名はアドルフ・フィッシャー。二〇年間ブラハの解剖学研究所で解剖室勤務の助手だった。すでに強制収容所に四年間いるチエコスロバキアのユダヤ人である。三番目の囚人は、ニース「フランス南西部の観光地」出

(39) 正しくは、ライスコ「オシフィエンチム(アウシュヴィッツ)の南西約七七哩」。

(40) アウシュヴィッツ強制収容所の囚人ゲザ・マンズフェルトは、親衛隊の命令で、チフス、マラリア、梅毒を研究した。一九四五年一月二七日にアウシュヴィッツで解放された後、仲間の元囚人のために尽力した。その後、彼の拘禁と収容所での剖検について証言した(Danuta Czech, "Die Rolle des Häftlingskrankenhäufers im KL Auschwitz II," in: *Hefte von Auschwitz*, 1975, No.15)。

身のヨゼフ(・イエチエスキエル)・ケルナーで、収容所には三年間いる。教育水準が高く、口数の少ない三二歳になったばかりの青年医師である。

ドクター・メンゲレは、この三人の囚人医師をB II d 収容区の不潔なバラックから引き抜いて、もっと迅速な剖検のために彼らを手伝わせようとした。私たちは仕事を分担しあった。「科学的研究」のために私は検視を続け、検案書とそれに付帯する公用書簡を認めた。二人の医師は実際に剖検を行ったが、助手は、その学歴にふさわしく解剖を準備し、頭蓋骨を切開し診断に必要な器官を取り出して、汚れを落とし、あるいはまた、解剖が終わった死体を片付けて解剖室と手術室をちり一つないほどきれいに清掃した。

こうして私には資格をもった完璧な助っ人ができて、仕事の負荷はかなり減殺された。ドクター・メンゲレの命令によって、私はこの人たちと同室することになった。このことの最大の強みは、仲間ができたことであつた。

一九

朝の往診が終わりに近づいた。四棟の死体焼却場が全部、目いっぱい稼働していた。

昨晚、地中海に浮かぶコルフ島「イオニア海のギリシア半島北東部の島、アルバニアの近く」から到着したギリシアのユダヤ人が焼かれた⁴¹。コルフ島には、ヨーロッパ最古のユダヤ人のコミュニティがあつた。

彼らの旅は二七日間続いた。最初は、舢舨^{はし}で海を渡り、次に水も食べ物もあたえられずに貨物列車に乗った。移送列車の終着駅はアウシュヴィッツのランプで、貨車の扉が開いても選別の列に並ぶ者は誰もいなかった。半分はすでに死んでいて、残りの半分は死にかけていたからである。すべての移送列車は第二(三)死体焼却場に直行した。密度の濃い作業が夜通し続いた。朝になって残されたのは、汚れてボロボロになった衣服の高い山だけであつた。ひどく破れた衣服がしとしと降る雨に打たれているのを見て、心

(41) 一九四四年六月三〇日、二〇四四人がアテネとコルフ島からアウシュヴィッツに到着した。そのうち男性四六六人(囚人番号はA一五二二九からA一五六七四まで)と女性一七五人(囚人番号はA八二二八二からA八四五六まで)が労働に適する者と選別されたが、残り一四二三人はガス室で殺された。全部で五万六〇〇〇人〜六万五〇〇〇人のギリシアのユダヤ人については、どこから来たかは不明だが、一九四三年三月から一九四四年八月までにアウシュヴィッツ強制収容所へ移送された。Danuta Czech, "Deportation und Vernichtung der griechischen Juden im KL Auschwitz im Lichte der sogenannten Endlösung der Judenfrage," in: *Hefte von Auschwitz*, 1970, No. 11; Danuta Czech, *Auschwitz Chronicle 1939-1945. From the Archives of the Auschwitz Memorial and German Federal Archives*, New York 1997, p. 654.

が痛んだ。

その日、私は第四(五)死体焼却場で困難な状況に直面した。ゾンダーコマンドの火夫がルミノールを多量に服用し、自殺を図ったのだ。ここでは、これが最も手取り早い自殺のやり方である。ゾンダーコマンドがルミノールを手に入れることは簡単である。私は、病人と言えそう言えなくもない男性が横たわっているベッドに近づいてみて、残念ながら、彼が「大尉」であることに気づいた。ここではその名で通っていた。アテネに戻れば、それが陸軍での彼の階級である。彼はギリシア国王「ゲオルギオス二世」の子どもたちの家庭教師をしていた。並外れて礼儀正しく教養のある男だった。彼の妻と二人の子どもは到着後、ガス室に直行した。

意識はなく、彼はベッドでうとうととしていた。数時間前に飲んだ毒物は、すでに体内に吸収されていた。それにもかかわらず、容態は絶望的ではなかった。ベッドを取り囲んでいたゾンダーコマンドの面々は、大尉を願いのとおりに逝かせてやれと私を説得した。彼の望みは、ただ、これまでに我慢を強いられた精神的苦痛から逃れること、そして第一二期のゾンダーコマンドはどのみち消されてしまうという精神的苦痛から逃れることだからである。しかし、私が注射針を黙って消毒しているのを見て、説得しても無駄だとうやく気づいた。何人かの年配の作業員は度を失い、心から不快そうに憎々しく納得できないと言いつた。

私は彼らに、今後肺炎にならなければ、大尉は四、五週間で回復すると知らせた。その後、数週間経てば、大尉は、あの残酷きわまりない炉にコークスを放り込むことになる。狩り集められ拷問の挙げ句に、ガスで殺された幾千人もの仲間の死体がむさぼり食いつくされるまで、炎をかき混ぜることであろう。そして、彼にもまた仲間のゾンダーコマンドと一緒に炉前に並ぶ日が来るはずだ。

一斉射撃の後、生気を失った目には凍り付いた恐怖の表情を浮かべて、仲間と一緒に血の海に倒れ込むことであろう。

そのときには私は彼の側にはいないし、彼の苦痛に満ちた顔は、二〇年間の医療経験をもつ私の助けを求めてもいない。今では、大尉の仲間が本当に正しかったことを私は認めている。数週間後には殺されてしまう生命を蘇生しないで、眠りに誘うルミノールで死なせてやるべきだった。

往診が終わり、第一(二)死体焼却場に戻った。一年生のように熱心な私の助手たちは、ドクター・ヴォルフの患者だった人の死体にメスを入れていた。きれいに頭を刈られ、新しい洋服を着て清潔なワイシャツ、素晴らしい靴を履いた彼らは、白衣を着て黄色いゴムのエプロンと黄色いゴム手袋をして解剖台についていた。実際に何が起きているか分からない外部の者なら、正真正銘の研究所の手術室と見間違ってもいい。

しかし、ここで三ヶ月の間、私は専門家として働いてきたが、そうであるからこそ科学とはまったく関係のないことがやられてきたこともよく知っている。ここは似而非研究所以外の何ものでもない。ドクター・メンゲレが双子の研究で立つ大前提は似而非科学である。「優秀なる人種」という考え方も似而非科学的である。低身長症の人や身体障がい者を殺し、その死体を使って人種の退化と劣等性という間違った理論を証明しようとしたのも、同じく邪悪である。このような研究による発見事実は今の世代に向けて示されたものではない。けっして受け入れられないからである。そうではなくて、戦争に勝利した後には登場する次の世代に向けられているのである。

ドクター・メンゲレ一派の夢は、アウシュヴィッツで殺された低身長症の人たちや身体に障がいをもつ人たちの骨格標本が、いつの日か博物館の広々とした展示室で、名前と年齢などの正確な

情報を記載したカードを貼り付けた台座の上に載っていることである。ドイツ民族と千年王国たる第三帝国の生活様式を防衛した戦勝記念日に、修学旅行生がその博物館を訪れることを、彼らは夢見ている。そして、教師は生徒と一緒にこの記念日を祝い、その意義を説明するであろう。戦争に勝つことは、フランス人、ベルギー人、ロシア人、そしてポーランド人を貶めて、人種の優秀性を確信させるだけではない。六〇〇〇年の歴史をもっているのに退化し醜悪になったユダヤ民族という一つの民族がヨーロッパから根絶やしにされなければならない理由をも説明する。それだけではない。この民族は、唯一純粹なアリア民族を汚染してやると脅迫しているのだ。彼らは全ヨーロッパの征服をもくろんでいるから、民族の純血に害をなし、真に危険な存在である。このために彼らを抹殺しなければならぬ。第三帝国初代総統が永遠不滅であり、あらゆる文明国から称賛されているのは、このためである。……彼らはこのように夢想していた。

このような理論を拠り所として全世界に戦争を仕掛け、幼子を殺す準備さえもした。かの理論は、国家社会主義の国のやる事なす事すべてを間違えさせた根拠でもあった。血の海を呼び寄せた戦いは、聖戦と言われた。彼らの目には、ロシア全土は蛮人が住むモンゴル平原に映った。フランスは死滅しつつある国民が住む性病の国である。イギリス人とスコットランド人は、上は首相から下々に至るまでウイスキーで頭がやられているとのことだ。他方で、日本人は、自分の間はそうしておいたほうが得策だからという理由で、純粹なアリア人と見なされていた。道徳とか人生観というようなものは、まやかしとされた。アリア民族のために、少女、成人女性、戦争未亡人はどんなドイツ男性にも身を任せて、その男や他人の婚約者の姓を付けられた子どもを産むことが許された。世界に向けては、金ではなくて労働力こそが第三帝

国の宝であると発信された。それなのに、彼らは、殺すために収容所に連れてきた囚人から、ひとかけらの人間性もないやり方で金を取り出し、何十億もの金塊を生産するためだけの特殊な施設設備を建造した。実際はガス室なのに、死体焼却場の地下室は、ご丁寧にもいろいろの国の言葉で浴場と標示されていた。本当は数秒で人間を殺傷するためなのに、チクロンBの缶詰には、ゴキブリその他の殺虫剤というラベルが貼ってあった。

来る日も来る日も囚人たちは、強制収容所の「働けばマイト・フライ自由になる」という標識の下を通った。次は、その実相を例示している。

ある日、三両連結の列車がランプに牽引されてきた。貨物列車から現れた人々はやつれはて、ほとんど立っていることができず、レモンのように黄色い顔をしていた。およそ三〇〇人がいたが、死体焼却場のゲートで私は数人と話してみた。三ヶ月前に、硫酸工場での作業のために、三〇〇〇人も大編成の移送列車に乗ってB II d収容区から移送されたということだ。仲間はいろいろな病気で死んだが、彼らは硫酸中毒に罹っていた。顔色が黄色いわけだ。このために、ドイツ人は静養収容所に連れて行くといって列車に乗せた。三〇分後に、私は、死体焼却場の炉前に横たわる血まみれの死体を見た。「働けば自由になる」「静養収容所」の実態がこれだ。

六月か七月のことだが、ギユウギユウ詰めのパラックにいる囚人に一〇万枚ものハガキが配られ、友人に宛てて書けという命令があった。ビルケナウとかアウシュヴィッツではなく、スイストの国境近くの町、アム・ヴァルトゼー「という架空の町」から時候の挨拶を送るよう指示されたのである。ハガキが投函され、返信も届いた。私はこの目で返事の書状やハガキを見たが、そのうちの約五万通は死体焼却場の庭に積み上げられ、燃やされたのも

見た。それを受け取った者は誰もいなかった。受取人その人が、もう焼かれていたからである。そんなことが一体全体何の役に立つのかと言えば、その目的は世界中の世論を和らげ、欺くことであつた。

二〇

第一二二死体焼却場のガス室には死体が山をなしていた。その山からゾンダーコマンドが死体を引きずり下ろし始めた。エレベータのうなり声と扉の閉じる音が私の部屋にも届いた。作業は目いっぱいに進んでいた。次の移送列車が到着することになっているので、速やかにガス室を空けなければならない。

突然、ガス室の職長が部屋に飛び込んできて、まだ生きている女性が死体の中から見つかったと興奮して言った。

いつも身近に置いてある往診カバンを手に、階下のガス室に走った。広いガス室の、死体で半ば塞がれた入り口の奥の壁の下のほうに、痙攣している若い女性がいた。喘鳴「喘息などで息を切らしてゼーゼーと出る音」が酷い。ガス室の作業員がとても心配して集まってきた。このようなことは、かつて一度もなかった。皆で死体の山からその身体を引き出した。私はガス室の作業員が着替えに使うガス室横の部屋に、体重の軽いこの少女を運びベッチに横たえた。年齢は一五歳くらいにちがいない。私は注射器を取り出して、一本打ってはもう一本打ち、手早く三本注射した。男たちは冷たくなった少女に分厚いコートを掛けてやった。厨房に走って、紅茶やスープをもってきた者もいた。みんなは、まるで自分の子どもを生かそうと懸命になつている親のように、何とか助けたいと願っていた。

ついに私たちの努力が効果を挙げ始めた。その少女は咳をして肺からひと塊の痰を吐き出した。その子は目を開けて、ぼんやりと天井を見つめた。私は心配しながらも蘇生の兆候を待っていた。息づかいが次第に深くなってきた。ガスで弱った肺は空気が欲しくてたまらないのだ。注射が効いて次第に脈が強くなってきた。

辛抱強く待った。まだ注射は最大限の効果を發揮してはいなかったが、数分で完全に意識が戻ると見た。実際にそうだった。

華奢な顔は赤みを帯び、警戒した目つきになった。とても戸惑った目で私たちを見つめ、それから目を閉じた。何が起ころうとしているのかが、まだ分かっていない。何があったのかも理解できていない。これが現実かどうかさえも分からないのだ。意識はほんやりしていた。曖昧ながらも、今いる所へ運んできた列車の記憶はあった。列に並び、何がなんだか分からないままに、群衆と一緒に動いたことも記憶していた。それから、大きくて、とても明るい照明の地下室があった。あつという間の出来事だった。服を脱げという命令があったのを覚えている。とてもいやだったが、みんなが従うから裸になった。彼女は他の人と一緒に別の部屋に押し込められた。誰もが緊張した。この部屋も明るく照明されていた。群衆の中に家族を探したが、果たせなかった。彼女は壁にびったりとくっついて、次に何が起こるかを待った。突然、目の前が暗くなり何かが目と喉を刺し、息苦しくなつて意識を失い、奈落の底へ……。

少女はますます興奮して、頭をもたげ、起き上がろうとして、周りを右、左と見回した。顔が歪み、私の襟をつかんでから、首にしがみついて、ゆっくりと起き上がろうとした。私は、まだ横になっていてほしいと思つたが、この少女は意を決して起き上がるうとした。これは強い精神的なショックを受けたことを示している。徐々に抗うことをやめ、疲れて横になった。大粒のキラキラした涙がこぼれ落ちたが、泣いてはいなかった。

私の質問に初めて返事があつた。疲れさせたくなかつたので、多くを質問することは控えた。彼女が一六歳で、両親と一緒にハンガリーからの移送列車に乗つて来たことを知るだけで十分であつた。

私は暖かいクリア・スープを手渡した。その子はそれを飲んだ。ゾンダーコマンドの幾人かが、あれやこれやとおいしい食べ物をもつてきたが、私は何もやらないでくれと言つた。その代わりに、首までコートを掛けて眠るようにと彼女に言つた。

考えをまとめることはできなかった。私は、仲間と一緒に解決策を探そうとした。問題の要点は、この子にたいして何をなすべきかということである。死体焼却場にはそう長く留まっていられないことは知つている。

ゾンダーコマンドだけが作業しているような場所、この小さな少女が生き残れるチャンスはあるのだろうか。私は厳格な規則を知つている。移送された囚人もゾンダーコマンドも、誰であろうと、死体焼却場からは生きて出ることはいかない。

相談する時間もなかつた。ムースフェルト軍曹が、巡廻と作業監視のために、いつものようにやつて来たのだ。開いたドア越しに、彼は皆が集まっているのに気づき、部屋に入って何が起きているかを知つた。遅すぎた。彼はそこに横たわる少女を見てしまった。私は、仲間には出てくれと言つて、不可能なことを一人でやろうとした。

同じ屋根の下で過ごした三ヶ月間で、二人の間にはとても特殊な人間関係ができあがつていた。ドイツ人には、たとえ強制収容所の囚人であろうとも、ある種の必要な専門知識をもっている者には敬意をもつて処遇するという習慣がある。靴職人でも仕立屋でも大工でも錠前職人でも、これは当てはまる。これまで何回となくムースフェルトに会つている私は、彼が私の専門性に一目置いていることが分かつていた。剖検を任されているということもある。ムースフェルトは、私の上司が収容所主任医官であり、また最も怖がられている人の一人、ドクター・メンゲレであることも知つている。ドイツ人にありがちな、うぬぼれ屋のムースフェ

ルトは、ドクター・メンゲレこそドイツ医学界で最も偉大なるキラ星の一人であると見ていた。ムースフェルトに言わせれば、何十万ものガス殺は、愛国的な義務の履行であった。彼によると、解剖はドイツ医学の知識を増進させるのに役立つ。ある意味で、このような彼の態度は私にとって有利に働く。しばしば解剖室を訪れるムースフェルトとは、その度に政治のこと、戦局のことなど様々な事柄について話し合った。死体の解剖が血まぐさい自分の仕事と同じだと見ているからこそ、彼も私には一目置いているのではないか。

三人の親衛隊員を従えたムースフェルトは第一(二)死体焼却場の指揮官であり、また筆頭死刑執行人でもあった。彼らは一緒になって、選別された収容所の囚人だけでなく、外部から移送されてきた「静養収容所」の囚人をも殺害した。犠牲者はみな後頭部を撃たれた。犠牲者が五〇〇人未満のときは、このやり方で処刑した。五〇〇人殺そうと三〇〇〇人殺そうと関係なく、必要なチクロンBの量は同じなので、大量虐殺のときに限ってガス室が使用された。衣服を収集するトラックとかチクロンBと二人の死刑執行人を運ぶ救急車の手配は、事を処する上で現実的でないこともあったのだ。このような次第で、後頭部からの一発が殺人方法として好まれた。

私は冷静に用心深く少女の恐怖体験を話し、ガス室での死からようやく生還したこの子の恐ろしい光景をムースフェルトに話した。少女の周りが突然暗転したときの有様、致死性のチクロンBを吸入したがごく少量だったに違いないこと、身体が華奢にできていたせいで、死に抗っていた群衆の中で押し倒され、コンクリートの床の湿った部分にうつぶせになっていたに違いないことなどを話した。チクロンBは湿り気を帯びた空中ではうまく効きかないので、ガス窒息から救ったのは湿気に違いなかった。

このようなことをムースフェルトに説明し、この子のために何かしてくれませんかとお願ひした。私の話を傾けていた彼は、問題を解決するためにどうしたいのだと私に尋ねた。狡猾な問いだと強く感じた。その口ぶりから、私が彼を面倒な立場に追いやるうとしていていると思われるように見えた。死体焼却場にこの少女が留まっていられないことは明らかである。そのためには、やらなければならないことが一つだけある。この少女をゲートの外に連れ出さなければならないのだ。毎日、死体焼却場の近くでは、多くの女性道路建設作業員が働いていた。夕方になれば、この少女は女性作業員と一緒に収容所に戻り、バラックの一つに入られ、起こったことについて口を閉ざせばよいだろう。何千もの女性囚人の中で彼女が目立つことはまったくない。結局、ここでは互いのことを知らない人が多いのだから。

ムースフェルトの弁はこうだった。「この少女が二歳か三歳であれば、できることがあったかもしれない。二〇歳なら、生き残らせた環境がいかに奇跡的であったかを思い知り、その体験を口外しないだけの分別はあるだろう。だが、一六歳の子どもはあまりにも世間知らずで、どこで何が起り何を見たか、その経験の一切合切を話してしまうものだ。そのニュースはあつという間に収容所全体に広がってしまう。他にしようがない。この子は死ななければならない。」

一五分くらいして、少女はあの部屋から連れ出された、のではなく抱きかかえられて外に出て、後頭部に一発の銃弾を撃たれて殺された。処刑人はムースフェルトではなかった。誰かにやらせたのだ。

二二

第一(二)死体焼却場の一階には、親衛隊宿舎の隣に大工の工房があり、指物師が三人、配属されていた。役得を利用して命令したムースフェルト軍曹の個人的な注文を受けた彼らが、作業をしている。大型のソファにもなるダブルベッドを至急製作しろと、命令されたのだ。すぐに取りかかったが、手狭のために簡単ではなかった。移送列車に乗ってきた高齢者や衰弱した人を運ぶときに使う肘掛け椅子から、バネを取り外さなければならなかったからである。そのような椅子は、死体焼却場の庭には何十脚もあつて、夕方には、私たちはそれに腰を掛けた。

とうとう仕様書通りにベッドが完成した。私の目から見れば、それは、へんてこな木材を使い、肘掛け椅子から取り出したバネと内装材に使う最高級のベルシャ絨毯を再利用したものであつた。二人のフランス人電気技師がそれに読書灯とラジオの専用棚を組みこんだ。ベッドの木部は真っ赤に塗装されていた。それは、死体焼却場の屋根裏部屋「ゾンダーコマンドの一般作業員の寝室」に置けば見た目にも豪華ではあるが、週末に届けられることになつているマンハイムのブチ・ブル、ムースフェルト軍曹の実家では、それ以上に見栄えのする代物であつて、愛党心に溢れる軍曹が激戦を終えて帰郷するまで、きつと待つてゐることだろう。その週に、私はムースフェルトの部屋で見たのだが、六着はあろうか、絹製のパジャマが梱包を待つばかりだつた。実家に宛てたベッドのおまけであることに間違いない。それは意匠を凝らした外国製だつた。ドイツではすべてが配給品であるが、死体焼却場ではムースフェルトは、犠牲者が脱衣場に残したたくさんの物品から、自由に選ぶことができた。どんな物品でも価格は

一つしかない。六ミリの口径のピストルから後頭部への一発がその値段だ。銃弾は死体焼却場での配給票の代わりであつた。被害された被害者一人ひとりから、親衛隊員は、装身具、皮や毛皮のコート、絹製品、上等な靴を失敬することができた。紅茶、コーヒー、チョコレート、缶詰食品など数詰を詰め込んだ小包が、一週間と空けずに隊員の実家に届かないことはなかつた。

このような無制限に見える機会に刺激されて、あの軍曹は特製ベッドを作らせて実家に送り届けるというのだ。

数日間、このベッドの構造を観察していて、あるアイディアが浮かんだ。そして、このアイディアは次第に膨らみ、ひとかどの計画に育つていった。

私たちはみんな、すぐに死ぬことになつてゐる。それは疑いの余地がない。私たちはそのことに慣れていて、逃げ道がないことを知つてゐる。しかし、ある一つのことでは私は落ち着きを失つてゐる。すでに第一期までのゾンダーコマンドが抹殺された。彼らはみな屋内と屋外の死体焼却場での恐ろしい秘密を掴んでゐたからである。ここで起こつてゐることは許せない。「優秀民族」が言葉では表せないほど残忍で墮落しきつた体制をどうやって構築したかについて、私たちの死後に世界中の人々がその真実を学ぶ方法を考えなければならぬ。

世界はそのことを知らなければならぬ。そのメッセージの出所はここだ。何年かかるか分からないが、告発の証拠が目の目を見れば、世界が知ることになるであろう。第一(二)死体焼却場にゐる二〇〇人のゾンダーコマンドは、証拠文書に署名してくれるかもしれない。それをあのベッドに仕込んで密かに収容所から持ち出し、ごく短い間でもマンハイムのムースフェルト軍曹宅に隠しておこう。

こうして証拠文書が作成された。それには数年間に亘る収容所

での虐殺が事細かに書かれている。それには犯罪人の名前を記載した。犠牲者の囚人番号、そして大量虐殺の方法と手段も書いた。グラフィック・デザイナーだったフランス人の文書係が、インド・インク^③を使ってカリグラフィ体の文字で書いて、この上なく優雅な古文書様式に仕立て上げ、大判の羊皮紙三枚に全部書き上げた。四枚目には、二〇〇人のゾンダーコマンドの署名を記載した。四枚の羊皮紙はきれいな絹糸で綴じて巻物にした後に、金属工が腕を振ったシリンドラーの鞘管の中に入れた。空気と水の悪影響から証拠文書を保護するために、この管はハンダで密閉し、それを家具職人がベッドのバネの間に取り付けた。

さらに同じ囚人が署名した同一の証拠文書を金属製の箱に入れて、第二(二)死体焼却場の庭に埋めた^④。

(二四) 墨汁の一種、中国発祥と言われる。交易にインドを経由したか^⑤。

二二二

毎日、夜七時頃になると、トラックが一台、死体焼却場のゲートを通った。いつも男性または女性が七〇人〜八〇人運ばれて殺された。彼らは、強制収容所のバラックか病院にいた囚人の中から選別された、その日の割り当て分である。彼らは、数年ではないとしても、少なくとも二、三ヶ月はそこにいたので、自分たちの運命には幻想を抱いていなかった。トラックが到着すると、まさに死のうとする人たちの、恐怖に怯えた叫び声^{あひ}がものすごい音になって、庭全体に響き渡った。選別された人たちは、ひとたび煙突のある死体焼却場に足を踏み入れれば、逃げる術がないことを知っていた。このような光景は見たくもない。いつも私は庭の一番奥まで行き、銃声が聞こえず、悲鳴がかき消される松の茂みに身を隠した。

しかし、あの晩は運がなかった。午後五時から解剖室で仕事を

(42) これまでのところ、この文書は発見されていない。しかし、これ以外の六編の文書が、調査の結果として、あるいはまったく偶然に見つかった。一九四五年に三編、そして一九五二年、一九六二年、一九八〇年に一編ずつである。このうち四編は、ニスリが言うように、第二(二)死体焼却場の周辺に埋められていた。六編の手書き文書のうち五編は *'Amidst a Nightmare of Crime: Manuscripts of Members of Sonderkommando, 1973* と *Hefte von Auschwitz, 1973, No.14* に収録されている。[Nicholas Chare and Dominic Williams, *Matters of Testimony: Interpreting the Scrolls of Auschwitz*, New York/Oxford 2015 (二階宗人訳『アウシュヴィッツの巻物 証拠資料』みすず書房 二〇一九年)]ゾンダーコマンド Zolman Gradowski の遺稿 (英語版) (*From the Heart of Hell: Manuscripts of a Sonderkommando Prisoner, found in Auschwitz, Oswiecim 2017* (Kindle 版 2021年)) を参照[3]。

していた。ある軍曹が自殺したときの様子を説明しなければならなかったからである。その遺体はグリヴィツェから運ばれてきた。剖検の立会人は、軍法会議裁判官、親衛隊大尉、親衛隊書記官がそれぞれ一名ずつだった。七時頃になった。私は、剖検に基づく発見事実を親衛隊書記官に口述していたのであるが、そのとき、男性の囚人を満載した大型トラックが庭に入ってきた。解剖室には、緑色をした金属製の網戸を付けた大きな窓が二つあり、庭に面していた。トラックが止まったのはこの窓の側だった。不幸な乗客はとても静かだった。それから推察するに、この人たちはトラックからではなく病院で選別されたのであろう。彼らは皆、重篤であり、衰弱のあまり叫ぶこともできなければ、高い荷台によじ登ることもできなかったに違いない。親衛隊の監視兵が大声で急がせるが、動く者はいない。トラックを運転してきた親衛隊の下士官はとうとう我慢がでなくなつて、運転席に戻りエンジンをかけ、荷台の前方を上にあげた。囚人は、文字通り投棄された。病人も死にそうなる人も、次々とコンクリートの地面の上に逆さまになつてころげ落ちた。彼らは地面でのたうち回り泣き、叫び声をあげた。それは地獄の光景だった。

罵詈雑言や怒声が、立会人として来た親衛隊将校の注意を引き、外で何が起こっているのかと私に尋ねた。説明を聞きながら、彼は窓に近づいた。その光景は、明らかに彼にとっては衝撃だった。非難を込めて、「静かにしろ、みんなだ。そんなことをするな。……」と言つたからである。

ゾンダーコマンドは犠牲者の衣服を脱がせ、それを庭の中央にできた山に勢いよく放り上げた。裸になった不幸な人たちは死体焼却場の建屋の中に連れて行かれた。炉前にはすでにムースフェルト軍曹が彼らを待っていた。今日は彼の番だ。ゴム手袋を着用し、銃を持っていた。一人、また一人と彼の前に連れ出され、

次々と床の上で死体になった。その死体は、次の犠牲者の場所を作るためにすぐに片付けられた。わずか数分間で、ムースフェルトは八〇人を「ひっくり返し返した」。こういうときには、そういう言い方をしたのだ。三〇分後に犠牲者が残したものは、一握りの灰だけだった。

その晩遅くになつてから、軍曹が私の部屋に来て、診てくれと言つた。動悸がして頭も痛いと言っている。血圧を測り、脈をとつて、心音を聴いた。これと言つたことは見つからなかった。正常から外れているものはない。ただ、心拍だけは正常よりもわずかに早かった。その原因は、ちょうど三〇分前に死体焼却場でした作業であると思われた。そう言つて、彼を落ち着かせようとしたが、実際にはこれが真逆の効果をもたらした。

彼は憤慨して起き上がり、目の前に立つて宣言した。「おまえの診断は間違っている。八〇人射殺しようが、一〇〇〇人射殺しようが、俺にはどうでもいい。そんなことでビビるような俺ではない。イライラの原因が分かるか。飲み過ぎだからだ。」明らかに気落ちして、軍曹はこう言つてから部屋を出た。

二二三

眠りに入る前に読書するのが常だった。あの特別な夜もそうだった。だが、長くはできなかった。突然の停電のせいであるが、その後で空襲警報を聞いたからでもある。空襲警報が発令されると、完全武装の親衛隊員がゾンダーコマンドのための防空壕、つまりはガス室に私たちを誘導した。このときも違ったところはなかった。私たちは服を着て、階段を降りた。

沈んだ心で暗いガス室に入った。そこには私たちのような者が二〇〇人いた。ゾンダーコマンドの全員だ。何十万もの人たちがまさにこの部屋で殺されたという事実をはっきりと自覚したときは、とても恐ろしかった。もうすぐ私たちの番になり、同じ状況の下で親衛隊員が扉をボタンと閉じて、四缶のチクロンBで殺されるかもしれないと考えたとき、恐ろしさはいや増した。

そのようなことは前にもあった。第九期のゾンダーコマンドの一部がB II d収容区の一三号棟に移送された。この棟は特殊な隔離バラックである。上からの命令で死体焼却場ではなくて、一三号棟をあてがわれた、そこから昼夜二交代制で死体焼却場に出向いて作業に当たることになった、とゾンダーコマンドの作業員は聞かされた。一三号棟に入ったその晩、身体を洗い着替えるためと称して、B II d収容区の浴場の一つに連れて行かれた。シャワーの後、裸のまま隣の部屋に入れられた。それは消毒済みの衣服を着る部屋のように見えた。本当にそこは消毒室であって、外側から密閉されており、ふだんはシラミだらけの囚人服を燻蒸消毒するために使用されていた。しかし、このときは四〇〇人のゾンダーコマンドをガス殺するために使われた。彼らの死体はトラックに積み込まれ、燃え上がる溝に運ばれた。

すべてがはつきりするまでは、とても緊張するが、それには十分すぎる理由があるのだ。空襲は三時間続いた。私たちは暗闇から出た。数段もの有刺鉄線の囲いを、再びアーク灯が照らした。ベッドに戻り寝ようとしたが、簡単ではなかった。

次の日の往診で第二三三死体焼却場に行った。昨晚の空襲のとき、パルチザンが数名、収容所の境界線に接近し、有刺鉄線の囲いを切断して、気づかれずに出入り口を作り、軽機関銃三丁、弾薬、手りゅう弾二〇発を滑り込ませた。このことを、ゾンダーコマンドのカポ長がこっそり知らせてくれた。今朝早くゾンダーコマンドが武器を見つけて、安全な場所に隠したそうだった。

見通しは暗いが、一筋の光明が見えた。武器を密かに持ち込んでくれた人たちが、そう遠くないところにいる。数多くの目撃証言によれば、パルチザンはここから二五〇〜三〇〇ほどの所に野営しているようだ。次の空襲のときにも火器を運び込んで欲しい。この頃は空襲が毎日ある。一日に数回のこともしばしばである。しかし、私たちには、名も知らぬ友人たちが夜陰に紛れて侵入するのを待つことしかできない。パルチザンが組織的な包囲突破に足るの武器を提供するには、三晩か四晩の空襲が必要であろう。

地下活動が第三(四)死体焼却場で始まり、他の死体焼却場にもそのネットワークが広がった。あらゆることが、最大の注意を払って慎重に組織された。死は軽機関銃の銃口からやすやすと飛んでくるが、私たちは生きていたい。望みは、包囲をかくぐり自由になることだ。私たちの中で一人でも二人でもいいから成功するならば、私たちは勝利したことになる。そのときこそ、死の工場の恐るべき秘密を世界が知るからである。我が処刑人の軍靴で虫けらのように踏みつぶされてたまるか。迫害する者と闘い、迫害する者に死を課した者として、私たちは死のドイツ収容所が刻む歴史の中に残ってほしいのだ。

二四

ある日、私はカール・フリートリヒ・シュタインベルク伍長と話をした。彼はしばしば私を訪ねて解剖室に來た。ワイマール共和国の時代、彼はベルリンで交通係の警察官をしていたが、第三帝国になると親衛隊に入隊した。思うに、この男は、生來のワルという点はおくとしても、知能水準が高く、それと同時に残忍でもあったので、とくに危険であった。彼の話では、四人の親衛隊員でシレジアにある親衛隊専用の保養所行きを計画しているとのことだ。一行は、彼の他に、ザイツ伍長、ホランダール上等兵、アイデンミュラー上等兵であった⁽⁴³⁾。私は、この四人をよく知っている。彼らは死体焼却場の中で最も残忍な人殺しであった。シュタインベルクは、四人が五日間の休暇を取得したと言った。ゾンダーコマンドに來て三ヶ月が経過したので、私の目には黒く見えるものを、たとえ親衛隊員が黒いと言っても、にわかには信じてはならないことを知っている。シュタインベルク伍長が休暇を取ったと言うが、本当は彼には特別に果たすべき血なまぐさい任務があたえられているに違いない。死体焼却場勤務の親衛隊員が宿舎を離れることは禁止されているからである。このことを私は知っている。飲み仲間と重ねたグラスからあふれ出た悪巧^{わるだくみ}を一切露見させまいと彼が考えていることは、疑いの余地がない。彼らは、将校が指揮する中隊の中でのみ、自分の持ち場を離れることができる。戻るときも同様である。違いはありつつも、彼らもまた、ある種のゾンダーコマンドであった。噂^{うわさ}では、二年間の任務が終われば彼らは親衛隊員専用の特別収容所に移送され、規律を破るか、あるいは知りすぎた親衛隊員は、第三帝国によってそこで抹殺されるそうだ。

五日後、シュタインベルク伍長他三名が休暇から戻ってきた。私は何も尋ねなかった。伍長もまた一言も発しなかった。彼らが戻った日に、ゾンダーコマンドの厨房に行った。そこに行けば、ミッシェルという名のフランス人コックが美味いものを出してくるからだ。ミッシェルはゾンダーコマンドの中でも愉快な男だった。民間人のときには、ブラジルを行き來するフランスの豪華客船でシェフをしていた。ごちそうを振る舞ってくれるはずのミッシェルは予想通り、厨房にいた。しかし、このときばかりはいつものように愛想よく、とは行かなかった。とんでもないことが起こったとすぐ気づいた。パイプをしっかりとくわえてはいるが、いつもはスパスパ吹かしているパイプには火が点いておらず、表情も険しい。パイプの火が消えていることに気づいていなかった。とすれば、彼には大いに狼狽するような何かがあったに違いない。予想は的中した。私に近づいてきて、ようやくドアを閉め、何も言わずに私を部屋の隅に引っ張って行った。椅子の上に金属製の洗濯^{たらい}盥^{たい}があった。ミッシェルは、親衛隊員が着る緑色のワイシャツを盥から、二本の指でつまんで一枚ずつ取り出した。どれにも、血が深くしみ込んでいた。このような血まみれのワイシャツは屠殺場にしかありえない。シュタインベルク伍長他三名は、屠殺場、しかも人間を屠^ほる屠殺場で五日間の休暇を過ごした。ミッシェルの話では、彼らはここに戻ってすぐに、洗濯するワイ

(43) これらの親衛隊員もまた、他のゾンダーコマンドの隊員による宣誓供述書や顛^{ひん}末^{まつ}書^{しょ}のなかで言及されている。公文書によれば、ザイツはロベルト・ザイツ親衛隊伍長の名で、またシュタインベルクはカール・フリッツ・シュタインベルク親衛隊伍長の名で登場している。これら二名については写真もある (Aleksander Lasik, *Zaloga SS w KL Auschwitz w latach 1940-1945* (一九四〇年—一九四五年におけるアウシュヴィッツ強制収容所の親衛隊), Bydgoszcz 1994)。

シャツを預けて行ったとのことである。

こういう訳で、たとえ黒く見えるものを親衛隊員が黒いと言っても信じてはいけない。これは断じて誇張ではない。

二五

ジブシー収容所の四五〇〇人にその時が来た。抹殺の仕方は、チェコ人収容所とまったく同じである。すべての囚人を数棟のバラックに閉じ込めるのに、軍用犬の調教師を含めて多数の親衛隊員が投入された。次に、ジブシーがそこから追い出され整列した。別の収容所に移動すると言われた。表向きは三日間の旅をするようにして、一人に三日分ずつのパンが配給された。二年間も収容されているのに、それを真に受けて旅行できると信じている。誠にシンプルかつ効果的なトリックである。罠にはめられたジブシーは死体焼却場に連れて行かれるとは鼻から疑ってはいない。死出の旅に出る人がパンをもらえるだろうか、という訳である。

もちろん、親衛隊司令部は、人道的配慮から囚人にパンを支給すると命令したわけではない。最も少ない監視兵が最も短い時間内に最高の状態で、大量の人間をガス室に連行するという分かりやすい計略である。

本当にこのようになった。第一(一)死体焼却場と第二(二)死体焼却場の煙突から出る炎は、夜通し収容所全体を照らした。生命に満ちあふれていたジブシー収容所は空になり深閑めしとしている。風は、よろい戸や扉をあおり、有刺鉄線をうならせて、主のいなバラックの間を吹き抜けた。またしても、ヨーロッパの放火マニアが大がかりな花火大会を計画した。今回も、その会場はアウシュヴィッツ強制収容所である。しかし、このときばかりは、炎の中に投げ込まれたのはユダヤ人ではなかった。ドイツとオーストリアから来たカトリック信者のジブシーであった。火は明け方になって消えた。そして、死体焼却場の庭には、銀色にかすかな光を放つ山が現れた。犠牲者の遺灰の山である。

しかし、二四組の双子の死体は炉室には行かなかつた。ガス室で殺される前に、ドクター・メンゲレが特殊なインクで胸にZSの二文字を書いた。それは「解剖用」という意味である。

新生児から一六歳まで、あらゆる年齢の双子の死体がここに横たわっている。私は、兄弟ごと、姉妹ごと、二人ずつの組を作るといふ難しい仕事をした。ドクター・メンゲレは、かくも貴重な研究材料を無駄にするような過ちには、死をもつて処すると思われたので、しくじらないように注意しなければならなかつた。この前日、私の机で並んで解剖済みの双子のファイルを検査していたときの出来事から、それは確実と思われた。そのファイルの中に脂の小さなシミがあつた。ドクター・メンゲレは偶然にもそれに気がついた。私は、このファイルを剖検中にしばしば参照したから、そのようなシミが付くのは至極当然であつた。ドクター・メンゲレはとがめるような目つきで私をにらみつけ、大まじめにこう言った。「愛情をもつて私が収集したファイルを、よくもこんな風に取り扱えるものだ。」

彼の口から「愛情」という言葉が出た。嘘ではない、本当のことだ。シヨックで開いた口がふさがらなかつた。

二六

ある日、老人の死体を解剖して、胆嚢に興味深い数個の結石を見つけた。ドクター・メンゲレがこのようなものを貪欲に収集していることを知っていたので、それを洗浄し乾燥して瓶に密封した。そして、医療記録を含めた詳細情報を貼付した。その翌日の朝にそれをドクター・メンゲレに渡した。彼はとても喜んで、あらゆる角度からその胆石を眺めた。そして、私のほうに向き直つて、唐突に、ヴァレンシュタイン王子のバラードを知っているかと尋ねた。この問いはこの場にはふさわしくなかつた。それでもヴァレンシュタインの名は知っています、バラードは聞いたことがありませんと答えた。そうするとドクター・メンゲレはほほえんで、次の一節を朗誦した。

ヴァレンシュタイン家のお蔵には

宝石よりもたくさんの胆石がある……

彼はこのふざけた一節を大層な機嫌で朗誦したので、大冒険の好機が到来したと心に決めた。

可能なら妻と娘に会わせてもらえませんかと頼んだのだ。危険を冒してしまつたとすぐに気づいたが、時すでに遅し。言つてしまつた。彼はびっくりして私を見つめ、妻子がいるのかと尋ねた。幾分慌てて、「はい、大尉殿、妻と一五になる娘がおります。」と返答した。

「それで、ここにまだいると思うのか。」

「そう思います。ここに到着した三ヶ月前に、大尉殿は右に並べとおっしゃいましたので。」

ドクター・メンゲレは当てずっぽうに、「だが、その後で別の収容所に移送された可能性もある。」と言つた。

私は窓の外にある死体焼却場の煙突を見やった。……ドクター・メンゲレは頬杖をついていた。私は彼のかたわらに立つて、思案中の彼を見ていた。

「通行証を出そう。探せるかもしれない。だがしかし、……。」
 と言って、彼は人差し指を口に当てて、私を見つめた。顔つきと
 仕草で威嚇された。

「了解しました。ありがとうございます、大尉殿。」

ドクター・メンゲレが去り、私は通行証を握りしめて自室に退いた。通行証には、「囚人A八四五〇番は、監視兵を伴わずにアウシュヴィッツ強制収容所の敷地内を自由に移動することを許可する。本命令は、取り消されるまで有効とする。」と書かれてあり、親衛隊大尉ドクター・メンゲレ、と署名があった。

私はとても興奮した。おそらく、あの時点までの収容所のすべての歴史の中で、監視兵が付かずに家族探しのために女性囚人の居住区に入る許可をもらった囚人は、誰一人としていないであろう。

私はどこから始めたらいかが分からなかった。女性の囚人は、B II c 収容区か、第三建屋区か、あるいは女性収容所⁽⁴⁴⁾にいたが、私が理解するところでは、ハンガリーからの女性の大半は、B II c 収容区に送られているはずだ。五万人くらいがそこにいる可能性がある。そこから始めよう。

翌日、起床したときにはとても疲れていた。一睡もできなかった。身の毛もよだつような疑惑が頭から離れなかったのである。強制収容所の三ヶ月は長い。たった一時間が何年にも当たる。アウシュヴィッツに到着して以来、多くのことがあった。私は他の誰よりも、毎日一時間ごとにどれだけのことが起こるかをよく知っている。

親衛隊の執務室に入り、出かけることを申告した。仲間にも

断った。みんなが幸運を祈ってくれた。

太陽がいつぱいの八月の暑い朝、三つの旅に出発した。カラスが飛んでいるので、実際にはB II c 収容区はもっと近くにあるのだろうが、そこに行くには、非常線を迂回し、途中の様々な収容区を通り抜けなければならない。恐怖と好奇心がない交ぜになつて、私は高圧電流が流れる有刺鉄線でできたフェンスの間の道を進んだ。その道を通る者を監視塔の監視兵が警告なしに射撃することは禁じられており、モーターバイクに乗った親衛隊員だけが辺りをパトロールしていた。

実際に私は途中で何回もパトロールに出くわしたが、誰何^{すいか}されたことは一度もなかった。こうして、B II c 収容区に着いた。有刺鉄線でできた目の細かい網を陶製の磚^{がいし}子でとめた大きな鉄のゲートの前には指揮官事務所があった。親衛隊員が数人、外のベンチに座って日向^{ひなた}ぼっこをしていた。彼らは私の頭からつま先までをじろじろと見た。私は、とても奇異に見えたに違いないが、何も言われなかった。指揮官事務所の窓辺の席にいる同僚の権限を侵^{おか}す気がなかったからである。私は窓に近づき、入れ墨の囚人

(44) ビルケナウ強制収容所のB I a 収容区とB I b 収容区に収容される女性はずべて登録されていた。しかし、一九四四年五月から六月までのユダヤ人移送列車で到着した女性は登録されなかった。未登録の女性で労働に選別された者はB II c 収容区に収容され、選別を受けていない者は、囚人たちが「メキシコ」と言っていた第三建屋区に収容された。第三建屋区では選別が行われず、女性の囚人は野宿しなければならぬことがしばしばあり、適当な衣服も支給されなかった。やがて行われた選別の後、労働に適すとされた女性は、ビルケナウのどこかの収容区か付属収容所、もしくは外部の収容所に移送され、その他はガス室に送られた。

番号を読み上げた。彼は私を不審そうに見つめた。私は、ポケットからドクター・メンゲレの署名入りの通行証を取り出し、提示した。親衛隊の監視兵は、それを読み部下に命令するとゲートが開いた。そのとき、親衛隊の監視兵は、B II c 収容区にどれだけ滞在する予定かと尋ねた。事前に決めた時間に戻らなければならぬからである。私は腕時計をちらりと見た。一〇時だった。親衛隊の監視兵には正午には戻りたいと言った。彼はそれを登録簿に記載した。こうなるまでには随分と長い時間がかかったが、このような状況では、収容所のどこでも通用する通行証だけでなく、ヨスマ・ブランドの一〇本入りタバコ一箱も役に立つ。タバコを渡して、B II c 収容区に入った。

B II c 収容区の緑色のバラックの間を走る大通りでは、多くを見た。一〇時になると決まって厨房から囚人の食事が出る。女性のグループが大きな金属製の樽に熱いスープをびっしり入れて運んでいた。またあるグループの女性作業員は玉石を運んでいた。道路の両側には、頭の毛を刈りとられポロをまとい、日向にしゃがんだり横になったりしている女性が多数いた。哀れな光景だ。彼らの服装は異様で、襟ぐりが深く、長い夜会服のようなものを着て、シラミを潰していた。仲間のシラミを取っている者もいた。身体は不潔で、膿瘍ができていた。

これが検疫収容所なのだ。この女性には作業はない。その代わりに、他の収容所で作業するために一部が選別されてアウシュヴィッツから出て行く。ここにいる人たちは、これまでに何回かの選別を経験しているのだろう。彼らには重労働は明らかに不適切である。ここから移送された人たちは、何と幸せなことか。わずかながらも生き残るチャンスがある。それに較べて、まだアウシュヴィッツに残った、この気の毒な人たちの運命は、ジプシーやチエコ人の収容所の場合と同じように定まっている。

最初のバラックに近づいて行くと、金切り声の大歓声で歓迎された。床に横たわっていた、ポロに身を纏った幽霊のような人たちが突然、動き出した。恐ろしい姿をした人たちが起きあがり、私めがけて突進してきた。三〇人くらいいたに違いない。私がかかると、一斉に夫や子どもの情報を尋ね始めた。

彼らを見る影もなく変わってしまったが、私が小綺麗で人の心が分かりそうな人物に見えたためか、私の正体に気づいた。次々と女性たちが私を取り囲み、一人ひとりが死にもぐるいになって、夫や子どものことを知りたがった。彼らは、ここに来て三ヶ月になるが、その間、酷い条件のもとで、いつも恐怖にさらされていた。毎週、選別があった。強制収容所にいる間、彼らは過去を嘆き将来を恐れていた。この不幸な女性たちもまた、死体焼却場の樽について尋ねた。日中に立ち上がる黒い煙と夜間に見える火柱の意味を知りたがった。本当に人間を燃やしているのかどうかはつきりさせて欲しいと言った。私は、できる限り彼らを安心させようとして、すべてを否定した。樽は嘘だと言った。戦争が終わりかけていて、すぐに自宅に戻れるとも言った。自分の言ったことを自分では信じてはいないが、私はみんなを落ち着かせたかった。私の家族、私の妻と娘のことが何も分からないままに、そこを離れた。

次のバラックに入った。ブロック長は、たまたまスロバキア人の女性だったが、妻を呼び出して欲しいと頼んだ。収容区のバラック一棟には八〇〇人〜一〇〇〇人の女性がいて、通路の両側に作った蚕棚のようなベッドにギユウギユウに詰め込まれていた。このようなバラックでは自分の声すら聞こえない。ブロック長の声は喧嘩でかき消された。しばらくしてブロック長が戻ってきたが、努力は無に帰した。私は礼を言って、次のバラックに行った。状況はこれまでと変わらず、同じことが繰り返された。

ここでも探索の成果はなかった。その次のバラックでは通路の中央に立って、プロック長を呼び出してきて欲しいと言った。プロック長が来た。妻と娘を探していると言うと、探してくるようにと二人の利発そうな少女を急がせた。二人はベッドの両側を歩き、ベッドごとに家族の名を叫んだ。そして、……戻ってきた。妻と娘を連れて。

妻と娘は手をつなぎ、恐怖のあまり目をカッと開いて、私に近づいてきた。ふつうは、強制収容所での呼び出しは不吉の兆しだからである。とそのとき、妻と娘は私に気づいた。根が生えたように、そこに立ち尽くしていた。私は駆けより二人をしつかりと抱きしめ、キスをした。妻と娘は何も言わず、悲痛の涙を流して静かに泣いたので、気を落ち着かせてやった。詮索好きな囚人が群れをなして私たちの周りに集まってきたが、プロック長を見てやっつて、部屋を貸してもらえないかと尋ねた。ついに私たちだけになった。

妻と娘は、これまでの三ヶ月間に収容所で経験したトラウマ、恐怖の選別、死体焼却場の煙突近くで生活する恐怖の日々を話し始めた。二人は栄養失調で、ボロボロの服を着て雨風に身をさらしていた。雨の日には、バラックは雨漏りがして衣服を乾かさることができなかった。食事と言っても、まったく食べられたものではない。もつと悪いのは、夜ゆつくりと眠れないことだ。一段が七人用に作られていた寝棚を、今は一二人で使っている。娘が言うには、ここ数週間は寝棚に余裕がないために、コンクリートの床で寝ているそうだ。

妻は、どこで作業しているかと尋ねた。死体焼却場でドクター・メンゲレの助手をして、ゾンダーコマンドの作業員をしていると言った。収容所に来てすでに三ヶ月になるので、二人はゾンダーコマンドが死を宣告された囚人部隊であることを知っていた。

た。それで私の話二人は驚いた。私は彼らを心配させないように最善を尽くした。別れなければならない時が来た。私はまた明日も来ると約束した。

妻と娘が見つかったという知らせで、死体焼却場は沸き立った。衣服係から暖かい下着、靴下その他の衣料品を、また別の係からは歯ブラシ、石けん、爪切り、ポケットナイフ、きれいな櫛をもらい、リュックサックに詰めた。そして、一番上には、医薬品、ビタミン剤、外傷用軟膏、包帯、そして必要な物と必要かもしれない物を入れた。さらに他の囚人にも分け与えるのに十分な、砂糖、バター、アプリコットジャム、そしてパンも持った。これらを全部詰め込んで、次の日、B II c 収容区にもう一度行った。それから毎日、満杯のリュックサックを背負ってそこに行った。

しかし、残念なことに、善きことには終わりがあつた。二週間、毎日、B II c 収容区に行った。恐れていた時がきつと来る。チェコ人収容所とジプシーの収容所が清算された後となつては、B II c 収容区が同じ運命になるのも時間の問題だ。結局のところ、遅かれ早かれ、アウシュヴィッツ強制収容所にたどり着いた不幸な人たちは清算の犠牲者になる。

ある日の午後、私は、実験室の椅子にドクター・テイロ、ドクター・メンゲレと一緒に腰掛けていた。この二人の親衛隊医官が話していたのだが、その話題は強制収容所の運営問題であった。突然、ドクター・メンゲレが立ちあがり、決然とした面持ちでドクター・テイロにこう言った。

「C 収容所「ニスリの妻子がいるB II c 収容区」の衰弱した穀潰どもを飼う余裕は、もうない。二週間以内にかたづけなくては。」

これまでもこのような会話は、私の前ではしばしばなされていた。まるで私とその場にいないかのように、彼らは最高機密の問

題を議論していた。結局、私は事実上死刑判決を受け、もはや数に入らず、この世には存在しないも同然だったのである。

ドクター・メンゲレの恐るべき決断は、私にはとても手痛い。身内の生命だけでなく、何千もの同胞の生命が危機に瀕している。すぐに行動しなければならぬ。

ドクター・メンゲレとドクター・ティロが死体焼却場の建屋に戻るやいなや、私もゲートを出た。B II c 収容区に通ずる道を歩いた。そこには、囚人労働を手配する労働配備部隊の事務所があった。それは、囚人を選別し、第三帝国にくまなく配置された労働収容所や軍需工場に移送する部局である。

その責任者は親衛隊軍曹であった。彼は一人で事務所にいた。私は自己紹介してから、ドクター・メンゲレが発給した無期限有効の通行証を提示し、妻と娘がB II c 収容区にいと告げた。私はドクター・メンゲレの助けを借りて妻と娘をなんとか探しあて、当面は意のままになるあれこれの生活手段を渡して二人を助けてはいるが、できるだけ早く、すぐにでも二人をアウシュヴィッツから離れさせたいと思っていた。死体焼却場で仕事をさせられている私は、収容所の長期滞留者には何が待っているかをよく知っているからである。労働配備部隊の責任者の予想は私とまったく同じで、助けやると約束した。その週には、B II c 収容区で選別があり、移送列車が二本出る。それぞれの列車で三〇〇〇人ずつをドイツ西部の軍需工場に運ぶことになった^{二五〇}。このような工場は、絶滅政策の一環として作られたのではないから、仕事場としては比較的良好い。そこで働いている人々には、しかるべき生活条件のもとで食事が与えられ、概して肉体労働力の価値を維持するように処遇されていた。何ものよりも優先されるべきは、生産量の最大化だからである。私はタバコが一〇〇本入った箱をポケットから出して、机の上に置いた。親衛隊員はそれを受け取り、

もちろん妻と娘が選別のときに志願すればの話だがと言って、移送列車の一本に妻と娘を乗せてやると約束した。欲しいものが手に入った。

私は、やり遂げるのが難しい仕事を持ってB II c 収容区に行った。収容所から出なければならぬことを、最愛の家族に本当の理由を言わないで、なんとかして説得しなければならぬ。二人とも、おそらくは逃れたい結論に狼狽するであろう。本当のこととは言えない。

私はブロック長の部屋に妻と娘を連れて行き、別れることはとてもつらいが、二人は何かでもアウシュヴィッツから離れなければならぬと言った。お互いに会うのは、もう止めなければならぬ。私は探すことを諦めなければならぬ。状況がそれを求めている。私は、今週中には親衛隊が二本の大編成の移送列車に乗せる囚人を選別することになっていて二人に言った。二人は、その二本のうちのどれか、できれば最初の移送列車への乗車を志願しなければならぬ。

私は妻に、このように助言しなければならぬには、十分な理由があると説明した。そして、私たちの友人全員にもこの移送に志願するように伝えて欲しいと言い、それ以上のことは言ってくれるなと頼んだ。

移送列車が編成されて、最初に親衛隊の選抜係は志願した囚人から選抜したが、その次は必要な員数に達するまで強制的に選抜した。今の惨めな状態よりもっと悪くなるではないかと恐れて、通常は志願する囚人はきわめて少ない。その上、働く必要がない検疫収容所で不十分な貧しい配給しかを受けていなかった人が、志願して作業しようと考えているであろうか。なんと気の毒で哀れな人たちよ。第三帝国の強制収容所の道徳律が分かっている。働かざる者は生きるを許されず、ということに気づいていないのだ。

妻と娘は、私の助言は十分な理由があつてのことに違いないと理解した。二人は、次に選別があれば、志願すると約束した。

二日後には、旅のための暖かい衣服と食料をもってまた来ると約束して別れた。

二日が過ぎ、最後の別れをするために、うち沈んでB II c 収容区に向かった。たくさんの衣服と食料をもって行った。しかし、このときは一人では行かなかつた。あえて、大量の物資をもってB II c 収容区のゲートを通ろうとは思わなかつた。その辺りには、いつも数人の親衛隊将校がいたからである。このこともあつて、私の肺炎患者である死体焼却場勤務の親衛隊員に頼んで、一緒に行って柵越しに荷物を投げ入れてもらうことにした。

バラックの中に入ることができなかつたので、妻と娘を呼び出して、外に出て有刺鉄線の近くまで来させた。同行した監視兵と私は柵越しに荷物を投げ入れた。幸いにも、私たちに気づいた者は近くには誰もいなかった。

私たちは有刺鉄線で隔てられ、抱き合うことすらできない。数分間話ただけだつた。妻は、志願のことは問題ないと言つた。妻と娘は、選抜責任者の軍曹に姓名を申告する必要もなかつた。名前はあのとすぐに移送名簿に記載されたからである。多くの女性は忠告を聞いて志願を決めたとき妻が言つたときには、とても嬉しかつた。

(二五) ドイツ国内で労働力需要が逼迫した一九四四年春以降には、このようなことがあつた。Franciszek Piper, *Auschwitz: How Many People Perished? Jews, Poles, Gypsies...*, Oswiecim: Farp-Books, 1996, p. 48.

二七

三日後、妻と娘が本当に収容所を出たことを確かめたくて、もう一度B II c 収容区に行つてみた。

すべてが希望通りだつた。それぞれ三〇〇〇人ずつの女性で編成された二本の移送列車が、最も大切な人たちを乗せて、アウシュヴィッツ強制収容所を出発した。彼らには何が待ち受けているかは知る由もないが、ともかくホツとした。アウシュヴィッツでは確実に死あるのみだが、少しでも運があれば、新しい到着地で解放されることもある。戦争が終わりに近づいていることを示す多くの兆候がある。第三帝国の墓穴はすでに掘られていた。アウシュヴィッツからうまく出られた人は、再び希望をもつことができるであろう。それに反して、私は自分の状況が絶望的であることをよく知つていた。

アウシュヴィッツの死体焼却場から最も大切な人を首尾良く救出出したことに、私は深く満足していた。とはいえ、ここでの死は避けがたく切迫していることも感じていた。恐れたり絶望したりしたから、こういう結論になつたわけではない。一二期までのゾンダーコマンドに降りかかつた血の悲劇に堪える知識と冷静な論理的推理から到達した結論である。B II c 収容区から歩きながら、改めて陰鬱なバラックを見やった。頭を刈られポロをまとい、人間の尊厳性を剥奪された哀れでやつれた人たちがふらふらと歩いていたあの場所、かつては美しかった私たちの妻たち、私たちの娘たちが、異様な姿になり果てたあの場所に別れを告げるとき、つらい悲しさがこみ上げてきた。

背中がぞくぞくとして、全身が震えた。コートを着てみて、もう秋になったとようやく気づいた。九月、強い北風が、すでに冠雪

したベスキツ山脈「アウシュヴィッツの南側」に向かつて吹き有刺鉄線を鳴らして、死体焼却場の煙突から昇る炎を煽っていた。そこここに数羽のカラスが飛んでいた。アウシュヴィッツで見られる唯一の鳥である。私のほうに吹いてくる風は、何世紀でも保つように作られた死体焼却場の煙突から出た幾筋もの煙を運んできた。肉と髪が焼けるいつもの悪臭とともに。

昼も夜も、何も手につかず落ち着きなく、あれこれと思い煩い、無口になった。あれ以上に望むものはない。最も大切な二人がここを去ってからというもの、寂しさのあまり息が詰まりそうになった。

静寂と果てしない単調さがアウシュヴィッツ強制収容所を覆っていた。これは悪い兆しだ。これまで直感が外れたことはない。この途轍もない静けさは、これまで以上の大虐殺の前触れであった。第一二期のゾンダーコマンドは四ヶ月の寿命のうち三ヶ月半を使ってしまった。砂時計の砂の落ち方は早い。わずかに二週間が残っているだけだ。……

ドクター・メンゲレは自分の言葉に忠実な男である。B II c 収容区は清算された。毎晩、五〇台のトラックに四〇〇〇人の犠牲者を載せて死体焼却場に来る。それはぞつとするような光景だ。狂ったように叫ぶ人たち、あるいは恐怖のあまりに茫然自失になった人たちを貨物のように載せて、ヘッドライトを点けたトラックが長蛇の列をなして死体焼却場の庭に入ってくる。

ガス室に降りてゆく入り口の真ん前で降ろされるときには、哀れな犠牲者たちはもう裸になっている。女性たちはみんな、これからガスで殺されることをよく知っているが、これまで四ヶ月以上にも亘って刑務所の規則を叩き込まれ、身も心も参って神経衰弱になり、抵抗する意思さえも奪われていた。彼らは群れをなし、残忍な死が待っているガス室に甘んじて向かった。とは言え、一

人ひとりの女性にとつて、それは、それまでの無益で耐えがたい人生に終止符を打つものであった。

そうなるまでの道のりの、何と長いことよ。ここに至る旅の節目節目で受けた苦しみが、いかに人道にもとるものであり、理不尽なものであったことか。彼らの平和な家庭は略奪され、跡形もなく破壊された。夫、子、年老いた両親と一緒に、郊外の古びたレンガ造りのゲッターに押し込められ、春の雨が残した水たまりの上で数週間も寝なければならなかった。さらに、数人ずつ呼び出されて、特別に設えた拷問部屋で尋問され、貴重品を誰と一緒にどこに隠したかを白状するまで、指を叩き潰されゴム製の棍棒で殴られた。拷問の途中で死んだ人も多い。その後、残りは一両に八〇人、九〇人ずつが貨車に押し込まれた。このような状態で、途中で死んだ人と一緒に、最終的に列車がアウシュヴィッツのランプに降り立つまで、四日か五日、旅をした。

私たちには次に何が起こるか分かっていない。最も親密な家族から引き離され、心が傷ついたまま、女性たちはB II c 収容区のパラックにたどり着いた。シラミと病気の不潔な温床に入る前に、人間の尊厳性の最後の痕跡を奪い取る手続き、すなわち浴場での儀式を受けなければならなかった。乱暴な手つきで衣服がはぎ取られ、毛髪が刈り取られる。シャワーの後に渡される新しい衣服は、最も気の毒な乞食でも嫌になって捨ててしまおうだろう。みんなが揃ってポロを身に纏うと、第三帝国から最初の本当のプレゼントがある。それはシラミ。

こうして我が妻が、我が母が、我が姉妹が、我が娘が、強制収容所の有刺鉄線の内側で生気を失ってゆく。食事は豚の食べ残りよりも悪い。餓死を防ぎはするが、かろうじて生命を維持する程度の食事である。タンパク質が足りない。生命の維持に必要なこの栄養分が不足しているために、足は鉛のように重くなる。脂肪

の欠乏はむくみを生じさせ、月経周期の乱れはイライラ、頭痛、鼻血を頻発させ、ビタミンBの欠乏は恒常的な眠気と記憶喪失を引き起こす。かつて住んでいた通りの名前や番地を忘れてしまうことさえある。その目をみれば生きていることはようやく分かるが、どちらかと言えば飢餓を訴える目だ。

点呼では延々と全員が繰り返し数えられ、何時間も整列させられた。気絶して倒れると、凍ったバケツの水がかけられ起こされた。気づいて最初に見えるのは、死体焼却場の煙突から立ち昇る黒い煙と炎の雲である。煙と炎は、絶滅が目の前にあることをいつも思い出させる二つのシンボルである。

この四ヶ月間、BⅡc収容区の収容者は死体焼却場の側でひっそりと生きていたのだが、全員が死体焼却場に入るのには一〇日で済んだ。

数多くの悲劇の舞台となったBⅡc収容区はふたたび静寂の中であつた。……

二八

月日が流れた。そして、毎日、ゾンダーコマンドは最期の日が来るのを待った。最も恐ろしい、処刑の日が今まで以上に近づいていた。それが終われば、すべては暗闇の中に灰となる。……親衛隊の処刑人が、いつ来てもおかしくないと私たちは予想していた。

一九四五年一〇月六日⁽⁴⁵⁾、局所非常線と広域非常線の間の中間地帯に建っている監視塔の一つから、一発の銃声が鳴り響いた。致命傷を負った囚人が地面に倒れ込んだ。この男は、捕虜収容所から逃亡を謀^{はか}ったためにアウシュヴィツ強制収容所に移送されたロシア軍の将校であつた。ここに来ても逃亡を図り、監視兵の標的になつた。

ドクター・メンゲレが率いる政治部「強制収容所ゲシュタポ」から派遣された親衛隊員が現着し、日常茶飯事となつている事件を捜査した。ふつうは、死体は死体置き場に運ばれ、手続きなしに死体焼却場に送られるのだが、死体がロシア軍の将校であつたため、このときばかりは例外的に、そのフル・ネームが登録簿に記載された。こうして、この囚人には非業の死を説明する証拠として剖検報告書が必要になつた。……現場検証が終わわり、ドクター・メンゲレは死体を死体焼却場に運ばせて剖検を指示し、報告書を二時三〇分までに作成して、直接手渡すようにと命じた。報告書を入念に点検したからである。

九時頃にドクター・メンゲレは部屋を退出した。死体を解剖台

(45) 正しくは七日。

に載せてもらい、私は剖検に取りかかろうとした。三〇分か四〇分できり終えることができそうに思われたが、その日は一〇月六日「正しくは七日」であり、ゾンダーコマンドの最後の日になるか、それともその一日前になるかという日であった。確かなことは何も知らされていないが、死がすぐそこまで来ていることは、誰もが直感していた。仕事の手が付かなかつた。解剖室を出て、宿舎に行った。次々とタバコに火を点け、ふつうでは考えられないほど大量にルミナル錠を服用したが、どうやったらよいか、私にはまったく分からないままに、炉室に行った。

炉前には何百もの死体が集められていたが、日勤の作業員はノロノロとしていた。少人数のグループで集まって、何やら小声で相談していた。作業員の寝床がある上のフロア「屋根裏部屋」に行った。夜勤は、いつもは朝食を摂って眠っているはずだが、このときは違っていた。信じられない。午前一〇時になっても、まだ誰も寝ていない。それに一番奇妙だったのは、穏やかな一〇月の日が差しているのに、防寒ジャンパーを着て、膝までのブーツを履くなどして、動きやすい服装をしていたことである。

誰もがあちこちを動き回ったり、スーツケースの中身を分別したりしていた。あたり中がざわめいていて、私の緊張はいや増した。何かが起ころうとしている。私はカポ長の狭い個室に入った。テーブルに着いていたのは、夜勤のカポ、保守点検技師、火夫（カマタカ）の主任、そして、ガス室のカポだった。クミン「香辛料、セリ科の一年草」で香り付けをした最高級のポーランド産ウオッカは半ば空になっていたが、グラスに半分ほど注いでもらって、席に着いた。私はウオッカを一気にあおった。飲んだからといって、最後の時間を迎えようとしているゾンダーコマンドの魂の救済にはならないかもしれないが、死の恐怖を乗り越えるのには確かに役立つ。……

仲間たちは状況を詳しく説明してくれた。彼らが集めた情報によれば、ゾンダーコマンドが明日もしくは三日後には抹殺されることになっている。八六〇人⁽⁴⁶⁾のゾンダーコマンドには、今晚、死体焼却場で反乱を起こすためのあらゆる準備ができていた。私たちの逃走経路の行き先は、収容所から二^リほど離れているヴィスワ川の大河^(ベド)である。暑い夏の終わりで、その辺りは水深が浅く十分に歩いて渡れるからである。川向こうには奥行き八^リの森があり、数週間、あるいは数ヶ月は落ち着けそうな隠れ家を簡単に見つけることができ、パルチザンとも連絡がつけられると思われる。オシフィエンチムの弾薬工場で働いていたポーランドのユダヤ人女性数名⁽⁴⁷⁾が運び込んだ武器によって戦闘のチャンスを得て、私たちは見事に成し遂げるだろう。私たちの武器には、ドイツ軍がとくに鉄道線路の爆破に使用する爆発力の大きなエクラサ

(46) 公文書によれば、一九四四年一〇月七日現在、じつさいにゾンダーコマンドにいたのは六六三人である。「内訳は以下の通り
(Czech, *Kalendarium*, S. 898)。第一(一)死体焼却場(57 B班)・・一九九人(日勤八四人、夜勤八五人)・・第二(二)死体焼却場(58 B班)・・一九九人(日勤八四人、夜勤八五人)・・第三(三)死体焼却場(59 B班)・・一九九人(日勤八四人、夜勤八五人)・・第四(四)死体焼却場(60 B班)・・二五六人(日勤七二人、夜勤八四人)。なお、一九四四年一〇月三日付の人員配置表(グラビア27(次頁))では第四(五)死体焼却場(60 B班)の日勤が七〇人となっているだけで、他は同一である。」

(47) アーラ・ゲルトナー、レギーナ・ザファーシユタイン、エステラ・ワイブルム。爆薬は第三(四)死体焼却場の近くにあった身の回り品保管収容所「いわゆる「カナダ」」で作業していたロザ・ロボタが密かに持ち込んだ。この四人はすべて、その後取り調べを受けて、一九四五年一月六日に拡大保護拘禁収容所と言われるアウシュヴィッツ基幹収容所(アウシュヴィッツ第一強制収容所)の新しい施設で絞首刑が執行された。「これが最後の公開処刑となった。」

93

Kdo. Nr. 1. A. R. B. E. I. T. S. K. O. M. M. A. N. D. O. S. I. A. R. D. U. R. T. P. O. S. T. S. A. C. H. - H. I. L. F. S. - S. A. C. H. - H. I. L. F. S. -
 Arb. Arb. Arb. Arb.

U b e r t r a g:

Dienststellen - Verwaltung:

51-B. Zaubetriebsdienststellen	Lager	-	52	65	52	65
52-B. Aufraumungskdo. au. I.	Auschw.	-	-	50	-	-
53-B. Aufraumungskdo. au. II. N. artw.	Lager	-	-	472	-	-
54-B. Aufraumungskdo. au. II. a.d. R.	Lager	-	-	280	-	802
57-B. Heizer Krematorium I.	Lager	1	2	84	-	-
57-B. Heizer Krematorium II.	Lager	2	2	85	-	-
58-B. Heizer Krematorium II.	Lager	1	-	85	-	-
59-B. Heizer Krematorium III.	Lager	1	1	84	-	-
59-B. Heizer Krematorium III.	Lager	1	1	84	-	-
60-B. Heizer Krematorium IV.	Lager	2	-	85	-	-
60-B. Heizer Krematorium IV.	Lager	1	-	84	-	-
	Lager	12	-	70	-	661
		77		55		1528

Läuferposten

G e s a m t:

	Lagerber.	2				
		77		1676		6919
eschäftigte:						
a) Lehrkräfte:	B II/a.	B II/d.	3 II/e.	B II/f.	3 II/g.	
	H. 20	1110	430	55	61	

グラビア 27 死体焼却場別ゾンターコンピュータ日勤・夜勤人員配置 (1944年10月3日現在)
 峰起 4日前の配置 (専門作業員 3人, 一般作業員 661人)

イト弾「水、衝撃、火に影響されない爆薬」が一〇〇発あった。その上、軽機関銃⁽⁴⁸⁾が五丁と手りゅう弾が二〇発もあった。以上が私たちの備えのすべてであった。作戦は、夜間当番の親衛隊員へのナイフによる急襲から始める。計画によれば、その次は親衛隊の看守宿舎に忍びこみ、小火器を捕獲した後、できるだけ長く警備兵を人質に取っておく。……サーチライトを使って、第一(二)死体焼却場から第二(三)死体焼却場へ、そして第二(三)死体焼却場から第三(四)死体焼却場へ、さらに第三(四)死体焼却場から第四(五)死体焼却場へと、次々に脱走の合図を送る予定である。私には、計画全体がともまくり行きそうに見えた。その日は、第一(二)死体焼却場以外には、どの死体焼却場でも死体を焼却していなかったから、なおさらである。こうして、六時に死体焼却場で作業が終わるときには、ゾンダーコマンドには誰一人として夜勤に就く作業員はいない。このような夜には親衛隊は少数の警備しか配置せず、どの死体焼却場にもわずか三人しかいない。いつも通りに作業を続けることとし、合図があるまではいささかも疑われることのないようにしようと相談して、私たちは別れた。部屋に戻る途中に、また炉室を通った。四人たちはやる気なさそうに作業していた。私は仲間の医師たちに状況を説明した。しかし、助手には何も言わなかった。彼は強制収容所の四人になって数年になるが、信用ならない男だった。どのみち事が起これば、彼だって状況を受け入れなければならなくなるだろう。

昼食の時間になったので、私は仲間とともに静かに食事を摂り、一緒に死体焼却場の庭に出て、さわやかな秋の日差しで身体を暖めた。親衛隊員がいないのはつきりした。これまでと同じように、おそらくは自分たちの部屋にいるのだろう。ゲートが閉まり、警備兵が配置に着いた。いつもの通りだ。気がかりで困ったことは、本当に何一つない。私は静かにタバコを吸った。夜に有刺鉄

線を越えることができれば自由になる。こう考えると、これまでの四ヶ月間重くのしかかっていた恐怖心が取り除かれた。失敗しても、失うものは何もない。

腕時計を見た。一時半だった。ドクター・メンゲレが戻ってくるはずの二時半までには、剖検を終えていなければならぬ。何も言わずに、仲間の医師たちが私の後について解剖室に来た。直ちに私たちは仕事に取りかかった。こうしてあの特別な日には、同僚の一人が剖検を担当し、私はタイプライターで報告書を作成した。

およそ二〇分間、私たちは一言も発せずに仕事をした。そのとき、突然、大爆発の衝撃で部屋全体が揺れた。その後、双方の軽機関銃の撃ち合いが始まった。

緑色の大きな防虫網戸から透かして見ると、第三(四)死体焼却場の赤い屋根が崩れ落ちるのが見えた⁽⁴⁹⁾。梁やブロックが空中に吹き飛んだと思うと、すぐに巨大な黒い煙と火柱が立った。もの一分も経たないうちに、解剖室のドアの外で軽機関銃が火を噴いた。

何が起ったのか思いもつかなかった。夜に始まると予想していたからだ。密告されて、親衛隊が先制攻撃を仕掛けたのか。あ

(48) その他の資料には、数個の粗雑な自家製手りゅう弾以外には、ゾンダーコマンドが保有したとされる小火器についての記述がない。

(49) 蜂起は、親衛隊がゾンダーコマンドの作業員の中から三〇〇人を連行しようとしたときである。四人たちは、その最中に第三(四)死体焼却場の脱衣場にあったベッドに放火した。この脱衣場は、第四(五)死体焼却場と「ガス小屋」〔第二ブナカー、注30、51頁参照〕で使役されていたゾンダーコマンドのほとんどの作業員のための宿舎として使用されていた。

るいはパルチザンが死体焼却場を急襲したのでろうか⁽⁵⁰⁾。アウシュヴィツ第一強制収容所「アウシュヴィツ基幹収容所」とアウシュヴィツ第二強制収容所「ビルケナウ強制収容所」のサイレンが鳴った。爆発音と銃声が次第に大きくなってきた。重機関銃からの砲火の音もはつきり聞こえるようになった。

私の決断は早かった。裏切りがあるろうとパルチザンの攻撃があるろうと、ここを動いてはならない。それは最も賢明なことだった。この場において、状況が収まるのを待たなければならぬ。窓越しにトラックが八台か一〇台接近するのが見えた。死体焼却場に沿って停車した。一個大隊の半数がトラックから飛び降りて、有刺鉄線の柵の前で配置につき始めたのが見えた。

もはや状況は明らかだ。ゾンダーコマンドの囚人は第一(二)死体焼却場を占領し火を放ち、まだ定位置に着いていない親衛隊めがけて窓から手りゅう弾を投げていた。親衛隊員が死ぬか負傷するかして倒れているので、囚人の抵抗は効果をあげているのが分かる。そこで、攻撃側の親衛隊はもつと実効性のある手立てを講じた。四〇頭〜五〇頭の良く訓練された軍用犬を連れてきて、囚人たちを死体焼却場の中に押し込めようとしたのである。ところが驚いたことに、忠実で獐猛な^{どろち}獣^{はた}が主人である親衛隊員の後ろに縮こまり、クンクンと泣いたのだ。軍用犬は縞模様の囚人服を着た人を攻撃するように訓練されていたからだと思われる。死体焼却場の建屋の中には一匹も入って行かなかった。焦げた肉、血骨が発する悪臭が辺り一面にたち込めていて、犬の鋭い嗅覚には酷すぎたに違いない。

軍用犬を使って囚人を追い出そうとしたが、失敗に終わったので、親衛隊は近くの陣地から二基の高射砲を運び込んで、死体焼却場の建屋に狙いを定めた。ゾンダーコマンドはこのような圧倒的な火力に耐えられるはずがない。関^まの聲が建屋を揺すり、ゾン

ダーコマンドが裏口から駆け出した。囚人たちは、親衛隊が張つた非常線のほうを射撃し、かねてより切断して開けておいた穴をかいくぐって、通電した有刺鉄線の柵を抜け、ヴィスワ川を目指して走った。その後、親衛隊と逃亡者との間で激しい撃ち合いがあった。小銃の発射音、そして手りゅう弾とエクラサイト弾の爆発音の他に、監視塔からの重機関銃の音も一緒にあってはつきりと聞こえてきた。

一〇分も経たないうちに、静かになった。高射砲はもう必要がなくなり、死体焼却場周辺に配備された親衛隊が建屋を急襲した。着剣した親衛隊員があらゆる方向から突入し、全室を占領した。

親衛隊員が解剖室に踏み込んできた。銃口を向けて私たちを取り囲み、両手を挙げさせた。小銃の台尻で殴られながら、庭に押し出された。私たち四人は地面にうつぶせになるように命令された。「少しでも動いたり、頭を上げたりすれば、一発食らわすぞ。」とも言われた。

数分後、こちらのほうに向かってくる足音を聞いた。逮捕された大勢のゾンダーコマンドの人たちだと思った。彼らも私たちの周りで地面に伏せるように命令された。どれだけの人がいるのだろうか。みんなが一列に伏せていたので、分からなかった。三、四分後に、また新しいグループが庭に連れてこられ、地面に伏せ

(50) ゾンダーコマンドは、収容所全体を巻き込む計画的蜂起に加担するとともに、パルチザンの分遣隊と連携して攻撃すると考えられていた。ゾンダーコマンドの虐殺を企んだ親衛隊は、先手を打って囚人を反逆者に仕立てようとした。第三(四)死体焼却場「59B班一六九人」の蜂起に加わったのは、第一(二)死体焼却場の囚人「57B班一六九人」だけである。

ろと命令された。

全員がじつと動かずに庭に伏せていたが、その間中、ののしり悪態をつく親衛隊員が銃の台尻で殴り、頭の大きな鋸釘を打ち付けたブーツで頭、背中、尻を蹴った。後頭部からの血が顔に流れてきて、塩の味がした。だが痛いと感じたのは最初の一蹴だけだった。目眩がして頭がくらくらした。心の中は空っぽになった。次第に意識を失い、人事不省に陥った。

被さるように立つ親衛隊員が軽機関銃を発砲するのを待ちながら、二〇分か三〇分、うつぶせになっていた。後頭部が撃たれるだろうと確信した。それが最も早く最も簡単に死ぬ方法だ。そのことは、十分すぎるほどよく分かる。脳が飛び散り、頭蓋骨が碎け散る。至近距離からの銃撃の結末を思い描いた。

そのとき、自動車のエンジン音がした。ドクター・メンゲレの車に違いない。ドクター・メンゲレと政治部「強制収容所ゲシュタポ」の面々を待っていたのだ。頭をもたげて見ることはできなかったが、声で分かった。ドクター・メンゲレは、私たちの真正面に立っていた指揮官に話しかけた。すると突然、響き渡る声があった。親衛隊員が「医師は立て。」と叫んだ。

命令に従って、私たち四人は、気をつけの姿勢をとり、次は何が起こるのかを待った。ドクター・メンゲレが私を呼びつけた。顔とワイシャツは血だらけで、衣服は泥まみれになっていた。このような姿で、私はドクター・メンゲレの前に立たなければならなかった。

「何をしたのだ。」とドクター・メンゲレは尋ねた。

「何もしていません。」と答え、「大尉殿の命令をしていただけです。ロシア軍の将校を剖検していた最中に、事が起きました。それで仕事を中断しなければならず、検案書はまだタイプライターに書きかけのままになっています。誰でも確認できます。

ずーっと仕事場にいました。そこにいたのを見つけられました。」親衛隊の指揮官はその通りだと言った。ドクター・メンゲレは私を見て、「行って身体を洗い、仕事を続ける。」と言い、他の三人の医師には私の後に続くようにと合図した。

私は回れ右をして、死体焼却場の扉のほうに歩いた。三人の同僚が続いた。数歩も歩かないうちに、後ろのほうで突然、軽機関銃が火を噴いた。ゾンダーコマンドの男たちが全員射殺された。

私は振り向かなかつた。自室へとひたすら早足に歩いた。震える手で手巻きタバコを巻こうとした。上手に巻けるまでに三枚も無駄にした。タバコに火を点け、深く吸い込み、よろめきながらベッドに行った。横になつてはじめて、殴られたり蹴られたりした所が痛いのに気づいた。

何と多くのことがあつた日であろうか。ようやく三時になったばかりだ。生き残ったことに歓びも感じないし、助かつたという気もしない。寿命が少しだけ伸びたにすぎない。私には、ドクター・メンゲレや親衛隊員のような人たちの精神構造が分かる。私がしようとしている仕事は彼らには必要であること、そして私が余人をもつては替え難い人物であること、このことに彼らは気づいただけである。私の他には、ドクター・メンゲレの厳格な要求にかなう専門家は、この収容所にはいない。そのような人がいたならば、それは、ドクター・メンゲレに驚づかみにされる恐怖、さらにまたゾンダーコマンドの一作業員として最期を迎える恐怖を心の中にしまつておくことができるような人であろう。

トラウマから少し回復したので、ベッドから辺りを見回した。午後の出来事の真相を知りたいと思つた。内部に裏切り者がいて、親衛隊が意識的にゾンダーコマンドの計画的蜂起と脱走にたいする先制攻撃をしかけたのだろうか。蜂起と脱走よりも良い皆殺しの口実は、ほとんどないであろう。私が立てたもう一つの仮説は、

ゾンダーコマンドの生命の期限がまさにあの日に切れることになつていて、政治部所属の親衛隊に虐殺命令が下つたというものである。囚人全員を確認すると称し、その実、処刑するために点呼に呼び出した。これは、これまでにどのゾンダーコマンドにたいしても採ってきた方法である。だが、第一二期のゾンダーコマンドは、そうはならなかった。わがゾンダーコマンドは武装して抵抗したのである。

死んだ仲間の死体が衣服をはぎ取られ裸になつて、炉前に長い列をなしている。第一(二)死体焼却場から脱出しようとした人たちを、一人ずつ確認した。彼らは次々と火線をくぐり抜けようとして撃たれた。その死体は手押し車で運ばれてきた。私たちが庭から離れた直後に、そこで射殺された仲間もいた。蜂起が鎮圧されて、彼らは第二(三)死体焼却場、第三(四)死体焼却場、第四(五)死体焼却場に集められ、そこから第一(二)死体焼却場に連れてこられて殺され、一緒に焼かれた。こうして、その日に稼働したのは第一(二)死体焼却場の焼却炉だけになり、親衛隊が使役できたのは、急いで補充した新しいゾンダーコマンド三〇人だけだった。

新たに補充した囚人が死体を仰向けにするたびに、親衛隊の下士官がその囚人番号を書き取っていた。私はその側に立っていた。何も尋ねなかったが、まだ一二人の行方が分からないとのことだった。七人を除いて、全員が死亡した。私たち三人の医師と解剖室の助手は、その七人のうちの四人である。私たち以外に生命が助かった三人は、エンジンと送風機の保守点検に当たっていた技術師、火夫の主任、そして親衛隊が衣服の洗濯、靴磨き、皿洗い、電話番に使っていた使い走りのピーベル^{ニヒ}であった。

一二人が逃亡中であつた。ピーベルが、あの日に実際に起こったことを詳しく私に話して

くれた。

裏切りはあるはずがなかった。午後一時半に七〇人の親衛隊員を乗せたトラックが第三(四)死体焼却場に到着した。彼らは特別分遣隊から派遣された。分遣隊の指揮官はゾンダーコマンドに出てくるように言ったが、誰も動かなかった。そこで親衛隊の将校は策を弄することに決めた。親衛隊員はみな、これまでにも嘘つき名人だったからである。彼は庭の中央で、親衛隊口調の下手で短い演説をした。

「みんなに命令が出ている。諸君は重労働をしたのだから、労働収容所に移動することになった。ここでは上等の衣服が支給され、飯はたっぷりあり、作業は軽い。これから番号を呼ばれた者は出て、整列しろ。」

将校が囚人番号を読み上げた。第三(四)死体焼却場には一〇〇人のハンガリー人がいて、まずその番号が読み上げられた。彼らは収容所では最も新しい囚人だったので、おとなしく命令に従った。勇氣よりも恐怖心が優つたのだ。親衛隊の一団が直ちにハンガリー人を護送して庭から連れ出し、B II d 収容区の一三号棟に幽閉した。

ハンガリー人が連行された後も、第三(四)死体焼却場では囚人番号が続けて読み上げられた。ギリシア人の番になった。前のグループとは違って、彼らには親衛隊員の命令どおりには整列したくないという気持ちがありありと見えた。次はポーランド人の番。囚人番号が読み上げられると、腹立たしげに文句を言う者が出始め、ついには大声を上げる者すらいた。親衛隊員は囚人番号を読み上げたが、誰も動かなかった。

くだんの将校が、何事が起こったかと辺りを見回した。するとそのとき、突然その足下にミネラル・ウォーターの瓶が飛んできて、大爆発した。この指揮官を入れて、七人の親衛隊員が倒れた。



グラビア 28 第3(4)死体焼却場：1944年親衛隊撮影
1944年10月7日のゾンダーコマンドの蜂起により全焼。

死んだ者も怪我を負った者もいた。瓶にはエクラサイト弾が仕込まれていて、それをポーランド人が投げたのだ。親衛隊は、死体焼却場の建屋に逃げ込んだ反乱者を殺そうとして発砲した。反乱者は死体焼却場の窓からエクラサイト弾を仕込んだ瓶を庭めがけて投げた。親衛隊は、整列していたギリシア人を躊躇わず銃撃した。逃亡しようとした者もいたが、銃弾はゲートまで届いた。

親衛隊員は銃を撃ちながら、第三(四)死体焼却場の入り口を急襲しようとしたが、ポーランド人がすさまじく抵抗したために、進入できなかった。エクラサイト弾を仕込んだ瓶が次々と窓から投げられ、すさまじい爆発力で建屋への進入が阻まれた。

そして、これまでよりもはるかに強く、はるかに大きな爆発音がして、建屋の最も近くにいた親衛隊員が地面に叩きつけられた。死体焼却場の屋根が吹き飛び、炎と煙の中で何百本もの垂木が天を突き刺した。ガソリンを入れた四本の大きなドラム缶に火が点いたからである。この爆発によって建屋は壊滅的打撃を受け、ゾンダーコマンドが瓦礫の下敷きになった。爆発をかくぐって生き残った少人数で戦闘を続けたが、親衛隊の撃つ軽機関銃の弾嵐の中ですぐに射殺された。怪我や火傷を負った残りの人たちは、両手を挙げて扉に向かって来たが、一斉射撃でなぎ倒されてしまった。彼らには何が待ち受けているかを分かっていたが、建屋が激しく燃えていたので、手っ取り早く死ぬ方法を選んだのだ。

一〇〇名のハンガリー人はB II d収容区から駆り立てられて、すぐに射殺された。

こうして、蜂起は第三(四)死体焼却場から始まった。第三(四)死体焼却場の屋根が吹き飛ばすまでは、第一(二)死体焼却場では作業が続いていた。第三(四)死体焼却場での爆発音とともに、緊張した雰囲気の中で期待感はどうとう最高潮に達した。始めのうちは、何が起きているのか誰も知らなかった。火夫たちが持ち場



グラビア 29 ヤンキエル・ハンデル
スマン
元ゾンダーコマンド。蜂起の
リーダーの一人。

を離れて隅に集まり、相談していた。親衛隊の監視兵がすぐにやって来て、仕事の中断を許したとして日勤班の職長を怒鳴りつけたから、火夫たちには少しだけ考える時間があった。囚人を殴るときに親衛隊が使う太い棍棒で火夫の頭を、その監視兵が思い切り殴打したことから見て、職長は監視兵を説得できなかったのだ。あのような一撃を受ければ普通の人ならば頭蓋骨が割れて死んでしまうのだが、この火夫はゾンダーコマンドの中で最もタフだった。血が顔まで流れてきたが、少し身体を傾け、次の瞬間にブーツから長めの小刀を抜いて、監視兵の胸を突き刺した。二人の火夫がすぐに支えたので、監視兵は倒れなかった。この二人が炉の扉を開けて、その親衛隊員を火の中に投じた。

すべてが一瞬の出来事だったが、人の群れの中に飛び込んできた別の監視兵は、親衛隊員のブーツが焼却炉から突き出ていることに気づいたのであろう。ブーツを履いているのはゾンダーコマンドか親衛隊しかないのです、この監視兵はそれが誰であるかを知らうとしたが、果たせなかった。囚人の一人が彼を遮り刺殺して、先ほどの親衛隊員がすでに焼かれている焼却炉に、二人が

かりで別の囚人がこれを押し込んだからである。すぐに囚人たちは、軽機関銃、手りゅう弾、爆発物を手にした。炉室の両側で親衛隊とゾンダーコマンドとの猛烈な銃撃戦が続いた。

突然、一団の親衛隊員の中で手りゅう弾が爆発し、七人が死ぬか怪我を負って戦闘不能になって倒れた。ゾンダーコマンドの側にも負傷者が出た。戦闘は激しさを増し、親衛隊員がさらに倒れた。おそらく二〇人くらいが残っていたと思われるが、建屋からの撤退を決定した。彼らは、外部から到着した多人数の親衛隊の分遣隊が合流しているゲートに向かって走った。

それからの出来事は知っている。死体焼却場の全作業員のうち、残ったのは私たち七人だけだった。

その晩、行方不明だった一二人の囚人が連れ戻された。彼らはようやくヴィスワ川の対岸までたどり着いたが、そこで親衛隊の手に落ちた。彼らは疲労困憊し、安全そうに見える一軒の家屋に立ち寄ることにした。そこへ親衛隊が急襲して、逃亡者一二人全員を生きて捕縛した。

炸裂する機関銃で突然奮い立った一日。恐怖におののいた一日。そんな一日が終わり、私は眠ろうとしてベッドに横になった。

銃声が静まると、廊下からおぼつかない歩いてくる足音が聞こえた。ドアが開いて、二人の親衛隊員が顔中血だらけの姿でよろめきながら入ってきた。死体焼却場に連れ戻された一二人の囚人が庭に着くとすぐに、銃を奪おうとして素手で迫害者に立ち向かったことが分かった。囚人たちは即座に射殺された。

親衛隊員は傷の手当てをして欲しいと言ったので、私はそうした。

最後となった同志一二人の死は、私の心を完膚なきまでに打ち砕いた。かくも高い代価を支払い、多くの人命をかけたにもか

わらず、ここでの出来事を外界に伝えようとして、墮落したこの地から逃亡できたのは、一人もいないのだから。

しかし、後になって分かったことだが、色々なことがあったにもかかわらず、ゾンダーコマンド蜂起のニュースは外部に漏れた。このニュースは、囚人の口から収容所に雇用されていた民間人に届いた。あの出来事をベラベラしゃべる親衛隊員も何人かはいただ。

これは前例のない事件だった。収容所全史における比類ない出来事である。囚人一八〇人が死んだ。他方で、中尉一人、軍曹一七人、一等兵(もしくは二等兵)五二人、併せて七〇人の親衛隊員が殺された。第三(四)死体焼却場は瓦礫と化し、第四(五)死体焼却場は機械装置の損傷により作業不能になった⁽⁵¹⁾。

(二二六) 一五歳〜一八歳の小間使いをする囚人。性的関係を強要された者もいた。

二九

心が休まらない夜だったので、目が覚めても疲労感が残っていた。神経がすり減り、仲間の小さな声、小さな足音にもイライラした。

私たちは皆、不機嫌な顔をして解剖室に向った。途中で炉室を通ったが、コンクリートの床の上にはもう何もなかった。わが同志は夜のうちに焼かれてしまったのだ。炉は冷えて生暖かくなっていた。

(51) 親衛隊の損害にかんしてはニスリの数字を確証する資料はない。

一九四四年一〇月七日付親衛隊守備隊命令一九四四年第二六号によれば、三人の親衛隊員が「総統閣下にたいする誓いを忠実に守り、敵との交戦により死亡した」。その三人は、ルドルフ・エアラー、ヴェイリイ・フレイゼ、ヨーゼフ・ブルケである。「ペリー・ブロードの証言によれば、姓名不詳ではあるが、「大規模な蜂起の鎮圧における名譽ある行動」により五人に鉄十字章が贈られた(Czech. Kalendarium, S. 905)」。ゾンダーコマンドの元囚人によれば、親衛隊の負傷者は一二人であり、囚人側の死亡者は四五一一人である[戦闘中の死亡者二五〇人、他は加担したとして一〇月七日に殺害(Czech. Kalendarium, S. 896)]。ゾンダーコマンドの囚人は二二二人が生き残った。それは主に第四(五)死体焼却場と第二(三)死体焼却場において、蜂起に加わらなかった囚人である。「二〇月九日に、生き残った二二二人は四等分され、四つの死体焼却場(第一(二)死体焼却場、第四(五)死体焼却場)の各班(57 B班、58 B班、59 B班、60 B班)に日勤と夜勤を合わせて五三人ずつが配置された。翌一〇日には、このうち一四人が蜂起にかんする取調のために逮捕された。残りの一九八人は三等分され、六六人ずつが第一(二)死体焼却場、第二(三)死体焼却場、第四(五)死体焼却場に配置された。この三ヶ所の死体焼却場(三つの班)は、日勤と夜勤が三三人ずつの体制で稼働することになった(Czech. Kalendarium, S. 902f)。なお、爆破された第三(四)死体焼却場の壁の撤去は一〇月一四日から始まった(a. a. O., S. 907)。⁹⁾

昨日の血なまぐさい出来事に心底恐れをなした三〇人の新人は、前任者のベッドに寝転がったり座ったりしている。しかし、落ち着かない状態は数日しか続かないであろう。すぐに彼らもまた生きるために食欲が出て、さらなる美味を求めることだろう。タバコを吸い、最も効く薬となる最高級のウォッカを見つけたら、数時間飲めば、死体焼却症候群に罹った人も癒やされる。アルコールは、昨日のことを忘れさせ、今日のこと、そして今日よりも恐ろしい明日のことも考えないようにさせる。収容所のバラックではまったく手に入らなかったものを得ることになる。上等な衣服をまとい、洗濯を堪能し、水も、石けんも、タオルも、何一つ欠けていないことが分かる。海千山千の古狸が新兵を扱うように、私は彼らと向き合った。

解剖室での仕事がなかったで、同僚の医師たちには何か暇つぶしになるようなことをするようにと指示した。彼らは、展示してある瓶や窓ガラスのほこりを拭き取ったり器具を整理したりした。昨日の銃撃戦のときに銃弾が貫通してきた窓の金網の穴もふさいだ。私はと言えば、頭に絆創膏を貼って机に向かい、ドクター・メンゲレに申告したい苦情と要望の一覧表を作成した。

死体焼却場の建屋にある部屋はどれ一つとして、解剖室の目的に適っていないことを説明したい。ガス殺か後頭部への一発かはともかくも、まさに死のうとしている人の断末魔の叫び声が四方八方どこからでも聞こえ、しかもその恐ろしい声が耳から離れないからである。重要な研究をしようという気にならないのは、死体焼却場に着いた瞬間に、私は、かつてゾンダーコマンドにいたあの作業員二人の運命を思い出してしまうだけでなく、四ヶ月の間、毎日、毎時間、第一二期のゾンダーコマンドと同じ運命を待っていたからである。さらにまた、ドクター・メンゲレには、厳密さが求められる仕事はさせないで欲しいと頼むことにしよう。

というのは、ドクター・メンゲレは、あの日、一九四四年一月六日②にロシア軍の将校の剖検を実施し、文書を作成するように命じたにもかかわらず、私たち医師団は親衛隊の分遣隊から乱暴に扱われたからである。砲兵隊と軍用犬が侵入し、手りゅう弾が投げ込まれた。科学的研究をしようとしている解剖室に着剣した親衛隊員が乱入し、私たちを殴打し庭に連行して、うつ伏せになれと命令した。あつという間に私は剖検の専門家ではなくなり、抹殺を申し渡された者の一人になった。ドクター・メンゲレが、抹殺されようとした囚人グループの中から私を引き抜いたことは、その通りだが、それでもなお死の館にあつて寿命がさらに四ヶ月伸びたにすぎない。今のような状況が続くことはありえない。このことを認識して欲しいと彼に頼むつもりでいた。あの日、私は数時間前に私を殴る蹴るした二人の親衛隊下士官の傷の手当をした。その二人は私に銃口を向けて、「撃て」の合図を待っていたのに、である。

私の上司に言おうと思った不満はこのようなものだった。私の要望は、私たち四人編成のゾンダーコマンドが仕事をするのもっとふさわしい、収容所内の別の場所への移動であった。ドアが開き、ドクター・メンゲレが部屋に入ったとき、言わなければならぬと決めたことの全部が頭の中で、ゴチャゴチャになってしまった。規則に従って私は気をつけの姿勢をとり、部隊の先任として上官に申告した。

「大尉殿、医師三名、実験助手一名が勤務中であることを申告します。」

ドクター・メンゲレは私をじろじろ見てから、絆創膏を貼った頭を見つめた。

(52) 正しくは、一九四四年一〇月七日。

「何かあったのか。」心配そうにそう尋ねた。昨日の出来事には触れて欲しくないと思っていることが分かったので、ドクター・メンゲレの問いには答えなかった。実のところほとんど何も話さなかった。私の苦情カテログは退化した器官も同然で何の役にもたたなくなり、すぐに忘れてしまった。それでも、「大尉殿、この環境は重要な科学的研究には向いておりません。解剖室をどこかに移設できないものでしょうか。」と言った。彼の顔つきが急に険しくなった。「感傷的になつていっているのではないか。」冷ややかに素っ気ない返答だった。

それを聞いた私はこの墮落した研究マニアに、不満の申し立ては言うまでもなく、環境の変化を提案することさえも忘れてしまった。それはどうしてだろうか。そうだ。ここは彼にとつて最も心地よい場所なのだ。ここからは、野外死体焼却場で火が燃えているのが見える。死体焼却場の建屋の煙突からは煙が昇っている。建物の壁は、殺されようとしている人たちの叫び声と殺人者の銃声をはね返して、音が響き渡っている。選別と血なまぐさい処刑をしたドクター・メンゲレが、戻ってくるのもここだ。錯乱した「科学」マニアだからこそ、彼は、私に命じてこの恐るべき環境の中で何百もの無辜の犠牲者の死体にメスを入れさせ、自由時間のすべてをここで費消している。冷蔵庫の中には新鮮な人間の肉を餌にする多種多様なバクテリアがいる。これまで説明不能とされた多胎出生という現象の原因を求めて顕微鏡をのぞき込んで、彼は時間を費やしている。

しかし、この日、ドクター・メンゲレは疲れているように見えた。雨の降る中を数時間、リガ「現在のラトビア共和国の首都」のゲットーから大規模な移送列車で着いたユダヤ人の選別を監督して、ランプから戻ってきた。実際には選別はなかった。全員が左の列に並んだからである。稼働中の死体焼却場と大きな炎を上

げて燃えさかる溝の両方で、目いっぱい作業が行なわれていた。大挙して押し寄せてきたユダヤ人のために、ゾンダーコマンドは四六〇人編成に拡大しなければならなかった。

私の上司は、ずぶ濡れになったマントのまま実験室のベンチに腰掛けていた。雨水がしたたり落ちていたが、鍔付き帽を脱ごうともしなかった。したたり落ちる雨水にも気づいていなかったのだ。

マントと帽子をストローブに当てて乾かしませうかと申し出たが、「その必要はない、肌まで染み込んではいない。」と言った。

射殺したロシア軍の将校の検案書をもってこいと言った。それを手にすると、数行読んで戻した。

「疲れているから、読め。」と言った。びつくりして検案書を受け取り、四行か五行読んだときに遮って、「もういい。続けなくてもよい。」と言って、気抜けしたように窓を見つめていた。

都合が悪いことでもあったのだろうか。犯したすべての犯罪のことを思い出しているのだろうか。あるいは、悪いニュースを聞いたのだろうか。これまで意味のないことをしてきたことに、ようやく気づいたのであろうか。

死体焼却場で共に時間を過ごしたが、ドクター・メンゲレは私に個人的なことを話す機会を与えたことはなかった。しかし、落ち込んでいるこのときを捕らえて、私は勇気を出して尋ねてみた。「大尉殿、清算はどれくらい続くのでしょうか。」

答えはこうだ。「あのなあ、ズーッと続くんだ。もつと、もつとズーッとだ。」その言葉には、静かな諦めが込められていた。ドクター・メンゲレは実験室を出ようとして、椅子から立ち上がった。

「数日後には、私たちにとって興味深い仕事があるだろう。」と言いつつ、出て行った。

これを聞いて、背筋がぞくぞくとした。どう見ても「興味深い仕事」はさらに大勢の新たな双子の死を意味するからである。

三〇

死体焼却場の準備ができた。ゾンダーコマンドは炉のレンガを交換し、重い鉄の扉を塗装して蝶番にオイルをさした。技師たちが確実に作業するために、終日、送風機のエンジンが稼働した。ウッチ「ポーランド中央部の都市」のゲッターから到着したようだ。

ウッチ・ゲッター⁽⁵³⁾は一九三九年に作られた。当初の住民は五〇万人であった。彼らは巨大軍需工場での労働を強制され、その見返りとして、いわゆるゲッター・マルク⁽⁵⁴⁾を得たが、配給票を必要とする、ごくわずかな食料を買うことしかできなかつた。栄養失調の身で重労働は、当然のことながら肉体を消耗させる。頻発する流行病によって人口が減少し、一九四四年の夏には五〇万人のうち、わずかに五万人しか残っていなかった。その人たちにも終わりの時間が来た。彼らに乗せた貨物列車がアウシュヴィッツのランプに到着し始めたのだ。選別の結果、その九五％が右の列で、左の列はわずかに五％であった。家族は離ればなれになり、五年に及ぶゲッター生活で精も根も尽き果てて、悲劇に打ちひしがれた彼らは、現実感覚を失ってしまった。これが人生最後の旅路の果てであることは、彼らにとつては秘密でも何でもない。静かに死体焼却場のゲートを通った。

私は脱衣場のある地下に降りていった。衣服や靴が床の上に散乱していた。番号を付けた洋服掛けはどうでもよかった。脱いだ場所に衣服があった。衣服を整理していた作業員が包を二、三個解いて、中身を見せてくれた。トウモロコシの粉で作ったパンケーキ、水、食用油、一錠か二錠のオートミール。ここまでの旅でユダヤ人がもってきたものすべてがこれだった。

移送列車が着いて選別をしていたとき、ドクター・メンゲレは群衆の中に五〇歳くらいになる脊柱側弯症の人を見つけた。この身体障がい者は一人ではなかった。そのかたわらには、背が高く整って優美な顔立ちをした一五歳の少年が立っていた。その息子である。この少年の右足は変形していて、金属製の特殊な器具を装着し、整形外科で作った分厚い底の靴を履いていた。ドクター・メンゲレは、この身体障がい者のペアである父親と息子がユダヤ人の退化を示す古典的な事例であると考えた。彼はこの二人を直ちに列から出して、親衛隊下士官を呼びつけた。ノートから二枚を裂き数語書き、それを渡して二人を第一(二)死体焼却場に連行するようにと命令した。

正午頃だった。その日、第一(二)死体焼却場は稼働していなかった。私にも仕事がなかったので、自室にいたが、当番の親衛隊員が探しに来てゲートまで呼び出された。すでにそこには親衛隊の監視兵と一緒に、あの父親と息子が立っていた。紙片には、「第一(二)死体焼却場解剖室。二人を臨床的観点から診断すること。父親と息子の厳密な測定。観察された異常をもたらした可能性のある原因にとくに注意して、完全かつ詳細な診療カードを作成

(53) ウッチ・ゲッターが作られたのは一九四〇年二月八日である。ウッチ「ドイツ占領時の地名はリッツマンシユタット、地図1、122頁」のユダヤ人の他に、いわゆるヴァルテラント「ポーランド占領後ドイツに編入。正式にはライヒスガウ・ヴァルテラント。地名は南東から北西に流れるヴァルテ川による」やドイツなどからのユダヤ人がいた。一時はこのゲッターにはおよそ二六万人のユダヤ人がいた。健康な者は地場の工場へ強制労働に駆り出され、労働に適さない者は絶滅収容所に送られた。ゲッターが閉鎖されたのは一九四四年八月である。生存していた六万人、七万人のユダヤ人はアウシュヴィッツ強制収容所に移送され、そのほとんどが到着後ただちにガス室行きになった。

成すること。」と書かれていた。

もう一枚の紙は、ムースフェルト軍曹に宛てられていた。そこにどんな命令が書かれているかを知ろうとして読んでほならない。私はそれをムースフェルトに渡すようにと親衛隊員に言った。

ウッチ・ゲッターから来た悲劇の父子は、びっくりした様子でも言わずに私を見つめた。強い日差しを受けて庭を通るとき、二人にはもつと氣を楽にするようにと言った。解剖室に入った。有り難いことに、解剖室には死体が一体もなかった。死体があれば、とても見るに耐えがたい光景だったであろう。不快な目に遭わせないために、化学薬品が悪臭を放つ薄暗い解剖室ではなく、暖かく日が差し込んでいる診察室で診察することにした。話をしてみても、父親はウッチに大きな店を構える繊維問屋であること、そして名の通った教授なら息子を治療できるかもしれないと思つて、何回もウィーンに旅行したことが分かった。

最初に父親を徹底的に診察した。脊柱の横方向への湾曲とその結果としての隆肉は、割に年を取ってから発症したくる病に起因する。細部に亘って診察したが、それ以外の病氣は見つからなかった。安心させようとして、彼には労働収容所送りになるのが最も可能性が高いと言っておいた。

父親を診断しながら、少年とも話をした。彼は利発そうな顔をしていたが、かなり取り乱していた。怯えて声を震わせ、ウッチ・ゲッターでの五年間に見なければならなかった恐怖と個人的に体験しなければならなかった恐怖など、数え切れない恐怖を私に話した。家族がゲッターに入ったとき、少年は一〇歳になったばかりだった。身体は弱い、上品な女性だったその母親は、降りかかった不幸に長くは苦しむことはなかった。うつ病を発症して、ふさぎ込み、数週間、何も口にできなかった。そのために、夫と少年はその分を食べることができたが、とても献身的な妻にし

て、息子思いの母は、ゲッターに幽閉された最初の一年が終わった頃に死亡した。この人なしに、夫と息子は生きなければならなかった。

そして今、彼らは死体焼却場の中にいる。運命の、何と恐ろしく皮肉なことか。ユダヤ人医師であるこの私が、死ぬ前に彼らを注意深く診断しなければならなくなった。そして、その次は、まだ生暖かい死体を解剖しなければならぬのだ。計り知れないこの悲劇的狀況と絶望のあまり、氣が狂いそうになり、またしてもかなり落ち込んだ。

この氣の毒な人たちを次々と恐怖に陥れるように仕向けているのは、いったい誰なのか。それが神の御心であるならば、神がこのような恐怖を望むことはあつてはならないことだから、恥ずべきは神だとさえ思った。

力を振り絞つて少年を診察した。右足の何ヶ所かの関節には、發育不全による先天的な障がいが見られた。その学名は短肢症である。腕のいい外科医がその足を数回手術していた。その結果、足は短くなったが、包帯を巻き整形外科で作った靴を履けば、歩くことができた。それ以外には欠陥はなかった。

何か食べたいものがあるかと尋ねた。二人とも空腹だったので、食べ物を持つて来てもらった。しばらくの間、二人は大皿に盛ったビーフシチューとマカロニを貪るように食べていた。このような食物は、ゾンダーコマンドにいる者しか口にすることができない。最後にこれを食べたのはいつのことか、彼らは忘れてしまったに違いない。彼らは、まだあのことを知らない。それにたいして、私は、これが最後の食事であることを知っている。

三〇分も経たないうちに、ムースフェルト軍曹がゾンダーコマンドの作業員四人と一緒に来た。二人を炬室に連れ出し、服を脱げと命令した。ムースフェルトが二発、撃った。父親と息子は血

まみれのコンクリートの床に倒れた。ドクター・メンゲレの命令をムースフェルト軍曹が実行したのだった。

今度は私の番だ。二人の死体が解剖室には運び込まれた。気持ちが悪くなったので、剖検は仲間の医師に頼み、私はタイプで検案書を作成した。生前に行った父子の診察で明らかになった以上のことは、剖検でも明らかにはならなかった。とは言え、この月並みの事例は、ユダヤ人の退化を裏付ける科学的証拠として活用されることだろう。

夕方になってドクター・メンゲレが来た。その日、彼はとうとう一万人を死に追いやった。彼は、不幸な犠牲者の生体診察と検視の両方を興味深く聴いた。

ドクター・メンゲレは、「この二体を焼却してはならない。骸骨に保存処置を施して、ベルリンの人類学博物館に送らなければならぬ。」と言った。

そして、骸骨をきれいにする仕方について知っていることを述べてみると言った。方法は二つありますと答えた。第一の方法は、死体を二週間、塩化カルシウム溶液に漬けて骨に付着した柔らかい組織を焼いてから、ガソリンに漬けて脂肪を取り除き、骨を漂白することである。第二の方法は、それよりも手間がかからない肉が骨から簡単に剥がれるまで、死体をお湯で煮て、その後は第一の方法と同じように骸骨をガソリンに漬すやり方である。

ドクター・メンゲレは、時間が短い煮沸法でやれと命令した。強制収容所の命令はいつも簡潔であった。囚人には、この命令の実行方法が教えられていなかったし、また実行するのに必要な機材の入手方法も教えられていなかった。だが、命令は命令だ。なさねばならぬ、以上、という次第だ。お鉢は私に回ってきて、二体の死体を煮沸するようにと命令された。だが、どこで何を使つてすればよいのか。

私はムースフェルト軍曹に助けを求めた。彼のような男でも、私に与えられた仕事のことを聞いてショックを受けた。彼は少し考えて、物置に鉄製の空樽が二つあることを思い出した。それを使えと言い、死体を入れた樽を載せるために、第一(一)死体焼却場の庭にレンガで竈を作つてはどうかと提案した。この助言に従うことにした。手直しをくりかえして竈ができた。恐ろしいものを入れた二つの樽をその上に載せて、煮沸し始めた。薪をくべるためにゾンダーコマンドの作業員が二人来た。五時間の間、何回も点検して、肉が骨から離れ始めた頃合いを見計らって火を消したが、樽が冷えるまではそのまま外に置かれた。

私は日陰に座り、読書を始めた。静かだった。その日、死体焼却場は稼働していなかった。第一(二)死体焼却場では、アウシュヴィッツ第一強制収容所「基幹収容所」から来た四人のレンガ工が煙突を修理していた。

夕暮れになったころ、樽が冷えたと思い、腰を上げようとした。まさにそのときに、樽の番をしていた四人の一人が私のほうに走ってきて、とても取り乱した様子で叫んだ。

「先生、ポーランド人が樽の中の肉を食べている。」

私はすぐに竈へと急いだ。編模様の囚人服を着ていた四人は、恐怖のあまり口がきけず、樽の横に立っていた。四人はレンガ工だった。彼らは作業を終えて、アウシュヴィッツのバラックに護送する監視兵を待っていた。空腹の囚人たちは、この時間を利用して食べ物を探そうとして、二つの大釜に出くわした。折しもそこは無人だった。彼らは臭いを嗅いで、ゾンダーコマンドのために茹でた肉だと思った。そこで大きな塊を数個取り出して切り分け、ガツガツとむさぼり食い始めた。しかし、程なくゾンダーコマンドの作業員二人が戻ってきて、事態に気づいたという次第だ。レンガ工は何を食べたのかを知って、恐怖のあまり茫然自失と

なって、その場に立ちつくした。

ガソリンで洗浄した骨を実験助手がとても上手に組み立てた。犠牲者は、一日前は、まだ生きていた。その二人の骨は、私がきう診察したあの部屋のテーブルの上に置かれていた。

ドクター・メンゲレはたいそう喜び、医官の高級将校を何人か招待して、その骸骨を見せた。彼らは、優越感に浸って様々な部分に触り、競って専門用語をひけらかし、骨にあった障がいがあったかも科学的大発見であるかのように、嬉々としていた。似而非科学だ。科学の衣を装った戯言(ざれごと)にすぎない。二人には特異な異常はなかった。似たような障がい(ざれごと)は、世界中の何十万もの人間に見られる。たとえ患者の数が少なかったとしても、医者であれば、このような事例を見かける機会はある。だが、ナチの扇動的(プロパガンダ)宣伝は、それが嘘であろうと、狡猾なやり方で示した見かけ上の科学的客観性であろうと、目的のためにはどんなに些細なことでも徹底的に利用し尽くそうとしている。博物館でこのような扇動的(プロパガンダ)宣伝目的の展示物を見る人は、そのほとんどが批判的な知識を欠いているから、言いなりになってしまふであろう。

骨とそれに添えた文書は丈夫な紙の袋に入れ、「軍用速達」の特殊切手を貼ってベルリンに郵送した。

骨を送ってしまうと、どつと疲れが出た。あの父と子が死ぬ前と死んでからのわずかに数時間に起きた悲劇的な出来事は、とても耐えがたいものだった。……

一週間が経ち、ウッチ・ゲットーの清算が終わった。冷たい秋の雨を伴う雲に隠され、一〇月の太陽もなくなった。霧雨と暗闇が強制収容所のバラックを覆った。深い霧が私の過去に襲いかかり、私の未来はますます暗くなった。何日も続く雨による寒気(かんき)と湿気(しつけ)が骨の髓まで染み込んだ。あれやこれやで、すっかり希望がもてなくなってしまう。行くところ、見るところ、どこでも通

電した有刺鉄線がある。いつも思うのは、絶望感と無駄に過ごした人生のことである。

ウッチ・ゲットーの清算から三日目に、ゾンダーコマンドのカポ長が全身ずぶ濡れの女性一人と子ども二人を連れて来た。子どもたちに、何か悪いことが起こりそうな予感がして、移送された人たちの最後尾から逃げて、死体焼却場の庭に積んであった丸太の近くに潜(ひそ)んでいた。この三人は、全員が地下に降りたのを見た。しかし、再び姿を現した人は誰もいなかった。恐怖に震えながら救出の奇跡を待ったが、そうはならなかった。巡廻を終えたカポ長がそこを通るまでの三日間、三人は、寒空の下で、ずぶ濡れの衣服を着て雨に打たれ、飲まず食わずで半ば意識を失いながら我慢した。どうしていいか分からなかったのも、カポ長は彼らをムースフェルト軍曹のところに連行した。五〇歳以上にも見えた三〇代前半の骨と皮だけの女性は、親衛隊員の前に跪(ひざまず)いていた。その女性は残った力を振り絞り親衛隊員のブーツにすがりつき、死にもぐるいになって自分と二人の子どもたちの命乞いをした。彼女は、五年間、ゲットーの工場でドイツ軍のために軍服を作ってきたと言った。生命が助かれば作業を続けたかったのだ。しかし、寛大な措置はなかった。彼らは死ななければならなかった。

そして、殺された。しかし、ムースフェルト軍曹が他の親衛隊員に殺人を実行させたことから見て、アウシュヴィッツでのこの体験は彼の神経に影響を与えたはずである。

(二七) ゲットー内でのみ通用する通貨。様々な金種の紙幣と硬貨があった。

三二

あの血なまぐさい特別の出来事は忘れてしまった。忘れなければならぬから、そうしたのだ。そうでもしなければ、恐ろしいことを数多く体験し、その上絶望すべき状況にあって気が狂ってしまう。かなりルミナル錠に助けられている。

強制収容所に来る前の、まるで夢のような過去をしばしば振り返る。だが、すべてを忘れて、何も考えない、これが唯一の目標だ。

一九四四年一月一日、諸聖人の日。ぼたん雪が降っていた。監視塔はほとんど見えない。すべてが白い薄片に遮られている。風で有刺鉄線が揺れて音がすると、その度にカラスの群れが空へと飛び立った。

天気がどうであっても、夕暮れ時には少しだけ散歩する。冷たい空気でリフレッシュされ、すり減った神経が和らげられるからだ。庭を数回、回ってからガス室に近づいた。数秒、そこに立ち止まると突然、今日が諸聖人の日であることを思い出した。……周りは静かだった。脱衣場に向かう冷たいコンクリートの階段が薄暗い光の中で闇に溶けている。何百万もの人たちが死のうとする前に、この入口で人生に別れを告げ、死後には自分の墓に入ることもさえも否定された。……私は一人で、かくも多くの人たちが立った最後の舞台にいる。私に課せられた悲しい責務を考えた。世界中に散らばっている彼らの家族の名において、死者を記憶に留めるといふ重い責務のことだ。……

悲しみの場を離れて部屋に戻った。ドアを開けると、電灯ではなくてロウソクの火が揺らめいている部屋があったので、驚いた。最初はヒューズが飛んだのではないかと考えたが、同僚の囚人医

師ソンバトヘイ大学元准教授が頼杖をついて、ロウソクの火を凝視しているのに気づいた。だが、彼は私に気づいていない。ロウソクの火が当たっている彼の顔は、実際よりかなり老けて見える。彼の肩に手を置いて、静かに「デネス、どうしてロウソクに火をつけているんだい。」と尋ねた。

彼は、一五年前に死んだ義理の両親のことをぼそぼそと話した。ゾンダーコマンドの中にはその目で見た者もいるが、彼は第一(二)死体焼却場で非業の死を遂げた妻と娘のことは口にしなかった。何らかの経験を思い出せない逆行性記憶喪失症とうつ病の症状だとすぐに分かった。

彼に手を添えてベッドまで連れて行つた。

かわいそうな友よ。やせ形の君は、計り知れない知識をもち、静かな声で話し、感じやすい心をもった医師だった。治療を受けることができないう君は、地獄の死の淵に立ち、そこから人智を超える悲劇と恐怖を何ヶ月にも亘って見てしまった。それは、この浅ましい場所の向こう側にいる人間には、けっして信ずることができないであろう。

君の神経が君を駄目にして心を曇らせたのは、良かったのかもしれない。少なくともこれからのことを理解する必要がなくなるのだから。

静かな日が数日続き、そして、死体焼却場にはいつものざわめきが戻り、エンジンが運転を始めて、巨大な送風装置が焼却炉に火を送った。テレジンから到着する移送列車に備えるようにと言われた。

テレジン⁽⁵⁴⁾はチェコスロバキアの要塞都市であったが、守備隊を廃し市民を追い出して、この街の性格を変え「モデル・ゲット」とした。新しい住民は、チェコスロバキア、オーストリア、オランダから連れて来た。全部でおよそ七万人であった。生活条

国家保安本部
強制労働部

出頭命令書

帝国保護領のユダヤ人 某 は、上記当局の定めにより、強制労働のために召集されることを、本文書をもって通告する。被召集人たるユダヤ人は、業務遂行上必要な道具、ならびに防寒衣類、シーツ、1週間の旅行に必要な食料を用意の上、上記当局に出頭すべし。出発の日時は追って周知する。

テレジエンシュタット 日付

署 名

件は比較的良好で、住民は商売を続けることが許されたし、手紙や赤十字小包を受け取ることも許可された。中立国から赤十字代表団が数回ゲットーを訪問し、その都度、この状況について肯定的な報告書を提出した。この「モデル・ゲットー」は、強制収容所と死体焼却場にかんする恐ろしいニュースに対抗し反証するために建設され、そのようなニュースは誹謗中傷として片付けられた。ドイツ人はゲットー建設の目的を達成した。

しかし、第三帝国の崩壊前夜には、世論への配慮を止めて仮面を脱いだ。残ったすべてのユダヤ人にたいする情け容赦ない虐殺が始まった。

テレジン・ゲットーの番がやって来た。

上に掲げる公文書を手にして、まだ健康で丈夫だった成人男子がテレジン・ゲットーからアウシュヴィッツの死体焼却場に到着した。強制労働への召集は手際よく絶滅させるため卑劣な罠であるとともに、工具や防寒衣服を巻き上げるための罠でもあった。

二〇〇〇人の元気な若者がガス室で非業の死を遂げ、その死体は焼却炉の中で灰になった。虐殺が二日間続き、その後は静かになった。

一四日後、たくさんの貨車を連結した列車が、ふたたびランブに到着した。今度は成人の女性と子どもたちが貨物列車から降り

(54) テレジン「ドイツ語の地名はテレジエンシュタット(地図2、122頁)」はプラハの北方数十キロにあり、一八世紀に建てられた要塞都市である。一九四一年一月に、ドイツはこの地にチェコのユダヤ人のために中核となるゲットーを建設した。ただし、ドイツ、オーストリアなどからのユダヤ人も収容された。このゲットーでは一四万人のユダヤ人のうち三万四〇〇〇人が死亡した。また、このゲットーからはアウシュヴィッツ送りとなった四万六〇〇〇〇人を含めて、八万三〇〇〇人以上が様々な絶滅収容所に移送された。

た。選別なしに全員が左に行った。何百枚もの紙が脱衣場の床に散らばっていた。それには次のように書かれてあった。

国家保安本部
強制労働部

通 知

上記当局は、強制労働を要請された帝国保護領のユダヤ人 某 の妻および子が、上記ユダヤ人と生活を共にするために、その勤務地に赴くことを許可する。本市を離れるすべての者には、しかるべき住居が確保される。旅行人は、防寒衣類、シーツ、1週間の旅行に必要な食料を用意する旨、承知されたい。

テレジエンシュタット 日付

署 名

夫の負担を軽くしたいと願う何千人もの妻たち、そして父親を失った何千人もの子どもたちは、夫であり父親であった二万人の男の後を追って死んでいった。これが悪魔の召集状の効能であった。

三三三

一九四四年十一月十七日の早朝⁽⁵⁵⁾、親衛隊のある下士官が私の部屋に入ってきて、強制収容所の敷地内ではいかなる手段によっても知らされてきた。過去に何回も策略を目標してきたために、額面通りにはこのニュースを受け取れなかった。この嬉しいニュースの配達人を疑っていることは隠さなかったが、彼は、死体焼却場と政治部「強制収容所ゲシュタポ」に無練で伝達された本当の命令だと断言した。時が経てば分かるだろう。それでもなお、私はそれが新手の罠だろうと、ほとんど決めてかかっていた。ところが、もう少し経ったその日の朝のうちに、ニュースが本当に本当だと分かった。病気になるったり衰弱したりした者五〇〇人を「静養収容所」に運ぶ五両連結の列車が、第一(二)死体焼却場と第二(三)死体焼却場の間の線路で止まった。親衛隊の選別担当者の一人が監視分遣隊の指揮官に近づいて、何やら話している

(55) 十一月三日にスロバキアのセラレージ「ブラチスラバの東方約五五⁽⁵⁶⁾」からアウシュヴィッツに移送されたユダヤ人「男性、女性、子ども合わせて九九〇人」は、選別されることなく全員が収容所に収容・登録されたことから見て、ガス室での大量虐殺をすべて中止するという命令は、これよりも早くに発出されたはずである。第一(二)死体焼却場と第二(三)死体焼却場の解体は、十一月二十五日から始まった。「十一月二日以降はチクロンBによるガス殺が行われないうちになり、選別された四人は第四(五)死体焼却場のガス室か地下室で射殺された(Czech. Kalendarium, S. 921)」。メンゲレによる実験も継続され、十二月五日にもBIIe収容区にいた低身長症の女性囚人一六人にたいする人体実験が行われた (a. a. O., S. 941.)。』

のが見えた。二人の話合いで、列車は死体焼却場のゲートとは逆の方向に移動し、その後、囚人はB II f 収容区の病舎に収容された。「静養」のために、ここに移送されてきた人が、一時間も経たないうちに頭蓋骨を碎かれ、炉前の、血で汚れたコンクリートの床に横たわる、そういうのではなかった。本当に病院のベッドに横たわって治療を受けることになったのである。このようなことは、私が死体焼却場に配置されて以来、初めてのことだった。

一時間も経たないうち、新しい移送列車が到着した。老人、少年少女、成人男女、そして子ども、合わせて五〇〇人。スロバキアからのユダヤ人だ。私ははらはらしながら、次に何が起こるかを見ようと待った。ランプでのいつもの手順は、囚人の集合と選別である。しかし、このときに見たことは、まったく異様であった。疲れきった旅人が貨車から降りたが、普段なら大きな荷物はその場に置いたままにしなければならぬのに、このときは荷物を全部携行して、ランプの右側を真っ直ぐ歩いて行った。母親は赤ん坊を乗せた乳母車を押し、若者は病人や老人を助けながら、B II e 収容区に入って行った。気持ちが高揚した私は、あの嬉しいニユースを立証するもう一つの出来事をしっかりと記憶に留めた。抹殺を申し渡された囚人の移送列車を受け入れるゲートは開いていなかったのだから、今や疑いの余地はない。これは強制収容所の囚人にとっては吉報であったが、それは同時にゾンダーコマンドの粛清を予兆させるものでもあった。

慣例の四ヶ月が終わらないうちに、私たちが排除されるのは確実である。収容所には新しいありようの生活が見られるようになった。彼らは囚人の大量殺戮を止めたが、血塗られた過去を隠蔽しなければならぬ。死体焼却場を解体し、死体を焼いた溝を埋めなければならない。そして、凶悪犯罪の目撃者を殺さなければならぬ。私たちは厳粛の中にも穏やかに、それと同時に、こ

の転換を大いに喜んで、迫り来る死と向き合った。第三帝国の放火マニアにして、気の触れた総統の絶滅命令によって、六〇〇万もの人々がマイダネック、トレブリンカ、アウシュヴィッツ、そしてビルケナウへと移送された。そのときから随分と日にちが過ぎていくのに、ともかくもそのうちの数千人はまだ生きている。

正午頃、心配しながら、私は今朝、あの嬉しいニユースを知らせてくれた親衛隊の無線通信士を探した。その後、さらに無線通信がありはしないか、そして、ひよっとしてゾンダーコマンドにかんする特別命令があったかどうかを知りたかったのである。彼が自分の部屋に一人でいたので、ホッとした。質問にたいして彼は、「二、三日経てば、ゾンダーコマンドはブレスラウ近郊の地下工場での重労働のために移送される。」と答えた。私はそれを一言も信じてはいなかったが、悪意をもって騙そうとしたのではなく、同情して嘘をついたということを知っている。たぶん、以前に重症の彼を治療したことがあるからだろう。

三四

私の腕時計は午後二時を指していた。昼食を摂り、自室の窓から、ぼんやりと雪雲を見ていた。突然、静かな廊下に声が響き渡った。

「みんな、出ろ。」

朝と言わず夜と言わず、点呼のときにはいつも、そのような叫び声を聞いているが、昼ともなれば不吉な意味を帯びている。

「出ろ。みんな、出ろ。」これまででない耳障りな口調で繰り返えされる声が聞こえた。すぐに重々しい足音がドアに近づいてきた。ドアが乱暴に開けられて、親衛隊員が「出ろ。」と叫んだ。

いよいよその時が来た。庭に入ると、完全装備の親衛隊員の部隊が私たちを待っていた。仲間は今そこに来ていた。驚く様子も見せず、静かにしていた。展開して軽機関銃を私たちに向けている親衛隊員もまた、静かだった。ゾンダーコマンドは全員が揃うのを辛抱強く待っていた。見回すと、近くの松林の下半分は雪に埋もれていた。辺り一面が静かだった。

数分経ってから、指揮官が「右へ進め。」と言った。武装した監視兵がびっしりいる所を通り過ぎた。庭から出たが、道路には行かずに第二(三)死体焼却場のほうに向かった。庭を横切るとき、これが最後の旅だということは十分に理解していた。炬室に入れた。親衛隊員は誰も中には留まらずに建物の周りを取り囲み、いつでも撃てるように窓と扉に照準を定めていた。扉は施錠され窓も開かないようになっていたので、そこから出ることは不可能だった。

第二(三)死体焼却場の仲間はすでにそこにいた。すぐに第四(五)死体焼却場の仲間とも合流した。そこには、全部で四六〇人

いた⁽⁵⁶⁾。私たちは死を待っていたが、気がかりなのはどうやって殺されるのかということだった。私たちはみんな、専門家であり、親衛隊が採用する様々な絶滅の方法に通じている。ガス室だろうか。ゾンダーコマンドにかなする限り、それはできないだろう。射殺か。建物の中ではできない。死体焼却場もろとも私たちが吹き飛ばすという選択肢が最もありそうである。まさに一石二鳥で、親衛隊ならではの妙技。あるいは、手りゅう弾が数発、投げ込まれるか。ミラノの住民が貨物列車に押し込められた後にやられた方法が、どうもこれらしい。移送列車が動き出す前には、全員が死んでいたのである。アウシュヴィッツの死体焼却場に到着したのは、死体だけだった。

ゾンダーコマンドの作業員は炬室において、何も言わずにコンクリートの床に座っていた。何か言ったとしても、ひそひそと話すだけだった。突然、三〇代前半のやせた背の高い、黒髪の男が立ち上がり、みんなに聞こえるような大きな声で話し始めた。ダヤンだった。彼はポーランドの、とある小さな宗教コミュニティでラビ「ユダヤ教の宗教的指導者」の助手をしていた。偉大な教理を独学で修得し悟りきった禁欲主義者であった。ゾンダーコマンドにおいても厳格な教義を守った。食品庫には一杯ものがあつたにもかかわらず、パン、マーガリン、そしてタマネギしか食べなかつた。彼は火夫の作業を割り当てられたが、私はムースフェルト軍曹に次のような言い方をして頼み込み、信仰心の篤いこの信

(56) 当時のゾンダーコマンドは二〇〇人である。「この二〇〇人は、選別の対象になった四人を指すと考えられる。一九四四年一月二六日に、ビルケナウ強制収容所ではゾンダーコマンド二〇〇人のうち、三〇人が就労可能として第四(五)死体焼却場に配属され、残りの一七〇人は殺害された (Czech. Kalendárium, S. 934)。」

者をあのような恐ろしい作業から解放してもらった。「あの作業は体力を必要とします。ダヤンは禁欲的な規律を守り、ほとんど何も食わず、そのためにとても衰弱していますので、そのような体力はありません。あの作業がふさわしくない理由は他にもあります。死体が火に投じられるとき、一体ごとに完全なお祈りを捧げて、他の作業員の邪魔になっています。しかもそれは日に数千回あります。」私にはこれ以外の理由は考えつかなかったが、軍曹は同意して、ダヤンには改めて第二(三)死体焼却場の庭にあるゴミ捨て場の作業を割り当てることにした。断っておくが、このゴミ捨て場は、用済みのものと移送列車に残された腐敗した食べ物などの集積場である。ゴミの中には、ガス室送りとなった人たちがアウシュヴィッツまで携行した公文書、卒業証書、軍発行の証明書、パスポート、写真、祈祷書、帯、肩掛け、ユダヤ教関連の工芸品があった。親衛隊はこれらを可燃ゴミと見ていた。言うまでもなく、ゴミ捨て場ではいつも何か燃やされている。何十万枚もの家族写真、両親の写真、美しい少女の写真、最愛の子どもの写真だけでなく、何千もの祈祷書が燃やされている。私は、何度も写真や祈祷書を手に取って見た。必ずと言っていいほど、祈祷書には両親の命日が記入されていた。そして、ヨーロッパのどこかにあるそれぞれの家族の墓から花を摘んで丁寧に作った押し花が挟まれていた。これらすべてが、高価な、あるいはお手頃の肩掛けやユダヤ教関連の工芸品と一緒に積み上げられ、燃やされた。

ダヤンが作業していた、というか作業せずに炎を見ていた場所がここであった。思いを尋ねたとき、切ないと彼は答えた。祈祷書、肩掛け、帯、その他の聖なる品々を焼却することは、心外の極み。彼には申し訳ないことをしたと心から思ったが、他の作業を見つめることは私にはできなかった。死体焼却場での作

業に当たるゾンダーコマンドとは、結局このようなものだった。

立ち上がって話し始めたのは、あのダヤンだった。「仲間のユダヤ人のみなさん、計り知ることのできない神の御心は、私たちに死に追いやることでしよう。自滅に手を貸し、変わり果てた灰となってこの世から消滅してしまうのを目撃するという、これ以上ない残酷な務めが定めによって私たちに課されてきました。天が開いて雨が降り火葬壇の火を消す、そのようなことはありませんでした。イスラエルの子であれば、なるべくしてなったのだと諦めて受け入れなければなりません。神がそう定めたのです。どうしてでしょうか。哀れな人間である私たちには、答えを見つめることができません。私たちに降りかかった運命なのです。死を恐れてはなりません。不思議な奇跡が起きてどうにか生き延びたとしても、価値ある人生を送ることができるとはでしょうか。住み慣れた土地に戻り、我が家を探すことでしょうか。そこは冷え切り、略奪されて何も残っていません。どの部屋にも、どの隅にも、目に涙を一杯ためた、もうこの世にはいない人たちの思い出が潜んでいます。家族や親戚を奪われた私たちは、昔の影を引きずりながら、終わった過去に取り憑かれた彷徨える者となって当て所なくふらつきますが、どこに行っても平安と憩いはけっして見つけることはできません。」

彼の目は輝き、げっそり瘦せた顔は靈感に動かされているように見えた。部屋中が静まりかえった。タバコに火を点けるために擦るマツチの音と重苦しい咳払いが、ときどき聞こえるだけだ。生者は死者に別れを告げた。

そのとき突然、大扉が開き、シユタインベルク軍曹が軽機関銃で武装した二人の監視兵と一緒に入ってきて、急ぎ立てるように、「医者はこちらから出る。」と叫んだ。

私は二人の医師と実験助手と一緒に部屋を出た。第一(二)死体

焼却場に戻る途中の道を半分くらい行ったところで、シユタインベルク軍曹と監視兵が立ち止まり、軍曹は私に囚人番号を記載した紙を渡して、私の番号を消せと言った。腕の入れ墨の番号A八四五〇番がすぐに見つかり、私はボールペンで消した。シユタインベルクは同僚の番号も消せと命じた。そして、死体焼却場に行く途中で、彼は、自室に戻ったらそこから出るなど言った。

その翌日、列をなした五台のトラックが第四(五)死体焼却場に停車し、ゾンダーコマンドの囚人の死体を放り投げていった。新たに召集した三〇人の囚人がその死体を炉室に運んだ。死体は恐ろしいほど勢いよく燃えた。衣服はポロポロに引き裂かれ、顔には原形をとどめないほどの火傷があった。誰が誰だか識別できなかった。入れ墨の囚人番号も、ほとんどの場合、分からなくなっていた。

ガス殺、野外死体焼却場、致死量のクロロホルムの心臓注射、後頭部への銃撃、手りゅう弾の他に、第六番目の殺人方法があることを発見した。昨晚、不幸な仲間たちは森に連れて行かれて、火炎放射器で殺されたのだ⁽⁵⁷⁾。

四人だけが残った。このときも、私たちへの配慮とか、生命を助けてやりたいという個人的な思いは、一切関係がない。仕事を進めるために必要とされただけである。喜ぶべき理由は何もない。ホツとしたとも思わない。ドクター・メンゲレは、執行猶予を少しでも与えにすぎないからだ。

三五

第一三期ゾンダーコマンドの絶滅は、血なまぐさい死体焼却場の歴史の中に記録されるもう一つの出来事⁽⁵⁸⁾であった。

私たちは炉室の冷たい壁と壁の間を目的もなく行ったり来たりするが、居場所を見つけないことができない。完全な静寂の中で、響き渡る足音が文字通り耳に響く。することは何もない。無為に日が暮れ、用心深く警戒しながら夜が更ける。ここにいるのは私たち四人だけである。新たに補充された三〇人はゾンダーコマンドとは見なしがたい。彼らは収容所に寝泊まりして、病舎で死んだ人を焼くために一日おきに来るだけだからだ。

私たちは落胆し、来たるべき最後の日を待ち続けて心が折れた。ムースフェルト軍曹が変わってきた。私たちとの接触を避けている。悪い兆候だ。それは、自分がもう役に立たないと彼も感じているという意味だ。悲劇の終わりは駆け足で近づき、暗い秘密を知っている人の出番になった。ムースフェルトは終日自室に引きこもり、過去の犯罪を忘れるために、そして未来に何が降りかかるかを考えないために、酒浸^{さかひ}しになっている。

まったく予想もしていなかったが、ある日、ドクター・メンゲレが来た。しばらく仕事を与えていなかったから無理もない。彼は私たちに、アウシュヴィッツ強制収容所が整理されることになったと伝えた。整理されるのは囚人ではなくて、収容所そのもの

(57) おそらく親衛隊は、射殺した他の一〇〇人のゾンダーコマンドを野外死体焼却場で焼却しようとしたが、できなかったのだので、当時稼働していた唯一の死体焼却場である第四(五)死体焼却場に運び入れたのである。

のである。現存する死体焼却場のうち二棟を解体し、残る一棟は引き続き、収容所で死亡した囚人の死体を焼却することになった。私たち四人は全員で、解剖室の機材、博物館の展示品、保存文書を、稼働している第四(五)死体焼却場に持ち出すことになった。

すぐに取り壊されるのは、第一(二)死体焼却場と第二(三)死体焼却場である。周知のように、第三(四)死体焼却場は、一〇月六日⁽⁵⁸⁾のゾンダーコマンドの蜂起で全焼した。

その翌日、何千人もの囚人が第一(二)死体焼却場の庭を埋め、小さなグループに分かれて、あの恐ろしい血に塗られた過去をもつ、この建屋の解体が始ったが、この時こそ、正しく歴史的な瞬間であった。

ダイナマイトが爆発し、レンガの壁が一面また一面と音をたてて土くれになり、第三帝国崩壊の先触れとなったときには、心の中で快哉の声を上げた。ユダヤ人が作り上げた、この壮大な建物を今はそのユダヤ人がそれを引き倒すのだ。どの囚人も以前のよいうな態度では作業していない。顔つきが違うように見える。もつと佳い日がもうじきやって来る……と期待して。

私たちは解剖室と実験室から持ち出せる物はすべて梱包した。解剖台からは上に載せた大理石だけを取り外した。新しいコンクリートの基礎は第四(五)死体焼却場に作られるに違いない。引越しには何時間もかかったが、夜には新居に入った。

解剖台と様々な棚が作られ、博物館の展示品を取めた。解剖室と実験室の準備が完了した。

そして数日間は何事もなく過ぎた。怠惰な毎日で、無気力になった。私たちは、目的もなく死体焼却場の周りを散歩した。わが監視兵たちは、すっかり酒におぼれていた。それが唯一の逃避手段であった。素面ではいられなかったのだ。

ある日、私たちが夕食を摂っていると、ムースフェルト軍曹が

千鳥足で入ってきた。酔っ払った軍曹はテーブルに腰を掛け、こう言った。

「ガキども、すぐに貴様らは死ぬんだ。だが、その次は俺たちだ。」

酔いが回ったムースフェルトの言葉で私の仮説は確証された。迫害される者も処刑する者も共に死ぬことになった。

私は、この親衛隊員にラムを入れた暖かい紅茶を出した。彼の好物なので、さらに注ぎ足した。彼はテーブルに着き、失われた時をかき集めるかのように、空襲で死んだ妻のこと、そしてロシア戦線で倒れた息子のことを話し始めた。

彼は断言した。「もう終わりだ。ロシア軍はアウシュヴィッツから四〇^{マイル}の所にいる。ドイツ軍は総崩れだ。みんな、国境地帯から逃げたがっているのさ。」

この親衛隊員の言葉はかすかな希望を揺り起こした。「どんなことがあるとも、ひよっとすれば生き残ることができるかも……。」

(58) 正しくは一〇月七日。

三六

一九四五年一月一日、私たちは期待と不安の中で年賀を交わした。元旦。見渡す限り、雪だった。すべてが白い。死体焼却場の庭を少し散歩しようと思つて表に出た。エンジン音で静寂が破られた。とても大きな茶色の有蓋トラックが死体焼却場の庭に入ってきた。それは強制収容所の囚人を移送するためのトラックで、囚人たちは「茶色のトニー」と呼んでいた。

高級将校が降りた。誰だか分かったので、規則通りに挨拶をした。親衛隊医官のドクター・フリッツ・クライン少佐⁽⁵⁹⁾である。アウシュヴィッツの血に飢えた屠殺人の一人でもあった。基幹収容所（アウシュヴィッツ第一強制収容所）の一一号棟は収容所内の刑務所で、新しい一〇〇人の犠牲者はそこから移送されてきた。急いで駆けつけてきたムースフェルト軍曹に、「新年の仕事を持ってきてやった。」とドクター・クラインは言った。ムースフェルトは立っていられないくらい酩酊していた。彼は大晦日の夜、本当に屋根に登ったが、きつと風変わりなやり方で酔いを覚ましたのである。しかめっ面から、元旦早々の血なまぐさい仕事を面白く思っていないことが窺われる。

一〇〇人のポーランド人は、死ぬためにここに来た。親衛隊の監視兵は彼らを炉室の横の部屋に連れて行き、大声で「すぐに服を脱げ。」と叫んだ。その間、ドクター・クラインはムースフェルトと一緒に庭をぶらついていた。有罪判決を受けた囚人と話すために、私は建屋へと急いだ。

クラクフから来た男性が言うことには、親戚を一晚泊めたところ、ゲシュタポがパルチザンを匿^{かくま}ったとして彼を逮捕し、軍法会議にかけた。彼は一一号棟で判決を待っていたが、ここに連れ

てこられたのはシャワーを浴びるためであり、その後、全員が重労働へと送られると思ひ込んでいた。この気の毒な人は、特別の建物にいるという簡単な事実が死刑宣告を意味することに気づいていない。誰もそのことを言わないから無理もない。

有罪判決を受けた別の男性は、物価をつり上げた廉^{かど}で投獄された。配給票なしでバターを五〇〇g購入したというのが唯一の犯罪である。三番目の男性は、不注意にも警戒区域に迷い込んでしまった。パルチザンのスパイ容疑で逮捕された。他に話した人からも似たような話を聞いた。軽微な違反と実体のない嫌疑。

今はゾンダーコマンドがないので、親衛隊員が犠牲者をムースフェルトの所に連れて行かなければならない。

また、エンジン音がした。「茶色のトニー」が新しい犠牲者を乗せて戻ってきた。今度は、立派な身なりの女性が一〇〇人トラックから降りてきた。全員ポーランド人で、あの部屋に入って衣服を脱ぐよう命令された。一人ずつ連れ出され、射殺された。まったく取るに足らない違反の代償を生命で支払ったのだ。

死体の焼却を始めた親衛隊員が、作業に必要なゴム手袋を取りに私のところに来た。二〇〇人の犠牲者全員の死亡を確認して、ドクター・クラインは立ち去った。

親衛隊員によれば、一一月一七日付の布告とこの日の処刑との間には齟齬^{そご}はない。今日は、軍法会議の判決を執行しただけである⁽⁶⁰⁾。またしても大量殺人。合法的執行だそうだ。

(59) フリッツ・クライン、一八八八年一月二四日、ツァイデン生まれ
「ルーミア中央部のトランシルバニア地方の一都市」。医師。一九四三年
二月から一九四五年一月までアウシュヴィッツに勤務。最終階級は中尉。
ベルゲン・ベルゼン裁判で死刑判決、一九四五年二月二三日、死刑執行。
(60) この二つのグループに死刑を宣告したのは、カトヴィツェから
出張して来たゲシュタポ将校で構成された軍法会議である。

三七

しばらくの間は何も起こらなかった。毎日が単調に過ぎていった。ドクター・メンゲレがここからいなくなつたというニュースがあるだけだ⁽⁵⁸⁾。強制収容所、と言つても実際には労働収容所であるが、新しい主任医官が赴任してきた。年明けから強制収容所は正式に労働収容所になつたのである⁽⁵⁹⁾。すべてが崩壊した。

一月一日、新聞を読んでロシア軍の攻撃が始まつたことを知った。部屋の窓ガラスが爆音で震えた。前線が前よりも近づいている。

一月一七日、疲れていたが早めにベッドに入り、心地よく暖かいコックス・ストーブのお陰ですぐに寝入った。真夜中ごろに違う。突然の大爆発、機関銃の発射音、まばゆい閃光で目が覚めた。

ドアがバタンと閉まる音、そして廊下を走って行く重い足音が聞こえた。私はベッドから飛び起きて、何が起つたかを一生懸命に見極めようとした。ドアを開けて廊下に出ると、炉室には電気が点き親衛隊員宿舎に通ずるドアが大きく開いているのが見えた。監視兵が全員、逃亡しようだ。

死体焼却場の、オーク材でできた重い扉も開いていたが、監視兵の姿は見えない。すぐに監視塔を見やつた。ここに来て八ヶ月になるが、無人の監視塔は初めてだ。

急いで部屋に戻り仲間を掛け、服を着て出発の準備をした。親衛隊は逃亡した。毎日、毎時間、八ヶ月の間、死の恐怖で怯えたこの場所に、これ以上留まっていることはできない。親衛隊の後衛が収容所に入つてこないとは言えないので、ここでロシア軍

を待っているわけにはゆかない。親衛隊が私たちを発見したら、即座に射殺することは確実である。

身支度をした。上等の防寒服、ジャンパー、冬用のコートを着、そして氷点下一八度の中で最も必要とする上等のブーツを履いた。私たちはそれぞれ、肉の缶詰一詰をもち、ポケットには医薬品とタバコを入れた。

再び自由を取り戻すことができるという幸せを感じながら、ここを出る準備をした。目指すは、この死体焼却場から二⁽⁶⁰⁾の所にあるビルケナウ強制収容所である⁽⁶¹⁾。地平線が朱に染まつた。おそらく炎上しているであろう。

私たちは炉室を通り抜け、開いている倉庫の扉を抜けて外に出た。倉庫には、逃亡する親衛隊がこじ開けた箱があり、中にはまだ金が残っていた。略奪品のごく一部しか持ち出せなかつたのである。そこから何かを取って行こうとは、私たちは夢にも考えなかつた。私たちは生きるために走っているのであつて、そのような貴重品には相対的な価値しかないことを知っている。重要なことは、自由になることである。

ゲートを通り抜けたが、止める者はいない。信じられないほどの変わりようである。ブジェジнка村の、雪に覆われた林を抜けることにした。何百万もの人々が死に向かつて歩いた、あの道を

(61) これはそうではない。アウシュヴィッツの収容所は、公式には最後まで「強制収容所」であつた。「労働収容所」という名称は、アウシュヴィッツ強制収容所の付属収容所にたいして使われた。ただし、現実的には、これらの収容所は、複合施設としての強制収容所を構成する必要不可欠な部分であつた。

(62) 実際には、第四(五)死体焼却場は右「北」側にある。最もありそうなのは、ニスリがビルケナウ強制収容所の正門「死の門」を目指したということである。

歩いた。雪の下になつている線路を通り、ランプを通つた。ここで、何百万もの犠牲者が貨車から降りた。選別されて左の列に入る者と右の列に入る者が別れを告げたのが、ここだ。右側の人々も死ぬのは時間の問題でしかなかった。最終的には全員死ぬ運命だった。

ビルケナウが炎上している⁶³。収容所のすべての記録を保管している衛兵詰所も司令部も燃えている⁶⁴。黒っぽい塊に見える群衆が正門「死の門」の前に立っていた。それは、行進の命令を待って並んでいる囚人の列だった。三〇〇〇人くらいは、いかに違いない⁶⁵。ためらうことなく、私たちはその列に入ることにした。私はこれが最善の策だと考えた。仲間もこれに賛成した。群衆に紛れ込めば誰も見つけることはできないだろう。私たちはもうゾンダーコマンドの作業員ではなくなつた。第三帝国が犯した犯罪の秘密を握り、その面が割れた者でもなくなり、もう死刑判決が下されることはない。私たちは長蛇の列をつくつて行進する一般囚人になつた。

誰もが逃走した。親衛隊が私たちを長い時間、追跡することはできないだろう。二日か三日経てば、ロシア軍が追いつくはずだ。そうなれば途中で私たちを解放せざるを得なくなるだろう。前線が流動的な状態にある中では、他の囚人たちと一緒にいるのが一番良い。

深夜一時くらいに、最後の親衛隊が収容所を出た。彼らは、正門横の衛兵詰所の中から収容所の明かりをすべて消した。門が最後に閉められ、今やヨーロッパ最大の墓地となつたビルケナウは暗闇に包まれた。私はもう一度、バラックと有刺鉄線からなる収容所をよく見て、何百万もの墓に告別の挨拶をした。

私たちは親衛隊の分遣隊に囲まれて行進し始めた。すぐに新しい仲間とこの日の出来事について議論し、明日がどうなるかを予

想した。親衛隊は目的地まで私たちを連れて行けるのだろうか、それとも途中のどこかで私たちを放棄するのだろうか。

五時も行かないうちに、左側から機関銃からの攻撃を受けた。追いついたロシア軍の前衛部隊が、私たちの行列をドイツ軍と見間違えて、機関銃数丁と軽戦車一両で攻撃してきた。親衛隊は地面に伏せると命令し、反撃して激しい銃撃戦が続いた⁶⁶。そして静かになつた。

(63) 収容所から脱兎のごとく逃亡するとき、親衛隊は犠牲者から略奪した私物を整理保管している三〇棟のバラックに放火した。この倉庫は、第二(三)死体焼却場と第三(四)死体焼却場の間にあるB II g 収容区(いわゆる「カナダ」)にあつた。

(64) 注63で述べた三〇棟のバラックの他に、親衛隊は死体焼却場とガス室を爆破した。それ以外の建物は破壊されていないが、収容所の至る所で公文書が焼却され、告発証拠が廃棄された。それにもかかわらず、収容所の記録が一部、残存している。

(65) 一九四五年一月一七日「死の行進」が始まった日。現在で、アウシュヴィッツの様々な収容所と付属収容所には成人男性、成人女性、子ども、合わせて六万五〇一二人の囚人がいた。その中には、ビルケナウの男性収容所にいた四四七三人「女性収容所には一万三八一人」が含まれている「アウシュヴィッツ基幹収容所には男性囚人一万三〇人、女性囚人六一九六人」。他の囚人と同じく、これらの囚人も一月一日にはビルケナウ強制収容所から「南西」六三詩のところにあるウオジスワフ・シロンスキを目標した。一九四五年一月二七日、アウシュヴィッツはソ連軍によつて解放された「生存者は、アウシュヴィッツ一二〇〇人、ビルケナウ五八〇〇人(うち女性四〇〇〇人)」。

(66) この事実は他の囚人の証言でも確認されている。この事件は、グラ「プロトワフの北西約六九詩を流れるヴィスワ川に架かる橋」の手前で起こつた。しかし、銃弾が囚人の頭の上を掠めただけだという証言もある。一九四五年一月一日にはロシア軍はまだクラクフに留まっていたから、最もありそうなのは親衛隊とバルチザンとの交戦である。



グラビア 30 アルター・ファインシルバー (スタニスワフ・ヤンコフスキー)

1942年～1944年のゾンダーコマンド。アウシュヴィッツからの退避 [[死の行進]] の途中のどこかで脱走し、戦後はパリに住む。1985年にアウシュヴィッツ第1強制収容所(基幹収容所)でリディア・フォリキアルツが撮影。

周りが明るくなってきた。夜通し歩いて一五^分進んだ。路上の雪は、先に歩いた人たちの足に踏まれて踏み固められていた。ボウル、毛布、木靴があちこちに散らばっていた。捨てられた物から判断するに、女性囚人の列がこの道を進んだに違いない。

数^分進んで、先行の隊列のことが少し分かってきた。四〇^分か五〇^分おきに、顔を血まみれにして側溝に横たわっている女性の死体を見たからだ。そのようなことは、その後の道中でも続いた。死体、死体、死体。五〇歩ごとに、死体があった。歩き続ける体力がなくなつて遅れた人は、みな射殺された。親衛隊は、一人も生きたまま解き放つたと命令されていたのである。これは、けつして穏やかな話ではない。死体の列が果てしなく続いていた。私たちは歩調を早め、生きるために行進を続けた。

私たちの隊列では初めての銃声を聞いた。囚人仲間の二人が道ばたに留まった。彼らは歩くことができず座り込んだ。そして撃たれた。それから数分おきに銃声が聞こえた。

正午にプシュチナ「ポーランド南部の町」に着いて、初めて休憩をとった。サッカー・グラウンドで一時間過ごした。食料をもっている人は、空腹を満たそうとした。私たちはタバコを吸って力を取り戻し、また雪道を歩き始めた。

行進は五日間続き、ようやくウオジスワフ・シロンスキの駅に着いた。食料も水もなく野外で寝て、六〇^分以上を歩いた。駅に着くまでには、囚人の隊列は二〇〇〇人に減っていた。およそ六〇〇人が途中で射殺された。石炭運搬用の無蓋車が私たちを待つプラットホームに停車しているのを見て、とても安心した。

すぐに貨車に乗せられたが、移送列車が発するまで、一晩、待たなければならなかった。この五日間の旅で、不幸な仲間がどれだけ凍死したかは数えていないが、最終的にマウトハウゼン強制収容所「オーストリア中部の都市、リンツの東方二〇^分」にた

どりで着いたときには、わずか一五〇〇人だけになっていた。旅をまっとうできなかつた五〇〇人の中には、きつと脱走の機会を捉えた人もいたに違いない。

(二八) スタニスワヴァ・ラフワウォワ(元囚人)の証言によれば、メンゲレの逃亡は一九四五年一月一六日とされる(Czech. Kalendarium, s. 968)には、この日、「強制収容所医官メンゲレは、B II f 収容区の実験室を破壊し、双子、低身長症、身体障がい者にかんする人体実験「資料」を安全に持ち出した。」とある。

三八

暗い花崗岩の壁で取り囲まれたマウトハウゼン強制収容所は、古代の城郭のようにマウトハウゼン市街を見下ろす丘の上に立っていた。そこが私たちの終着駅であった。この絶滅収容所は何十万個もの花崗岩のブロックでできていた。高い小塔と壁の開口部から突き出た大砲は、はるか彼方からでも見えて、この要塞の特徴を表している。時が過ぎて花崗岩が緑青ろくしょうのような青みを帯びてくるならば、えも言われぬ想像をかき立てることであろう。しかし、白く輝くこの要塞は、辺りの黒っぽい森にそぐわない。この城は最近建てられたばかりだから、石がまだ白い。第三帝国がここに強制収容所を建てることに決めたのは、フランスが敗北した後のことである。それを建設したのは、スペインの自由のため闘った元兵士数千人とドイツのユダヤ人数万人である。彼らはマウトハウゼンの石切場で働かされ、花崗岩のブロックを切り出し、それを担いで収容所までの岩山を登った三五。粗末なバラツクの周りに花崗岩の壁を建てたのは、この人たちだった。彼らにはすでに死刑判決が下っていたが、その前に、自分たちへの拷問と処刑の場を作るといふ、想像を絶する苦痛に苦しまなければならなかった。そして、みんな死んでしまった。

もちろん、そのときからこの収容所が空になったことはない。数千人のユーゴスラビア軍の兵士がここに連れてこられた。占領下の全ヨーロッパからのレジスタンスの闘士しかり、死刑となつた数万人のユダヤ人しかりである。無人となるバラックもあるが、三日と続いたことがない。死の順番を待つ、さらに多くの囚人で、すぐに一杯になった。

行進で疲れ果て骨の髄まで冷え切つた私たちは、雪道をノロノ

口と歩いて行った。わずかばかりの力しか残っていないが、強制収容所のゲートを通り抜けて夕方の薄明かりの中を点呼広場に集合した。

仲間を探した。解剖室の助手だったフィッシュャーが行方不明だ。最後に見たのはプシュチナ「ポーランド南部の都市」で、彼は雪の上に横たわっていた。変わり果てた顔は死が近いことを示していた。五〇歳の彼は最後の五年間を強制収容所で過ごしたが、長距離の行進と凍てつく寒さでは身体がもつまい。

ニースの若い医師ドクター・ケルナーはすっかり疲れていたが、回復の見込みはある。それにたいして、准教授のデネス・ゲレグは病気が最終段階に来ていた。謔妄状態を繰り返し返し、死体焼却場にいたときよりもかなり頻繁にその症状が見られるようになった。あの頃でも、病気を隠しておくことには問題があった。彼とドクター・メンゲレが顔を合わせることはないように、私はあらゆる手を尽くした。ムースフェルトは働きの監視人だったので、この潜在的な処刑人から弱々しいデネスを隔離し続けなければならなかった。あの状態で見つければ、デネスは一分とは生きていれなかったであろう。彼はこのことを知っており、まだ死体焼却場にいたとき、私に遺言を託した。

「ミックローシユ、君は意志が強いからきつと帰られるよ。でも、ぼくは生きて自由を見ることはないと思う。妻と娘はガス室で死んだ。この目で見たから確かだ。ケシエグ「ハンガリー西部。勤務地ソンバトヘイの北方」の修道院に息子を匿^{かくま}ってもらっている。名前はサンドル、一二歳だ。生きて帰れたら、息子を養子にしてくれ。もうじき、ぼくは死ぬ。これが遺言だ。」

私はそうすると約束した。

幸いなことに状況が変わり、今、私たちは死を待つだけの場から遠く離れている。ところが、長旅の末に、希望をもってもう一

度未来に目を向けることができた解放の前夜に、いくら何でも死にそうになるとは思いもよらなかった。これこそ、本当の悲劇だ。点呼の後で私たちは全員、浴場への狭い道を降り、様々な収容所から来た囚人と合流した。彼らもまた、浴場に入るのを待っていた。おそらく一万人はいて、すし詰め状態だった。肌を刺す冷たい風が吹いていた。アルプスの麓^{ふもと}にある小さな山の頂上^{たかね}にいたから、吹く風も過酷だった。一度に四〇人が浴場に入った。それが、一回に入れる人数だった。暗算してみると、全員に順番が回るのに三日もかかることが分かった。収容所で消防隊員として雇われたドイツ帝国国民の刑事犯は、親衛隊の最も忠実な従僕でもあった。そんな奴らが囚人たちに秩序を守らせ浴場に誘導している。アーリア人ファーストでだ。残りは三日、待たなければならぬ。あのような長旅の後ではシャワーは生死にかかわる。シャワーが済んで、ようやく囚人にはバラックが割り当てられ、給食名簿に名前が載るからだ。一〇日間の殺人的な旅をしてきた囚人は、浴場にたどり着くまでの間、空腹で疲れた上に寒空に野晒^{のぞ}しのままで立っていないてはならない。立っていられる限り、そして目を開けていられる限り、囚人は待たなければならぬ。力が尽きれば、雪の上に倒れて起き上がることはない。私の周りには三〇〇人以上の囚人は、雪の上に横たわり永遠の眠りについている。それに気を止める者は誰もいない。ここでは、誰もが自分の生存を賭けて闘っているが、その闘いがこれ以上はできないところまで来た。

かわいそうなデネスはメガネをなくし、意味をなさぬ、おかしなことブツブツと言いながら、帽子も被^{かぶ}らずに当てもなく人混みの中を彷徨^{さまよ}っている。私は彼の腕を取って、浴場のほうに引きずって行った。このような状況では暖かいシャワーは生気を与えらるから、何とかして暖かいお湯を浴びさせようと思ったのだ。し

かし、そう歩かないうちに人混みの中でデネスを見失い、別々になつてしまった。彼の名を呼んだが、無駄だった。吠えるような風の音で、自分の声さえもほとんど聞こえなかった。

「危険はますますはつきりと迫ってきた。残る力を振り絞り、浴場へと向かう群衆の中に入っていた。とうとう最前列になった。親衛隊員数名と太いゴムの棍棒をもった数名の見張りが囚人のグループの前に立っていた。このグループは次に浴場に入る人たちで、すべてアーリア人であった。自己保存本能が働いて、私は群衆の中から飛び出し軍曹に近づき、毅然とこう言った。

「軍曹殿、私はアウシュヴィッツからの移送列車に勤務していた医師です。浴場に入れてください。お願いします。」

親衛隊員は私の顔を見た。おそらく身なりとかきつぱりとした態度が印象づけたのではないか。私のドイツ語が流暢りゅうじやうだったからかもしれない。私には分からないが、浴場の入口階段りゅうじやうに立っていた監視兵を振り向いて、「この医者を入れる。」と言った。

助かった。数分も経たないうちに、温かいお湯のお陰で、寒さでかじかんだ手足に感覚が戻った。一〇日間の震えるような寒さの後で暖かい場所にあったのは、これが初めてだった。お湯は私の身体と神経を癒やしてくれた。私は私を取り戻した。

私たちの衣服は汚染されていると見られ、脱衣場に置いて行くことになった。遺憾ながら、暖かいコート、揃いの上下、ジャンパーを手放さなければならなくなったが、ブーツだけは手元に残った。強制収容所で良いブーツがあるということは、生命を長らせるための秘訣の半分に匹敵する。私はブーツを履いて、身体を洗ったばかりの他の囚人と一緒に裸のまま浴場を出たが、次のグループが終わるまで、待っていないければならなかった。バラックには所定の人数になってから囚人を収容するからである。暖かい風呂の後で、寒風吹きすさぶ氷点下一八度の中を三〇分も裸で

立たせておくのは、殺すためであろう。

ついに四〇人ずつのグループが所定の人数に達し一緒になって、移動し始めた。親衛隊の監視兵が走れと号令した。五〇〇びやく先にある検疫収容所の二三号棟に着いた。その入り口には、「刑事犯を示す」緑色の三角のワッペンを付けた乱暴者が一人立っていた。ブロック長である。入室するとき、彼は一塊かたまりのパンの四分の一ずつを囚人に手渡した。彼の側に立っていた役付囚人が缶から肉のような物をスプーンに山盛りに盛って、それをパンにベタベタと塗り、暖かい黒っぽいコーヒート二五〇ccをカップに注そそいだ。

一〇日間、何も口にしていなかったもので、これは王様にふさわしいごちそうだった。あつという間に全部たிரけて、この上ない幸せを感じながら休む場所を探し、バラックの隅に行つた。隅すみこの利点は、寝ようとするとき、他の囚人が前後を歩かないことである。検疫収容所にはベッドがなかったもので、もちろんのことだがフロアに寝なければならぬ。それでも起床の合図があるまで、ぐっすり眠った。散歩しながら、友人たちのことを考えた。彼らがまだ生きているならば、今もシャワーを待っていることだろう。

バラックの床に座ったり、その周りを散歩したりして、三日間過ごした。食事は我慢できるものであり、困難な旅行をした後のひと休みというところだ。

三日目になって、親衛隊の将校が収容所事務室の誰かを引き連れバラックに入ってきて、アウシュヴィッツの死体焼却場で作業していた者は前に出ると言った。名簿をもっているのだろうか。とても効率的に組織化されている彼らのことだから、もつともらしく見せかけているだけに思われた。私は、それが策略だと気づいた。彼らはアウシュヴィッツの死体焼却場の秘密を知っている者を見つけたがっている。名簿をもっているなら、ただ囚

人番号を読み上げれば済むはずだ。このことから、私が何者かは、まだばれていないと思った。長い緊張の末に、親衛隊の将校が出て行った。勝った。生命を勝ち取ったが、それが最初ではなかった。

その夜、縞模様の囚人服を着て、マウトハウゼンの街にある駅まで降りていった。七〇〇人の囚人は、ドナウ川沿いのメルク「ウィーンの西約九〇哩、リンツの東一〇〇哩」にある強制収容所行きの列車に乗せられたが、このときは屋根のある客車に乗り、椅子に座ることができた。わずか三時間の旅だった。

メルクの収容所も丘の上であり、かつてその建物は工兵隊の宿舎だった。四方を壁に囲まれた巨大な建物には一万五〇〇〇人の囚人がいた。周りの景色が良かったから、難しい状況にも少しは耐えることができた。見上げると、岩だらけの丘の上に壮麗なバロック様式の修道院が建ち、眼下の溪谷には蛇行する祖国の川、ドナウ川が流れていた。家にいるような気がした。

(二一九) 石切場から登る一八六段の階段は「死の階段」と言われた。

三九

一九四五年度の春は早かった。

四月の始め、メルクの収容所の有刺鉄線の囲いの向こうでは木々が緑になり始めた。下方を流れるドナウ川の岸にはまだ雪が残っていたが、雑草の緑が次第に広がってきた。新しい強制収容所では佳い日も悪い日も八週間を過ごした。私は疲れて衰弱している。今に解放されるという希望だけが、折れそうな心を支えている。

ここでもすべてが崩壊した。私には、第三帝国の断末魔の苦しみが見える。果てしない隊列をなす敗走兵が火の燻る廢墟と化したドイツ国内へと退却している。何百艘もの川船や艇が雪解けで増水したドナウ川の上流へと避難民を運んでいる。

永遠に続くものは何もない。……千年王国と言われた第三帝国が一夜にして消えた。世界の支配をもくろんだドイツ民族の優秀性への信仰は忘れ去られ、苦い幻滅に代わった。解放を待ち望んでいるヨーロッパの人々は、もはや死の危険に脅かされてはいない。街が略奪されることもなければ、首都が地図から「消される」こともない。腕に囚人番号を彫られることもない。故郷から移送されることもなければ、髑髏の徽章が付いた帽子を被った親衛隊と特殊訓練を受けた軍用犬に監視されて奴隷船に乗ることもない。第三帝国は世界の舞台から退場しつつある。放火マニアのように第三帝国は世界に火を放つことを欲し、最後は自分自身その火の中で滅びることを望んだ。あの伍長「ヒトラーのこと、第一次世界大戦時の階級」の耳障りな声で、全世界に向けてラジオを通して発せられた「世界に冠たるドイツ」はもう聞かれなくなった。自由を愛する諸国民が傲慢な第三帝国を打ち負かし、新

しい生活へと舵が切られた。

一九四五年四月七日、メルク強制収容所の境界線上の支柱に付けられたアーク灯が消えた。今いる場所も暗闇と静寂の中にあつた。全員が連れ出され、門が閉められた。七〇〇〇人の囚人がドイツのさらに内部へと連行された。最初は川船に乗り、その次は難民で混んだ道を歩いた。七日間、雪に覆われた山を尾根伝いに進み、新しい目的地に到着した。

エーベンゼー「リンツの南方九〇哩」の強制収容所は、四番目の収容所である。ここでも最初の課業は点呼であるが、終わるまでに一時間かかった。第二の課業は風呂、第三はゴムの棍棒をもった凶悪犯にせき立てられて入った、悪臭が鼻を突くバラックでの検疫である。私は、この課業を全部やったが、果てしなく続く点呼のときは、始めは冷たい風で身体がかじかみ、その次は薄っぺらな囚人服を通してしみ込んでくる冷たい雨で身体が硬直した。

はらわたが煮えくりかえる。解放されるのは時間の問題に過ぎないかもしれないが、私たちは一抹の不安を抱えて起こりうる事態を待っていた。結局は、全員が大量死で終わるということもあり得るからである。解放者が来る前に、全員絶滅という可能性もある。強制収容所と無法地帯を一二ヶ月の間生き抜いてきたのに、いかにも第三帝国お定まりのスタイルで波瀾万丈の人生が終わることになるかもしれない。

しかし、そうはならなかった。

一九四五年五月五日、エーベンゼーの監視塔に白旗が掲揚された。それは、明るい春の日差しを受けて輝いていた。終わったのだ。ドイツ軍は武器を捨てた。九時頃、アメリカ軍の小型戦車が二両到着し、そこから三人の兵士が降りてきて収容所を接收した¹¹⁰。

私たちは自由になった。……

(三〇) エーベンゼー現代史博物館／エーベンゼー強制収容所記念館 (Zeitschliche Museum Ebensee/KZ-Gedenkstätte Ebensee) のHPによれば、アメリカ軍が解放したのは一九四五年五月六日である。ただし、前日の五月五日には、親衛隊のほとんどが逃亡し収容所には年配の警備兵しか残っておらず、実質的には親衛隊の監視下にはなかったとみてよからう。(https://memorial-ebensee.at/index.php/en/history, accessed on Oct. 1, 2022.)

おわりに

超法規的に拘束された私たちは、新たに見つけた自由のおかげで自分の足で歩くことができるようになった。有刺鉄線の囲いを出ると、限りなく続く広がりを目の前に開けていた。私たちは残っていた最後の力を振り絞った。身も心も病んで、私は自宅に向かった。通り過ぎる街からも分かったが、旅はそうたやすいものではなかった。生氣溢れるというのからはほど遠く、あるのはどこでも焼けただれた廃墟と集団墓地だけだった。この先には何があるかを考えると怖くなった。家は廃墟となり、両親、最愛の妻、子、妹が迎えてくれることはあるまい。

屈辱と悲痛、死体焼却場と燃え上がる死体焼却溝の恐怖、生ける屍となったゾンダーコマンドとともに過ごした八ヶ月、これらがすべて善悪の感覚を鈍くしてしまった。静養する必要がある。元氣を取り戻さなければならぬ。しかし、何のために……。

私は病氣だ。血に染まった過去が、病んだ私の心臓を打つ。我が眼は、何十万人もの人たちがガス室に入るのを見た。野外の死体焼却場で人が焼かれているのを見た。天才を自認する狂信的なあの男の命令で、私は何百人もの犠牲者の死体を切り開かなければならなかった。素っ頓狂な似而非科学的理論のために数百万の犠牲者の死を厭わず利用した男、そのために私は働いた。ドクター・メンゲレがバクテリアを培養するために、私は若い成人女性から肉片を切り取らなければならなかった。身体障がい者や双子の骨を第三帝国の博物館に展示し、「劣等民族」を絶滅させることの必要性を次世代の人たちに説得するために、私は死体を塩化カルシウム溶液に入れたり、大釜で煮沸したりした。親衛隊の処刑部隊の前で、二回、死に直面した。一三〇〇人の仲間の血

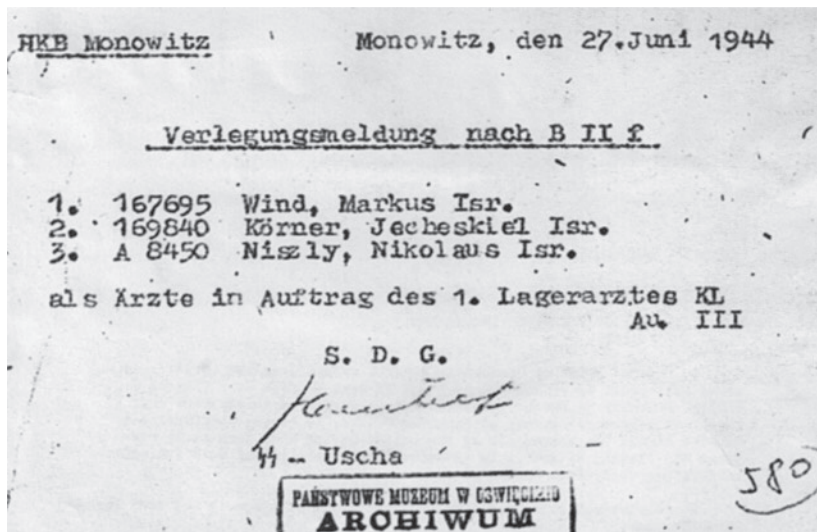
にまみれた死体を見たが、生き証人は私だけだ。私は、雪の中を、そして身を切るような寒さの中を何百回も旅した。

その旅の何と長かったことか。自宅にいても居場所がない。目的もなく、静かな部屋の中をうろついている。過去の虐殺と深い絶望の記憶を抱えて、私は悲嘆に暮れている。通りすがりの人の中に知り合いの顔を見つけたとき、その一瞬だけは元氣になるが、過去の自分の影が当て所もなく街を彷徨っている。

過ぎ去った月日を悄然と数えて、静かに耐えている。もう一〇月だ。解放されて半年が過ぎた。ある寒い秋の午後、傷みを和らげようと思いストーブに当たっていると、突然ドアのベルが鳴った。玄関を開けると、妻と娘がいた。二人は、あの恐ろしいベルゲン・ベルゼン強制収容所から解放されて帰ってきた。あそこからだ。二人とも元氣だった。多くを話さなかったが、少しの言葉は言いたいことのほとんどすべてを語っていた。二人は涙を流し、何時間も泣いていた。私にはみんな分かる。私よりも二人を理解できる人が他にいるだろうか。

とうとう人生の目的を見つけた。助けたい人がいる。また働きたい。もう一度、人の役に立ちたい。それがいい。

しかし、死体にメスを入れることはけっしてしない。二度としない。……



グラビア 31 ビルケナウ BII f 収容区への異動 (1944年6月27日付)

ミクローシュ・ニスリを含む囚人医師3人にたいするモノヴィッツ収容所（アウシュヴィッツ第3収容所）からビルケナウ収容所（アウシュヴィッツ第2収容所）BII f 収容区への異動を示す文書。ミクローシュ・ニスリは A8450 番ニコラウス・イスラエル・ニスリ（A8450 Niszly, Nikolaus Isr.）となっている。「姓名の変更にかんする法律」（1938年8月17日制定，1940年1月1日施行）により，ユダヤ人が所定のリストに記載された以外のファースト・ネーム（非ユダヤの名前）を命名されている場合，男性にはイスラエル（Istraël），女性にはサラ（Sara）を追記することになった。“August 17,” by 1938 Projekt, <https://www.lbi.org/1938projekt/detail/sara-for-women-israel-for-men/>, accessed on December 23, 2022; “Law on Alteration of Family and Personal Names,” *Timeline of Events*, <https://www.ushmm.org/learn/timeline-of-events/1933-1938/law-on-alteration-of-family-and-personal-names>, accessed on the same day.

R E S T R I C T E D

OFFICE OF MILITARY GOVERNMENT FOR GERMANY (U.S.)
(Office of Chief of Counsel for War Crimes)
APO 696-A U.S. Army

AG 300.4
WG-10-233 (TDY-1181)

9 Oct 47

SUBJECT: Orders

TO : NYISZLI NICOLAUS (Roumanian)

1. Verbal order of Commanding General authorizing and inviting above named individual to proceed on or about 25 Sept 47 from Str. Vlahutz # 44 Oradea, Roumania to Nurnberg, Germany for a period of thirty (30) days to appear as Voluntary Witness at Nurnberg Trials, is hereby confirmed and made of record the exigencies of the matter having been such as to preclude the issuing of orders in advance. Upon completion of duty individual will return to Oradea, Roumania.

2. Individual will be reimbursed for travel expenses to and from Nurnberg, Germany.

3. \$7.00 per day in lieu of subsistence is authorized for travel outside Germany.

4. In lieu of witness fees, \$5.00 per diem will be paid witness while in Nurnberg.

5. TONT TUN 801-11 P 415-02, A 2182700 S 99-999. Travel by rail a/o motor transportation is authorized. Authority Ltr OMCUS dated 10 May 47, file AG 200.3

BY COMMAND OF MAJOR GENERAL HAYS:

DISTRIBUTION:
(Special)



Milton A. Sewell
MILTON A. SEWELL *MAJ*
Major, AGD
Asst Adj Gen.

(Receipts for transportation and other expenses will be turned in to the Office of Secretary General, Room 23e, Court House Nurnberg.)

グラビア 32 ニュルンベルク戦争犯罪裁判への出廷要請確認書
(1947年10月9日付)

1947年9月25日前後から30日間、証人として出廷するためのオラディア(ルーマニア)～ニュルンベルク(ドイツ)間の旅費、滞在費などの支給証明。ニュルンベルク滞在中にニスリは地元の新聞紙上に回想録を掲載した。



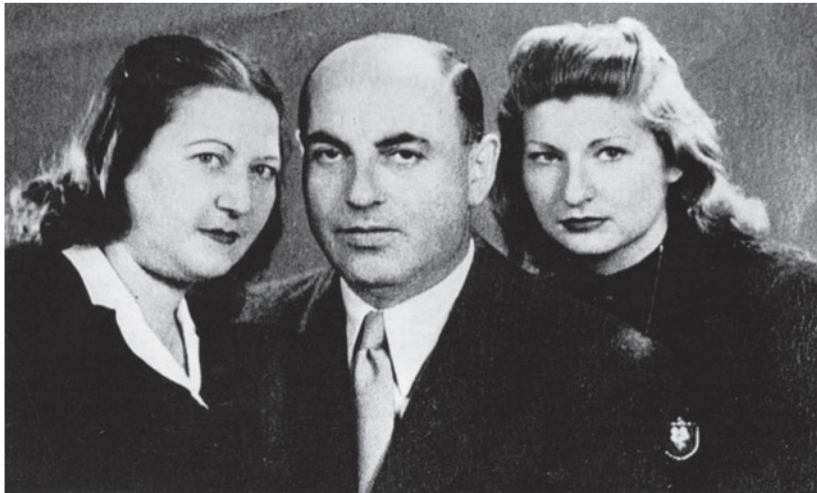
グラビア 35 家族写真(1)
左から、妻マルガレータ、娘
ツツアーナ、ミクローシュ。



グラビア 34 ミクローシュ・ニ
スリ(2)



グラビア 33 ミクローシュ・ニ
スリ(1)



グラビア 36 家族写真(2)
左から、妻マルガレータ、ミクローシュ、娘ツツアーナ。

記者あとがき

本書は、Miklos Nyiszli, *I was Doctor Mengele's Assistant: The Memoirs of an Auschwitz Physician*, Frap-Books, Oświęcim (Poland) 2010, xx+193p (ed. by Franciszek Piper, translated from Polish by Witold Zbirohowski-Kościa) の全訳である。

著者ミクローシ・ニスリ(一九〇一年六月一七日～一九五六年五月五日)は、一九四四年五月にアウシュヴィッツに移送されたハンガリーのユダヤ人で医師である。ニスリの略歴については本訳書冒頭でフランチシェク・ピーベルが述べるとおりであって、当初イー・ゲー・ファルベン社の合成ゴム工場があるアウシュヴィッツ第三収容所(モノヴィッツ強制収容所)に配属されたが、ニスリの豊かな法医学的知識と解剖医としての経験に注目したヨーゼフ・メンゲレは助手として手元に置くことにした。爾来、アウシュヴィッツからの「死の行進」(一九四五年一月)までのおよそ八ヶ月間、ニスリは囚人医師としてアウシュヴィッツ第二収容所(ビルケナウ強制収容所)の敷地内に解剖室を設置した第一(二)死体焼却場に配属された。そこは、「ユダヤ人問題の最終解決」の最終段階の、最大級の舞台と言っても過言ではなかった。そこでニスリは、大量虐殺と人体実験を目的とした。

本書は、ニスリの日撃証言であり、ホロコーストがどのような考へのもとで、どのように進められたかが具体的に述べられているが、それとともにアリア民族の繁殖促進と「劣等」とされた民族(主としてユダヤ人)の根絶やしを目的としたヒトラー「第三帝国」における人種政策の理念とその背景が明らかにされている。ニスリは、みずからの体験を歴史の中に位置づけることによって、「生きる権利をもつて生まれた者」と「生きる権利をも

たずに生まれた者」に、人間を二分する考へ方の根源を析出している。このような考へ方は、直截的に、あるいは形を変えてスマートにグロテスクに、いつもわれわれの身近にある。この意味で、ニスリの証言は、いつでもどこどこでもありうる思考様式の危うさに警鐘を鳴らしている。

ニスリの回想録は一九四六年にハンガリー語で出版され、そのタイトルは *Orvos voltam Auschwitzban* (私はアウシュヴィッツの医者だった) である。その後、様々な国で翻訳書が刊行された。戦争の記憶が鮮明だった頃に刊行された生還者の回想録としては、一九四七年に刊行された Viktor E. Frankl, *Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager* がある⁽¹⁾。同じ年の一九四七年には、Olga Lengyel, *Five Chinnys: Story of Auschwitz*⁽²⁾、および Primo Levy, *Se questo è un uomo*⁽³⁾ が刊行された。さらに、Gisella Perl, *I was a Doctor in Auschwitz*, 1948 もある⁽⁴⁾。これらが強制収容所の実態を明らかにする貴重な証言であることは言うまでもない。これにたいして、「死の天使」メンゲレが指揮した剖検において必要な

(1) V. E. Frankl, 『夜と霧』 ドイツ強制収容所の体験記録 霜山徳爾訳、みすず書房、一九六一年。

(2) オルガ・レンゲル 『アウシュヴィッツの5本の煙突』 金森誠也訳、筑摩書房『世界ノンフィクション全集28』、一九六二年。

(3) プリモ・レヴィ 『アウシュヴィッツは終わらない』 あるイタリア人生存者の考察 竹山博英訳、朝日選書一五二、一九八〇年、同『これが人間か(改訂完全版) アウシュヴィッツは終わらない』 竹山博英訳、朝日選書九〇五、二〇一七年。

(4) Republished by Lexington Books/The Rowman & Littlefield Publishing Group, Inc., Lanham etc., 2019. ただし、この一九四八年版の原著は二〇一六年二月一九日に The Internet Archive (非営利団体) が OpenSource として公開した (<https://archive.org/details/WasADoctorInAuschwitz/mode/2up>, accessed on October 8, 2021)。

作業を担当したニスリの回想録は強制収容所を内側から見た体験記であり、それは第三帝国が秘密にしておきたいこと、けつして外部にはもらしたくないことを内側から見た体験記である。この意味で、「秘密を握った者」(グライフ/キリアン)としてのニスリの回想録は異色である。

ニスリの回想録の英語版は、一九六〇年にティバー・クレマーとリチャード・シーバーが翻訳し、一九六二年にイギリスで出版された⁽⁵⁾。同一内容の訳書は、二〇一一年にアメリカでも出版されている⁽⁶⁾。さらに、二〇一二年には、ペンギン・モダーン・クラシックスの一冊としても刊行された。ただし、このペンギン・モダーン・クラシックス版では一九六二年英語版と二〇一一年英語版に収録されていたシーバーの前書きが削除され、新たにリチャード・J・エバンスが書き下ろした解説が収録されている⁽⁷⁾。ニスリ自身が執筆した回想録には、日付、親衛隊員の階級名称などについての記憶違いや殺害人数、死体焼却場の処理能力についての間違い、あるいは当時の強制収容所での伝聞情報や思い違いにもとづく叙述がある。上記の複数の英語版では、それらが訂正されないままになっている。ニスリがモノヴィッツからビルケナウに配属替となったことにも触れられていない(訳注七(9頁)、グラビア31(115頁))。

この訳書の底本は冒頭に掲げたが、ヴィトルド・ズビローホフスキー⁽⁸⁾が一部シーバー訳を採用しつつも、ポーランド語版⁽⁹⁾を独自に英訳し、オシフィエンチム(ポーランド)のフラップ・ブックス社から二〇一〇年に出版された新英語版である。これが前述の英語版と異なっているのは訳文だけではない。新英語版には、その編者であるフランシエック・ピーベルが選定した写真・資料三六点が掲載されるとともに、訂正や補足説明に当たった六六ヶ所の注記とニスリの略歴が記載されている。ピーベルは

アウシュヴィッツの犠牲者が一〇〇万人〜一一〇万人であり、そのうちの九〇%はユダヤ人であったことを明らかにするなどの業績を挙げたアウシュヴィッツビルケナウ国立博物館の元歴史部長である(本文原注2(5頁)参照)。このピーベルが執筆した注記を収めていることが、新英語版の特徴となっている。回想録については日付の間違いや執筆当時の噂の真偽を正し、可能な限り正確を期することが重要である。それによって回想録の迫真性が高まる。このことはニスリの回想録についても当てはまる。ギデオンのグライフとアンドレアス・キリアンは、ニスリの回想録を生存者からの聞き取りによって訂正することの必要性を指摘しているが⁽⁹⁾、そのとおりであろう。新英語版の注記はその役割を果たしている。ニスリの回想録のドイツ語版⁽¹⁰⁾には一四六ヶ所に及ぶ注記があって、その学術上の意義は高い。訳出に当たっては、旧英語版ならびにペンギン・クラシックス版に書き下ろし

(5) Miklós Nyiszli, *Auschwitz: A Doctor's Eye-witness Account* (アウシュヴィッツ―ある医師の目撃証言), Panther Books Ltd., London, 1962.

(6) Miklós Nyiszli, *Auschwitz: A Doctor's Eyewitness Account* (アウシュヴィッツ―ある医師の目撃証言), Arcade Publishing, New York, 2011.

(7) 同名、ただし、出版社と刊行年は Penguin Books Ltd., 2012.

(8) Miklós Nyiszli, *Byem asystentem doktora Mengele* (私はドクター・メンケレの助手だった), Oswiecim 2000.

(9) Gideon Greif and Andreas Kilian, "Significance, responsibility, challenge: Interviewing the Sonderkommand survivors," *Sonderkommand-Studien*, Sep. 6, 2011, in: <http://www.sonderkommand-studien.de/artikel.php?c=forschung/significance>, accessed on August 20, 2021.

(10) Miklós Nyiszli, *In Jenseits der Menschlichkeit: Ein Gerichtsmediziner in Auschwitz* (人間性の墓場―アウシュヴィッツの法医学者), Übersetzerin: Angélica Bihari, Bearbeitend der 2. Auflage: Andreas Kilian und Friedrich Heber, Karl Dietz Verlag, Berlin, 1992.

たエバンスの解説とともにドイツ語版を参考にしたが、一般読者の読みやすさを旨として新英訳版を底本とした。なお、底本では、グラビアは一括掲載されて、説明文等が添えられているものもあるが、訳出に当たっては、関連する本文の箇所配置し、適宜訳者による解説を付記した(末尾の地図と年表は訳者による)。

ここで、若干の訳語について述べておく。Rampe (ドイツ語)には、一般道路よりも高所にある高速道路の出入り口に至る傾斜路、建物前にある車寄せの斜道、あるいは荷役ホームなどの意味がある。ビルケナウ収容所では、貨車から降ろした移送者を左(ガス室直行)か右(収容)に「選別」する場所をRampeと言う。新英語版でもこれをrampと訳している。ビルケナウの平坦な場所で作られたrampは、移送列車を降車させてからの「選別」の場になったことから、本書では、初出のみ「降車場」の訳語を併記し、それ以降はただ「ランプ」とした。

crematoriumの本来の意味は「火葬場」である。「葬儀」「葬式」の日常的用法から明らかのように、一般には「葬」には故人への尊崇や哀悼が含意される。しかし、本書が明らかにしているように、強制収容所のcrematoriumは、そのような言葉の意味とは無縁であり、文字通り死体の焼却を効率的に即物的に遂行する場である。このことを勘案して、「(屋内)死体焼却場」と訳した。crematoriumだけでなく、野天の死体焼却場もある。これがpyre (火葬壇)あるいはditch (焼却溝)である。焼却施設が屋内にあるcrematoriumと区別して、これらには「野外(の)死体焼却場」の訳語を当てた。なお、crematoriumには、アウシュヴィッツ基幹収容所にあるものを第一とする番号系とビルケナウにある四ヶ所のみ番号系の二つがあるので、訳文ではこれを併記した。

Sonderkommando は、犠牲者が屋内・野外の死体焼却場に誘導されてから灰となつて処分されるまでの全過程で作業に当たる特

殊作業部隊のことである。最近では多くの英語文献でも、あえてこれをSpecial Squadとは訳さずに、ドイツ語をそのまま使用していること、また、この国でも「ゾンダーコマンド」の使用が珍しくないほどに一般化したことから、初出のみ「特殊作業部隊」の訳語を添え、以後は翻訳せずにカタカナ表記とした。

最後に、回想録の中でニスリは、仲間のゾンダーコマンドが密かに死体焼却場の実態を文書にして、焼却場の付近に埋めたことについて述べる。ムースフェルトの自宅(マンハイム)に送ったベッドの中に隠された同一の告発文書とともに、それはまだ発見されてはいない。しかし、別の文書が発見されたことは本書の注記(原注42(69頁))のとおりである。これらの文書の解説についてはNicholas Chare and Dominic Williams, *Matters of Testimony: Interpreting the Scrolls of Auschwitz*, New York & Oxford, Berghahn Books, 2016がある^[11]。さらにまた、右の著作で取り上げられているゾンダーコマンドのグラドフスキーの手書き文書のドイツ語版Salmen Gradowski, *Die Zerrnung: Aufzeichnungen eines Mitglieds des Sonderkommandos* (断章:ゾンダーコマンドの記録)、Herausgegeben von Andea Kalisky unter Mitarbeit von Andreas Kilian, Aus dem Jiddischen von Almut Seiffert und Miriam Trinh, Berlin: Shkarp Verlag/Jiddischer Verlag, 2019が刊行されているほか、その英語版Zalmen Gradowski, *From the Heart of Hell. Manuscripts of a Sonderkommando Prisoner, Found in Auschwitz* (地獄の真つただ中で:アウシュヴィッツで発見されたゾンダーコマンドの手書き文書), Oswiecim, Museum Auschwitz, 2021も発刊され、同年にはキ

[11] ニコラス・チェア/ドミニク・ウイリアムズ『アウシュヴィッツの巻物 証言資料』二階宗人訳、みすず書房、二〇一九年。

ンドル版(電子書籍)(Zalmen Gradowski, *From the Heart of Hell. Manuscripts of a Sonderkommando Prisoner, Found in Auschwitz*)も刊行された。ゾンダーコマンドが撮影した四枚の写真(グラビア25(52頁)はその一枚)にかんして、Georges Didi-Huberman, *Images malgré tout* (イメーじ、すべてに抗して), Paris, Les Éditions de Minuit, 2003も出版された⁽¹²⁾。なお、ニスリ以外のゾンダーコマンドの回想記としては、Shlomo Venezia, *Sonderkommando: Dans l'enfer des chambres à gaz, Paris 2007*がある⁽¹³⁾。これは、本書とともにゾンダーコマンドの「日常」を伝えている。また、二〇二〇年八月二六日には、『NHKスペシャル アウシュビッツ 死者たちの告白』の放映内容が文書化されて公開された⁽¹⁴⁾。ここに「死者」とは、「最終解決」の最前線にあつて死体焼却場周辺に密かにその実態を文書にして隠したゾンダーコマンドのことである。映像にかんして言えば、ニスリの回想録にもとづいて、二本の映画(『灰の記憶』(ティム・ブレイク・ネルソン監督) [The Grey Zone, directed by Tim Blake Nelson, 2001]と『サウルの息子』(ネメシュ・ラースロー監督) [Son of Saul, directed by László Nemes, 2015])が制作されていることを付言する。

新英語版を編集するに当たって貴重な写真を収集・厳選して掲載するとともに、詳細な脚注を執筆して、原著書を現代に蘇らせたフランチシエク・ピーベル氏(ポーランド)、ならびに原著者故ミクローシシュ・ニスリの孫に当たる著作権者モニカ・ライヒ氏(イスラエル)のお二人は、この国の厳しい出版事情に理解を示し、このような形で刊行を快諾してくださった。お礼申し上げます。さらにまた、ライヒ氏は、この国の、とりわけ若い世代の読者に向けて、メッセーじをお寄せくださった。重ねて御礼申し上げます。訳出に当たっては、小坂直人氏(北海学園大学名誉教授)から懇切丁寧なご教示を得た。併せてお礼申し上げます。

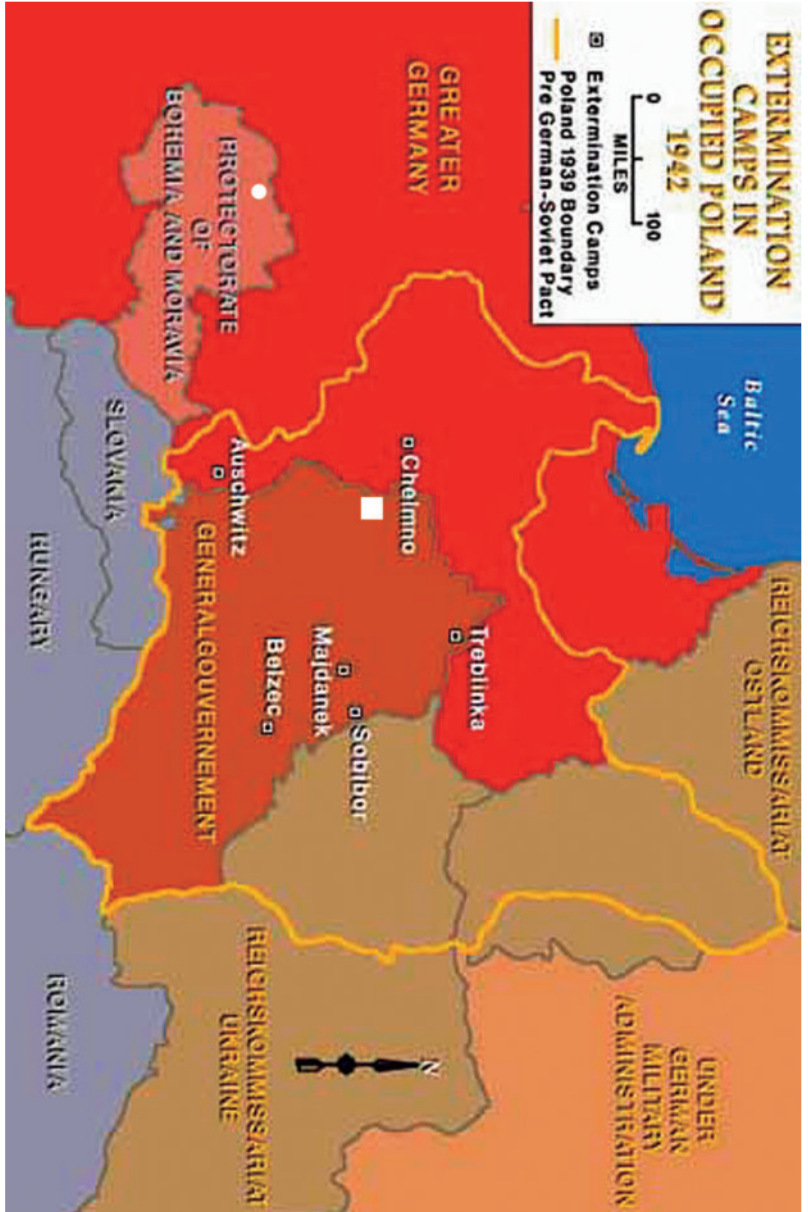
二〇二二年 二月

木村和範

(12) ジョルジュ・ディディューベルマン『イメージ、それでもなおアウシュビッツからもぎ取られた四枚の写真』橋本一径訳、平凡社、二〇〇六年。

(13) シュロモ・ヴェネツィア『私はガス室の「特殊任務」をしていた——知られざるアウシュビッツの悪夢』鳥取絹子訳、河出書房新社、二〇〇八年。

(14) <https://www.nhk.or.jp/special/plus/articles/20200825/index.html>, accessed on August 22, 2021.

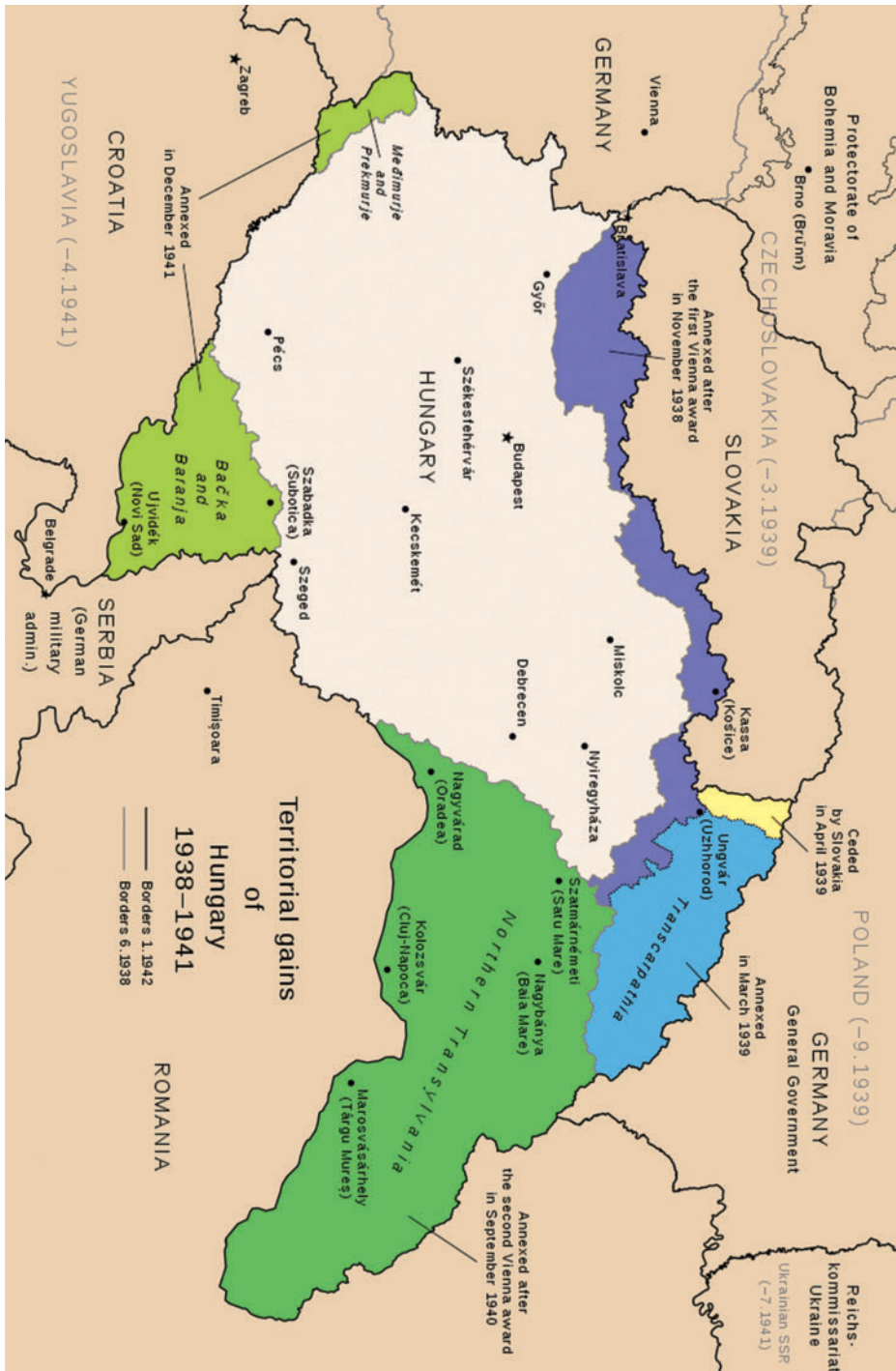


地図1 ポーランドにおける主要絶滅収容所 (1942年)

(注記) この地図には次のような解説が付けられている。「絶滅収容所とは、大量殺戮を行うために設置された殺人施設である。1941年から1945年にかけて、ナチス・ドイツは占領下のポーランド6ヶ所に絶滅収容所を設置した(ハウムノ、ベウゼツ、ソビボル、トリアリソカ、アウシュヴィッツ=ビルケナウ、マイダネク [ルブリソ])。アウシュヴィッツとマイダネクは、強制収容所と労働収容所、そして殺戮センターとしての機能を併せもっていた。これら6つの絶滅収容所で『最終解決』の一環として殺害されたユダヤ人は、350万人と推定される。犠牲者には、ユダヤ人の他にロマ(ジプシー)やソ連軍捕虜もいる。」

○はテレジン/テレジエンシュタット。□はウッチ/リッツマンシュタット (1939年11月までポーランド総督府の首都(それ以降はクラクフ))。

(出所) <https://www.jewishvirtuallibrary.org/map-of-extermiation-camps-in-poland>, accessed on April 7, 2022.



地図2 ヴァーナー裁定(1938年~1941年)によるハンガリーの獲得領土

(出所) “On this Day, in 1938: the First Vienna Award forced Czechoslovakia to surrender territory to Hungary,” by Kalkadeck Budapest Office, 2 November, 2021, from: <https://kalkadeck.org/2021/11/02/on-this-day-in-1938-the-first-vienna-award-forced-czechoslovakia-to-surrender-territory-to-hungary/>, presented by Prof. Dr. Eduard Nižňanský.